君の言葉にアンダーライン

ヒロユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君の言葉にアンダーライン

【Ｎコード】
Ｎ９３６６Ｇ

【作者名】
ヒロユキ

【あらすじ】
小さく、華奢で、幼い顔つきをした小野村薫は男らしくないことに劣等感を持った中学生。しかし彼は他人にはない、特殊な声まねの能力の持ち主だった。あるとき、想いを寄せている演劇部の少女、君恵が事故に遭い、足を骨折してしまう。それを聞き意気消沈する薫。演劇部は劇の君恵の代役探しに奔走する。だが、部長有川のある提案によって、事態は思わぬ展開に……。

第一話　山下とイタズラにアンダーライン（前書き）

初投稿です。ヒロユキと申します。
小説道の浅い、未熟者ではございますが、しばしお付き合いしていただければ幸いです。
（未熟者ゆえ、この前書き機能もどう使うべきなのか迷い、六話書いて、今頃付け足すという有様。これまでに読んでくれた方、ろくに挨拶もせず、すいません）
６／２　多少の修正をしました（ルビや会話文の修正など）。ストーリー自体はいじっていません。

第一話　山下とイタズラにアンダーライン

階段の踊り場、壁を背もたれにして、薫は軽く咳払いをした。俯き加減で喉元に手を当て、息を吐き、空気の通りを微妙に調節する。

「あ、あー」

声の高さはこのくらいだろうか。少し低いような気もする。しかし、隣に立っている山下の方を見上げると、彼は無言で頷き、親指を立てた。

「オーケー、オーケー。そのくらいで充分だ。問題ないぜ」

そう言って、調子よく頭を軽く叩く。彼は計画が上手くいくと確信して、まだ始まってもいないのに、すでに笑いを堪えているようだ。口の端が上を向いている。

「上手くいくとは限らないぞ」

薫は彼の興奮に水を差す言い方をした。

「馬鹿言え、佐々木の奴だってこの前騙せたじゃねえか。あいつは全然疑わずに付いてきたんだぞ。もっと自信持てよ。な、堂野もそう思うだろ？」

山下は傍の階段に座って、指折り何かを数えていた長身の少年に訊いた。彼は右手の指を見ていて、こちらの会話など上の空だったようで、

「……うん、何？」

と我に帰った様子で返事をする。

「小野村の技術がすごい、っていう話だよ。お前もそう思うか？」

面倒くさそうに山下が説明した。

「ああ、そうかもしれないな……どうでもいいけど」

「どうでもいいは余計だ」

呆けた様な堂野の言葉に対し、山下がツッコミを入れる。そして、薫に向き直り、

「とにかく、上手くいくはずだ」

といまいち説得力のない励ましをした。

「はあ、失敗しないといいけど」

薫はそれに溜息を吐いて応じる。

午前中の授業が終わった昼食時間だった。教室内は生徒達の話し声が飛び交っている。薫が机の上の教科書を収め、給食までの時間を隣の堂野と談笑していると、そこに割り込んできた人物がいた。

それが、斜め後ろの座席に座っていた山下である。

彼は背後から耳障りに手を鳴らし、薫と堂野の会話を遮ると、当然のことのように薫の机の上に腰掛けた。

「小野村君、元気？」

などと顔をのぞきこんでくる。

薫はその馴れ馴れしさにむっとした。教師が居るならば、机の上に乗ることに対して注意してもらうことも出来るだろうが、あいにく担任の今田先生は不在だった。

「元気だけど、どうかした？」

素っ気無く返答する。

「お前に頼みたいことがあるんだよ。ちょっと話を聞いてくれないか？」

そう言って、彼は薫の頭をぐるぐると撫でた。まるで自分の弟に接しているかのようだ。

薫はそうされることに慣れていた。同じクラスの人間に年下のように扱われることに対して、である。

その第一の原因が薫の容姿だ。背が低く、華奢で、顔が小さく、どちらかと言うと女の子っぽい。薫としては自分なりの努力をして、身長を伸ばそうと試みているのだが、今のところそういった努力が功を奏している様子はない。おまけに声変わりをしていない高い声のため、子供っぽさ、女の子っぽさに拍車がかかる。

それにいつも堂野と一緒にいることも原因だった。堂野は、一目見れば分かるのだが、薫よりも背が高い。いや、薫だけでなく、他のクラスの男子よりも比較的背が高いのだ。体は多少細いが、どちらかと言えばがっしりとしている。そして、薫と違って声変わりが終わり、大人の男性特有の低音で太い声の持ち主だ。

このように記述されると明白で、正反対の特徴を持った二人が横に並んで歩くとどうなるかは想像がつくと思う。
お互いの特徴が際立つのだ。これも薫が幼く見られる大きな原因だ。まるで、でこぼこお笑いコンビのようにも見える。実際、クラスではそんな名前でこそこそ呼んでいる連中もいた。まあ、それは薫にとって大した話ではないのだが。

「なんだよ、話って？　すぐ済む話なのか？」

薫は山下の手を上手く振り払うとそう訊いた。

「小野村にかかれば大したことじゃない」
「なんだよ」
「実験に付き合ってもらおうかと思ってさ」
「実験？」
「そう、小野村の能力を使った、価値ある実験だよ」

能力、と言われて一瞬戸惑ったが、すぐに合点がいく。薫には少し変わった特技があったのだ。世の中にはこれが特別上手く、人に見せることで商売が成り立っている人たちもいるほどのものである。
薫はそれが人よりも抜きん出ているところがあった。しかし、特にそれをおおっぴらにひけらかしてしるつもりはなく、むしろ隠しているくらいなのだが、なぜかクラスの人間（特に男子）はそのことをよく知っている。

とにかく、山下はその特技で何かをして欲しいようだった。薫としてはあまり良い予感はしない。厄介事に違いないのである。
即座に断わろうとした薫だったが、

「じゃあ、給食食べたら一階の西階段の前で待ってろよ」

と山下に先を越されてしまう。そして、そのまま彼は教室の外に出て行こうとした。

「お、おい、ちょっと待て」

呼び止めるが、彼は聞こえてない振りで、「実験の準備してくる」と意気揚々と廊下の向こうに消えていった。

こてん、と力なく頭を机に倒した薫は、隣でいつの間にか文庫本を広げている堂野に顔を向けた。

「堂野、どう思う？」

「……ううん、ギャグにしたら１２点」

彼は本を閉じて真顔で答える。どうやら彼は、薫の言葉をギャグだと思ったらしい。

堂野にはしばしば空気が読めないときがある。しかもそれを冗談でやっているのか、本気でやっているのか、分からないのだから困ったものだ。

薫は半ば呆れながら、

「違うって、今の山下の話だよ。もしかすると、またアレをやらせるつもりらしい」

と説明する。

すると、彼は落ち着いた様子で言った。

「別にいいじゃん、いざとなったらあいつを楯にして二人で逃げよ

う」
「軽々しく言うけどなあ……」
「大丈夫だって、ああいう人間って一度痛い目見ると懲りるし。もし、薫が共犯にされそうになったら俺が上手く説明するよ。そのための第三者としてついて行くから」
「堂野、本当か？」

薫は恩に着ると彼の手を取って握手する。

「ああ、あいつは一度言い出すと止まらないからな」
「ありがとう、我が友」
「いいって、そんなこと。それに、いい暇つぶしになりそうだし」

薫はそんな彼に感謝を示しながら、再び席に戻った。しばらくして、給食の配膳が始まり、クラスの人間がそれを囲みながら団欒を始める。その中で薫と堂野は早めに給食を平らげ、教室を出て、山下との待ち合わせの場所に向かった。
そして、現在に至る。

山下は曲がり角から顔を出して、様子を窺っている。彼が見ているのは近くの職員室のドアだった。
他の時間帯なら、教師や生徒の出入りは頻繁なのだが、今はお昼の休憩時間。廊下にも人の姿はほとんど見受けられない。先ほど、数名の女子が不思議そうに薫たちの脇を通り抜けていった程度だ。
そんな場所で、薫たちはある教師の登場を今か今かと、待っている。

「たぶん、もうすぐだ。村松のやつ、次の授業の準備をするために、必ず理科準備室に行くんだ」

彼がそう囁いたときだった。
職員室の扉がガラリと開いた。そして、扉から顔を出したのが、目的の人物だった。理科の教師、村松先生である。厳格そうな黒縁の眼鏡をかけ、鼻の下と顎に立派な髭を蓄えた中年の男性教師だった。
なにやら、戸口に立って後ろを向き、
「私は先に失礼します」
と他の教師に告げているのが分かる。
薫ははっと息を呑む。同時に隣の山下がぐっと肩を掴んでくるのが分かった。きっと逃げ出さないように押さえているのだろう。
村松先生は小脇に出席簿のようなバインダーを抱え、向きを変えてこちらに歩いてきた。
「小野村、今だ」
山下に促され、薫は息を吸い込む。目を閉じて、声のイメージに意識を集中した。そして、口元に手を当て、
「村松先生、ちょっと」
と呼びかけた。しかし、その声はいつもの薫の声とは違う、大人の女性の声にそっくりだった。甘えたような色っぽい声でしゃべる音楽教師、井上先生の声まねをしたのである。
「井上先生？」
それに対し、村松先生はピクリと反応する。歩みが止まった。ど

うやら、薫の声を本人と思い込んだようである。上手くいった。

「こちらです、こちらへ」

村松先生は声のする方を確認するようにきょろきょろと辺りを見回し、そして、薫たちの方へ向かってきた。

「どうしましたか？」

と怪訝そうな顔をしている。

それを確認して、山下は薫の襟首を掴み、階段を駆け上がった。途中、段に座ったままの堂野も手招きして、付いて来るように指示する。彼は渋々ながら、腰を上げ、階段を上ってきた。

「おい、早くしろって姿を見られるとまずいんだから」

山下は小声で堂野を注意するが、そうしているうちに曲がり角から村松先生が現れる。誰も居ない事に気づいて、首を捻っているようだ。

「むーらまーつせんせ、こっちです」

階段の手すりの下に隠れていた薫がすかさず、猫なで声を出す。若くて、モデルのようなスタイルをした井上先生は時々、男性教師に対し、こんな喋り方をするので、特に違和感はないはずだ。

もちろん、山下はその点を充分承知した上でこの実験、もとい、いたずらを計画しているはずである。

案の定、村松先生はこちらを見上げて、階段を上がってきた。怪しがっている様子はない。むしろ、その目はこちらの方を見て、ぎ

らぎらと光っている。

「どうしたんですか？　井上先生」

「よし、いいぞ。大物がかかったぜ。このまま四階まで釣り上げるぞ」

にやにや笑いを抑えきれないままの山下は階段を上がっていく。薫と堂野もそれに続いた。

そして、一定間隔で薫は村松先生に同じ要領で声をかけ、上階に導いた。村松先生は階段を上るごとにその追ってくる速度が上がり、最後の方はなんとか追いつかれないようにとほとんど駆け足になっていた。

目的の四階まで辿り着くと、山下は右の通路に曲がり、すぐ手前の部屋に入り込んだ。入り口の上方に取り付けられたプレートは音楽準備室。薫たちもすぐ後に続いて部屋の中に身を隠す。

内部は準備室だけあって、窮屈な長方形の小部屋だ。雑多な書類が積まれた机の向こうにはトランペットや、打楽器などが無造作に置かれていたりする。壁際には本棚があり、おそらく楽譜などが収められいた。

普段はここにいることの多い井上先生は不在のようだ。山下はそれも計算に入れていたらしい。

「さあ、最後の仕上げだぞ。もう一度、村松の奴をここに呼ぶんだ」

薫は首肯すると、僅かに開けられたドアの隙間から、

「せーんせ、今なら誰もいませんから早く来てください」

とどめの一声を掛ける。
薫からは村松先生の様子は見えないが、きっと目を血走らせているに違いないと思った。いやらしい声が聞こえる。
「そこですかあ？」
足音が近づいてきた。
「これで済んだぞ、俺たちはどうするんだ？」
山下に訊ねると、彼は懐から取り出した紙切れをドアの位置から見え易い机の端に貼り付け、立ち上がった。
「こっちだ」
彼が指差す先には、準備室と音楽室をつなぐ扉がある。薫と堂野は顔を見合わせてお互いに頷くと立ち上がって走った。そのとき、すでに山下は先に防音性の厚いドアのノブを回していた。
薫たちが音楽室の中に逃げ込んで、数十秒後だった。準備室の扉が突然開いた。中から飛び出してきたのは、肩をいからせ、眉間に皺を寄せた村松先生だった。鼻息が荒い。右手にはなにやらくしゃくしゃに丸めた紙切れを握り締めている。準備室で彼を怒らせる何かが発生したことは疑いようがなかった。
そのまま何かを怒鳴るかと思われたが、教室の様子を見て、動きがはたと止まった。場の空気を読み、怒りの言葉を飲み込んだようだ。周囲をきょろきょろと見回し、軽い咳払いをして、ネクタイを正す。

彼の目の前にはそれぞれの楽器を持った吹奏楽部の面々が真剣な面持ちで並んでいたのだ。

「村松先生、何か御用ですか？」

そう訊いたのは薫たちではない。教卓の前でタクトを握っていた芦沢という女子生徒だった。

彼女は吹奏楽部の部長で、この昼休憩の時間を使って他の部員と共に、こうして音楽室に集まっていた。なぜなら、昼の休憩時間、音楽室は吹奏楽部練習となっているのだ。

つまり、村松先生は吹奏楽部の練習中に教室に闖入（ちんにゅう）してきたことになる。

「いや、別に用があったわけでは……」

「だったら出て行ってくれませんか？」

言ったのは、山下だった。吹いたこともないくせに、トランペットを握っている。ちなみに薫はドラムの前で、堂野は壁際でシンバルを持っている。

薫は練習を邪魔されて、さも大迷惑という感じで先生を睨んでみた。

「す、すまない。練習中だったのだな」

「そうです。時間が残り少ないんで早く再開したいんですが」

これはクラリネットを持った男子生徒だ。苛立った演技が上手い。

「その前に一つ聞いていいか？」

先生は申し訳なさそうに人差し指を立てる。

「何ですか？」

「今、この教室に誰か入って来なかったか？」

「来てません」

ほぼ即答で部長の芦沢が答える。

「ほ、本当か？」

「練習中なんですから、入ってきたら私が注意してます」

彼女は威圧するかのように、先生に向かって一歩足を踏み出した。

「先生であっても、例外とは言えませんよ。もうすぐ文化祭なんですから」

すると、先生はたじろいで、

「分かった、すぐに出て行く。練習を邪魔して悪かった」

と素直にわびた。そして、頭を下げると小走りで教室の入り口から出て行く。薫は途中で彼が腑に落ちない様子で首を傾げるのを見かけたが、とりあえず、自分たちが本当の吹奏楽部員でないとはバレなかったようだ。

扉がゆっくりと閉まり、足音が遠ざかっていく。それを確認して芦沢が口を開いた。

「行ったわよ。これでいいの？」

「オーケー、オーケー。助かったよ」

山下が隣の生徒にトランペットを返しながら言った。

「ほら、小野村と堂野も行くぞ」

「ああ、うん」

そう返事をして、扇状に段々になった教室を降りていく。

「何をしていたのか知らないけど。もうこんなこと、これっきりにしてよね」

芦沢は迷惑だと言わんばかりの薄目で山下を睨みつけた。そんな彼女に対し、彼はへこへこと頭を下げる。

「分かってるって。今回は計画上ここに逃げ込むしかなかったんだ。本当に申し訳ないと思ってるよ。でも、皆協力ありがとう」

そう言って山下が両手を振り、お辞儀をすると教室中で拍手が起こった。まるで、一つのショーがたった今終わったかのようだった。

「ほら、集中！」

それを見かねた芦沢が鋭く号令をかけた。するとそれだけで瞬時に教室に緊張が走り、生徒達が楽器を構える。彼女がタクトを振り、静かに演奏が始まった。

「ひい、おっかねえな」

歩き出す寸前、山下が耳元で囁く。

教室を出ると、薫から長いため息が出た。

「はあ、緊張した」

胸に手を置いて、大きく肩を上下させる。そんな薫の頭に山下が手を置いた。

「よくやった、小野村。やっぱりお前は天才だよ。あんなそっくりに女の声まねなんてできるやつ、そうザラにはいねえぞ。すごい声帯持ってるんだな」

「そうかな？」

「そうだよ、自信持てよ」

褒められて嬉しくないわけはないが、何分、いたずらに利用されているわけで、素直に喜べないのが本心だ。中途半端に「ありがとう」とつぶやく。

「山下、もう帰っていいだろ？」

堂野が訊くと、彼は「ああ、ご苦労さん」と携帯電話を見ながら言った。その様子を不審に思った薫は何をしているのかと覗こうとした。

「何してんだ？」

「なあに、さっきの村松の様子を携帯の動画で録画しておいたんだよ。途中からは声の録音にしたけど、しっかり撮れてるみたいだぜ。見ろよ、この鼻の下伸ばしたやらしい顔。傑作だな」

彼はくっくと笑う。

「それにさっきの怒った顔も見たか？　俺が準備室の机に紙を貼り付けておいたのよ、『残念でした、井上先生はいません。このエロじじい』ってな」
なるほど。先ほど村松先生はその紙を握っていたのだ。
「そりゃ、憤慨するわな」
「だろう？　ようし、今からこの実験の結果を皆に送信しなくちゃ……って、何するんだよ、堂野」
見ると、山下が取り出していた携帯電話を堂野が奪い取っていた。それを持った手を高く伸ばしている。背が高いのでそうなると山下の手も届かない。
「送信するんじゃなくて、このデータを削除しろ」
堂野は淡々と命令する。
「はあ？　どういう意味だよ」
薫も同感だった。いつもはのんびりしている堂野だが、意外にもこういういたずらは見逃せないのだろうか。
手を掲げたまま、堂野は言う。
「そういう意味だ。なぜならお前がこれを他人に流出させると厄介なことになる」
「なんで？」
「こんな証拠品がなければ、お前が勝手に流布させる噂が広まるだけで済む。村松先生にとってもプライドがあるだろうし、周りが騒いだところで、そんなものは根拠も何もないと否定できる。だが」
「だが？」

「列記とした証拠が残っていると状況が変わる。お前がそうしてデータを皆に送信したりすると、だ。先生が知ったら、その情報の発信元を探そうと躍起になるだろうな。さすがにそれを無視するわけにもいかないだろうし。捕まったら、教師の信頼を落とそうとした悪質ないたずらとされて、ただじゃ済まされないだろう」

確かに彼の考えには説得力があった。逆にそのデータがなければ、村松先生が探そうとしても自分たちをいたずらの犯人と断定することも出来ないわけだ。

それに対し、山下は反撃の構えを見せる。

「そ、それくらい分かってる。だから、信用できるやつにしか送らないって」

「それを本当に保障できるのか？　そして、もし仮に、先生にお前の仕業とバレたとき、俺と薫が共犯として捕まらないと言えるのか？」

堂野の言葉に山下はぐっと息を詰まらせる。

「どうなんだ？　保障できないなら、いますぐに消去してくれ。残そうとするなら、今、ここで携帯をへし折る」

「分かった、分かったよ」

迫ってくることはないが、有無を言わせない堂野の言及に渋々ながら彼は頷く。

「消去するよ、すればいいんだろ？」

そして彼は堂野から携帯を取り戻すと、すぐにボタン操作でデータを消去した。

「ちぇっ、せっかくの実験結果なのに」

名残惜しそうに彼は携帯電話を閉じた。後ろからそれを堂野が見ていたので、こっそりデータを残すことなんてことも出来なかったはずだ。

薫はそんな堂野を見て、感心する。いつもは何も考えていないように見えて、時々、こうして彼は鋭く物事の危険性を見抜いていることがあるのだ。なんだか、とても頼もしく見えるのである。それは薫にはない部分で、実はこっそり憧れていたりも、する。

「さ、教室に帰るか、薫」

「そうだな」

親友に肩を叩かれ、薫も同意した。

「はあ……あくびがでた」

見上げると、堂野は気の抜けた表情のまま口を手で塞いでいる。

第二話　放課後の遭遇にアンダーライン

町の北側にある踏み切りを越え、頭を垂れた稲穂のそよぐ田んぼを横目に見ながら、山の手に向かってしばらく歩くと、少々古びた白い大きな建物が見えてくる。そこが県立綾坂中学校だ。

今年で創立７０周年を迎える、地元では名の知れた学校で、付近の住民達からは綾中とか、綾坂など親しみのある呼ばれ方をされる。

全校生徒は４００名ほどで、年々少しずつ生徒数は減少傾向にあるのだが、今のところ、どうにか創立当初の一学年４クラスという状態を保持していた。

校内には体育館であったり、広いグランド、隅っこにはテニスコート、プールなどの設備もあり、普通の学校と特に変わったものがあるわけではない。しかし、特筆すべきなのは、校外の裏山に「学校林」と呼ばれる学校が所有する森林があることだろう。

全国的に見ても、学校林を所有している学校というのは希少らしく、校長を始めとする教師たちは生徒が忘れた頃にたびたび自慢めいた話をすることがある。

だが、いくら教師たちがそれを誇りに思っていても、普段生徒たちはそこへほとんど向かうことはない。年に数回の清掃活動と、卒業生が記念の植樹をする程度だ。生徒達にとっては、あってもなくても同じであり、どうせなら「学校遊園地」でもあればいいのに、と実現不可能な夢想事に溜息をつくのだ。

それでは仮に、生徒達に「自分の学校の自慢できるところは？」と聞くと大半の生徒はこう答える。

「そうだなあ。森が近いし、空気が新鮮！」
「丘の上に建っているから、景色がいいわ」

統計を取ると、特に後者の意見が多い。綾坂中学校はそれくらい眺めの良い場所に立地しているのだ。
確かに、校舎からはその眼下に広がる田園風景と建物が密集した都市区、その向こうで空と交わる紅葉の始まった山々は、絶景とは言えないにしても、絵になる景色であった。
そして、今ここにその美しい景色を校舎の窓際でひじを突いて眺めている小柄な少年がいる。小野村薫だ。

授業が終わり、担任の今田先生がだらだらと喋るだけのホームルームが済んでしまうと、掃除当番を除いて、大半の生徒は教室を出て行ってしまう。そんな中、薫はぐずぐずと通学用のカバンを背負ったまま、窓の桟から腕を投げ出すようにぶらつかせていた。

「うう、暇だ」

日直だった堂野が日誌を職員室に提出に行ったのは五分前のこと。彼と一緒に帰宅しようと考えている薫は教室に堂野が戻ってくるのを待っているのだった。
眼下に広がる校庭では、野球部のランニングが始まっていた。その横ではサッカー部がリフティングやパス回しの練習をしている。その掛け声と笑い声がこちらまで聞こえてきた。

薫はクラブに所属していない。バリバリの帰宅部だ。それは堂野も同じで、ほとんど毎日、薫と彼は一緒に下校している。
クラブに入っていないことに大した理由があるわけではない。現

在、薫は二年生だが、入学時、様々なクラブから勧誘活動を受ける内に、どこへ入るべきか決めかね、なんとなく入部のタイミングを逸してしまったのだ。つまりは、その、優柔不断だったわけである。

堂野に至っては、その長身に目を付けられ、様々なクラブから引く手あまたの状態であったにも関わらず、やる気がなく、全てを断わって帰宅部となった猛者だった。

思えば、その頃から薫と堂野は同じ帰宅部としての交流が始まったのだ。

「小野村、帰ろうぜ」

声を掛けられ、背後を振り返ると差し込む夕陽に目を細めた堂野が立っていた。

「待ってもらって悪かったな」

「いいよ、それくらい」

薫は首を横に振る。一緒に帰りたかったので、謝られることではない。堂野が荷物を持つと、掃除をしているクラスメイトに手を振って、教室を出た（その際、じゃあなチビ助、と揶揄した生徒がいたが、薫は無視した）。

階段の踊り場まで歩くと、堂野に最近購入したばかりのゲームソフトの話を始めた。よくあるＲＰＧなのだが、ダンジョン内での謎解き要素が多く、行き詰った箇所で堂野の知恵を拝借しようと思ったのだ。

「何度やってもロウソクの火が消えるんだ。そこをどうにかしないと扉が開かなくてさ」

薫は状況を簡単に説明した後で、お手上げだと肩をすくめてみせる。

それを聞いた堂野は、

「……そうだな。空気の流れがあるのかもしれない」とつぶやく。

「空気？　風で火が消えるってことか？」

それは考慮に入れていなかった。

「薫はその小部屋から出るたびに邪魔な障害物を動かしていたんだろ？　もしかすると、それによって部屋に風が送り込まれていたのかもしれない」

「なるほど、確かにそうかもしれないな。家に帰ったら試してみるか」

問題の解決に目処がついたため、なんだか足取りが軽くなった。うきうきとした気分で昇降口を目指す。

だが、びっくりしたのは職員室の前を通ったときだった。すぐ真横のドアが突然開き、中から不機嫌そうな顔つきをした村松先生が出てきたのだ。昼間のことを思い出した薫はすっと背筋に寒気が走った。隣の堂野も同じだったかもしれない。

彼は一瞬目の前に立っていた生徒二人に驚いた様子だったが、一瞥したあと、すぐに階段の方へ歩いていった。薫が思うに、少しも愉快そうな顔はしていなかったようだった。

通り過ぎてから、薫が言う。

「はあ、心臓が縮んだぜ」

「ああ。だけどあの様子なら今のところあれが誰のいたずらだったかは分かってないようだな」
「そうだといいけど」
明日山下にはきちんと釘を刺しておかなければ。ともかく当分の間、村松先生の前ではあまり目立つ行動は避けようと心の中で誓った薫だった。

そして、堂野と昇降口の手前まで来たときだった。今度は別の意味でどきりとした出来事があった。
「あ、小野村君、それに堂野君も」
背後から突然声を掛けられたのだが、薫にしてみればそれだけで、ぐっと息が詰まるような、耳の近くがそっと熱くなるような、そんな感覚に陥ったのだ。
本当に素敵な声をしている、と薫は思う。
振り返ると、そこにはやっぱり、彼女がいた。薫の隣のクラスの須藤君恵である。
彼女は淑やかに笑みを湛えてこちらに歩いてきた。流れるような黒髪は肩の辺りまで伸ばし、可愛らしい八重歯が微笑んだ口元に覗いている。
それを見ただけで薫の体は緊張する。
「ああ、えっと。やあ、須藤さん」
言ってから、我ながらぎこちない返事だ、と薫はくすぐったく思う。
堂野はというと、

「どうも、堂野です」

と真顔で低レベルなギャグを吐いている。君恵は唐突なギャグに意表を衝かれたのか、口元に手をやって笑った。

「ハハハ、何それ？」

「大したことじゃないよ。堂野って普段お笑いなんて見ないって言うから、俺がギャグを作ってやったんだよな、な？」

いったい何をごまかしているのか、堂野が勝手に言ったことに、なぜか薫はそんな説明をしていた。

「へえ、小野村君が作ったんだ。結構面白いと思うよ」

「え、本当に？」

これには驚く。そんなことで褒められるとは思わなかった。

「うん、堂野君が言うと、なんだが意外って感じで」

「そうかな？」

ふと、照れながら隣の堂野を見上げると、三白眼でこちらを睨んでいる。目の前で強盗犯を捕らえられ、手柄を奪い取られた警官みたいだった。薫はすまない、という意味合いを込めてそっと目配せした。

「それで、俺たちに、何か用？」

「あ、別に用があったわけじゃないんだけど、たまたま見かけたから声を掛けたんだ。何か急いでた？」

滅相もない、と首を振る。薫としては彼女が自分に声をかけてくれただけで嬉しかった。

「ああ、もしかして、これから部活だったり？」

薫は君恵が演劇部に所属しているのを知っていた。

「そうそう、もうすぐ文化祭だからね。今は練習の真っ最中。ステージで発表するんだよ」

彼女はよくぞ聞いてくれましたという感じで、目を輝かせる。心なしか、前のめりになってきたようだ。

「劇？　何をするの？」

「白雪姫。いかにも王道な劇って感じだけど、それはそれでいいでしょ？」

彼女に同意を求められ、薫は大いに頷く。

「うん、いいんじゃない、白雪姫。それで、須藤さんはどんな役なの？」

すると、彼女は一瞬言葉を噤んだあと、ゆっくり口を開いた。

「それがねえ、実は、私が白雪姫の役なんだ」

彼女はまるで周囲を憚るように控えめにそう言ったが、その役をやれることにこの上ない喜びを感じてるようだった。無意識に顔をほころばせていることがその事を物語っている。なんと言ってもヒロインだ。演劇部員からしてみれば、誇りに思うべきことなのだろ

う。

「すごいじゃん。本当に？　おめでとう」

薫は思わず拍手する。

もしそうであれば自分も嬉しいと思っていたが、まさか本当に主役とは。

「へえ、そうなんだ」

口調は平坦だったが、堂野も驚いた様子で手を叩いていた。

「たまたま運が良かったんだよ」

彼女は恥らうように視線を逸らせる。

「君恵、そんなところで油売ってないで、もう行くよ」

すると、どこかから声がした。振り向くと、昇降口の奥、隣接する体育館に続く渡り廊下の手前で、一人の少女が手招いている。眼鏡をかけ、長髪を後ろで一まとめに結んでいる。どこか余裕で偉そうな話し方には聞き覚えがあった。

「ああ、久美ちゃん。了解」

君恵はその少女に手を振る。

「ごめん、練習があるからもう行くね」

「分かった。それじゃあがんばってね」

本当はもっと話していたいのだが、練習が始まるとあっては仕方がない。薫は潔く引き下がる。
彼女が背を向けて歩いていくのを見送っていると、隣の堂野が肘でつついてきた。

「何？」

もしかすると、さっきのギャグのことを怒っているのかと思ったが、違った。

「あの子は誰なんだ？」

どうやら堂野、君恵が向かっている先にいる少女が気になっているようだ。

「三組の子だよ、有川久美さん。演劇部の部長をやってるんだって」
「ありかわ、くみ……」

ぼうっと彼女を見ている彼に対し、薫は吹くの袖を引っ張り、耳を貸せの合図をした。あまり意識したいことではないが、彼がしゃがまないことには耳元に口が届かないのである。

「彼女だけど、あまりいい噂を聞かないんだ」

薫はひそひそと話す。

「というと？」
「その、腹黒いというか、えげつないというか、自分が決めたことは最後まで何をしてもやり通す主義らしい」
「ふうん。まあそれはそれで部長に向いてそうだけど」

堂野は特に気にしている様子はなかったが、彼女が周囲の人間から恐れられているのは事実だった。正直、あまりお近づきにはなりたくない。以前、彼女にちょっかいを出した男子生徒の話を聞いたことがあるが、凄まじいまでの彼女からの報復にあい、その生徒は土下座をして許してもらったという。

「友人として忠告しておく。あまり近寄らないほうがいいぜ」

「ああ、覚えとく」

薫はふと二人での内緒話を廊下の隅にいる有川に悟られたような（そんなわけはないが）気配を感じて、慌てて回れ右で後ろを向いた。下駄箱から靴を取り出し、履き替える。早くこの場を離れようと思ったのである。

しかし、歩き出そうとしたとき、再び背後から声が聞こえた。薫は瞬時に察知する。

君恵の声だった。

「小野村君に堂野君、それじゃあ頑張ってね」

彼女からのエールである。

しかし、帰宅部の人間はいったい何を頑張ればいいのだろう。一瞬理解に苦しむが、とりあえず薫は手を振っていた彼女に精一杯手を振り替えした。

なんて澄んだ綺麗な声だろうと、薫は一瞬浮遊した心地だったのだ。

頑張ってね、か。

薫は渡り廊下に消えていく彼女を見送りながら心の中でその言葉にそっとアンダーラインを引く。

第三話　薫の憂鬱にアンダーライン

他人の声まねが上手くなったのはいつからだったのか、と周りから問われると、薫はいつも言葉を濁らせてしまう。

幼い頃に見ていたアニメのものまねをしてみたのが一番最初だとか、ラジオのＤＪの珍妙な喋り方が耳に残っていてそれを自分でも実践してみたとか、猫が大好きで一緒にいつも過ごしているうちにいろんな鳴き声が出せるようになったとか、そんな適当な嘘をついてなんとかやり過ごしてきた。

薫にとって、声まねが出来るようになった理由とは、誰にも知られたくない極秘事項だった。

もしも誰かに知られてしまったら、と思うとぞっとしてしまう。このことに関しては親友である堂野にすら告白したことはなかった。きっと気味悪がられてしまうに違いない、という不安があったのだ。それに、何より死にたくなるほど恥ずかしいと薫は思う。

そもそものきっかけは今から数年前に遡る。まだ薫が小学生だったころである。自分と同じクラスにある日転校生がやってきた。

それが、須藤君恵である。

「こんにちわ、皆さん。転校してきた須藤君恵です」

薫は今でもはっきりと思い出すことができる。それが教室に入ってきた彼女の第一声だった。

そして、そんな彼女に薫は一目惚れ、もとい、一聞き惚れとでも

言うのだろうか。その透き通るような、まるで鈴の音を思わす綺麗な声に胸を貫かれた思いだったのだ。

その声を他のクラスメイトはどう感じたのかは知らないし、分からない。特に反応をしていなかったところを見れば、どうとも感じなかったのかもしれなかった。

けれど薫にとって、それは、まるで天使の声のようにも聞こえたのである。過言だろうか。いや、そうではない。

なぜなら、あの時確かに薫は彼女に恋をした。

同じ教室内で聞く、彼女の笑い声を聞くだけで幸せな気分になれたし、話しかけられれば、鼓動の高鳴りを自覚した。これを恋と言わずして、なんと呼ぶだろう。

そして、いつしか薫は彼女が喋る言葉に、無意識にアンダーラインを引くようになったのだ。

「アンダーラインを引く」

それはどういうことか、と言われれば説明に困るが、薫の中で起こっていることを一番しっくりくる表現で表すとそうなる。

ええっと、彼女の言葉を会話の中からピックアップすると言えばいいか。たぶん、そういう感覚なのだろうと薫は思う。脳にそれを蓄積させ、録音をするみたいなことだ。

そして、その能力は、薫が学校から帰宅し、自室に戻ったときにいつでも彼女の言葉を脳内で再び取り出すことが出来た。いつでも彼女の声を聞くことが出来るのである。

「人間テープレコーダー」と表現してもいだろうが、なんとなく薫は違和感があると思っていた。どう言えばいいのか、まったく不思

議な能力である。

いったい何が原因でそんな能力が目覚めたのかは知らないが、薫はそれを駆使するようになった。さっきも言ったように、君恵の言葉にアンダーラインを引くようになったのだ。

アンダーラインを引くのは本当に何気ない言葉だと思う。

朝、登校してきたときの「おはよう」だったり、帰り際の「バイバイ」、他には「私もその番組みてるんだ」とか、そんなものもあった。そういったものを会話から抜き出しては、脳内で繰り返し聞くのである。

断わっておくが、もちろん薫はよく理解している。それは自分の行動を傍から見たときに発生する変態性のことである。自分の今までの行動を客観視してみて、気味が悪いと薫は自覚していた。好きな子の声を頭の中で再生して聞いているなんて。これじゃ、変態だ。本当に変態だ。

でも、誤解しないで欲しいのは、この能力をいやらしいことに利用しようとしたことなど一度も無い。微塵もない。純粋に彼女の声が好きで、聞いていたいのだ。こればかりは信用してもらうしかないが、「断じてない」と薫は誰に弁解しているのか、そう思っている。

ともかく、薫がそうして言葉にアンダーラインを引けるようになるのとほぼ同時に、声まねが出来るようになった。それが、声まねの始まりだ。

彼女以外の人間にその方法を応用し、言葉にアンダーラインを引くようになってから、自分の声でそれを再現可能なことを発見したのである。

薫は医者ではないし、体のつくりや仕組みに詳しいわけではない。しかし、声まねとアンダーラインの能力に関してはつながりがあるというか、相互に作用していることに気がついた。オーディオ機器で例えるなら、アンダーラインが入力だとすれば、声まねは出力といったところだろうか。

そして、最初は不慣れだったその能力も、精神集中を行うことによって精度を増していった。今では、男の声であろうと女の声であろうと、かなり広範囲のまねをすることができる。それは薫としても自信を持って言える。

しかし、そんな薫にも唯一納得のいく声まねが出来ないものがある。

それが、須藤君恵の声だった。彼女のような透明性の高い声はどうイメージしようとも上手く再現することが出来なかった。

きっとあの音質は彼女だけが唯一所持した天賦のものに違いないと薫は思っている。そして、そのことを知り、ますます彼女に魅力を感じるようになった。

だが、その想いとは裏腹に、薫は依然としてその想いを彼女に伝えることが出来なかった。一年が過ぎ、二年が過ぎ、中学校に上がっても、普通に話すときでさえ緊張してしまうという有様である。

全くもって度胸がない。

馬鹿にするなら馬鹿にしろ、笑いたければ笑うがいいさ、と薫は誰に向けているつもりなのか、そう思っている。

でも、そんな薫でも弁解したい部分はある。薫には彼女が振り向

いてくれるだけの魅力がない、と考えているのだ。それが彼の自信を支えてくれない。だって、背は低いし（下手をすれば彼女より低い）、体つきも子供っぽい（声もそうだ）、周りにはそれをからかう輩はいるし、もう恰好悪い。

そんな自分に彼女が好意を寄せることなどまずありえないと思うわけである。

だから、今日も薫は自宅に帰って牛乳を飲むと、自室で回転椅子に後ろ向きでまたがり、アンダーラインを引いた言葉を目を閉じて繰り返し聞くのだ。

ともかく、以上のことを考慮してもらえればわかると思うが、これが声まねが出来るようになったきっかけを語りたがらない理由である。

「堂野までとは言わないけれど、もう少し、背が高ければなあ」

自室の天上を見上げてそう彼はつぶやく。

暇になった薫はしばらくしてから、階下のリビングに向かい、ゲームを起動させると、続きからやり始めた。

堂野に言われた点を考慮しながら、なぞを解く。すると見事、彼の指摘した通りだった。

先の扉が開き、嬉しかったことは確かだが、なぜか素直に喜べなかった。

おそらく部屋に戻り、たまたま自分のコンプレックスを思い出して、憂鬱に染まっていたせいなのだろう。村松先生を怒らせたことも記憶の隅で関係しているかもしれない。

薫は大きく溜息をつくと、そのまま背中から床に倒れこんだ。そして、気がつけばそのまま眠っていた。

第四話　放課後の二人にアンダーライン

週が明け、吹く風に色濃く秋の気配が混じり始めると同時に、本格的に文化祭の準備が始まった。

生徒会からのお達しが全校に行き渡り、連日のように、クラスの出し物はどれにするだの、材料は何が必要かだの、役割の振り分けはどうするだのと、ホームルームでの話しあいは時間延長の傾向にあった。

その一番の原因は役割への立候補が容易に決まらないことだろう。

他の学校ではどんな風に決まるのかは知らないが、綾坂中学校では往々にして、クラブ所属者は面倒な役柄からは除かれることが多い。そうなるとその面倒な役割に抜擢されるのは誰かと言うと、帰宅部のような、比較的放課後の束縛のない人間と相場が決まっているのだ。

手を挙げようという勇気ある生徒が出現しない限り、結果はそうなる。薫の一年前の経験上、それは間違いないと言い切れる。

そして、案の定、今年もクラス全員が嫌いな食べ物を皿の端に寄せるかのような、難航した役割選出の結果、薫と堂野は材料の確保という役割を担うこととなった。

なんとなく自分に勤まる気がしないと地味に抵抗を続けていた薫たちだったが、周囲のクラスメイトからの「お前ら、どうせ暇だろ？　ごちゃごちゃ言わずにさっさとやれ」という無言のプレッシャーに薫たちの牙城はばらばらと瓦解していったのだった。

「まあ、仕方ないよなあ」

ほぼ確定の立候補の手を挙げた後で、薫は隣の堂野に嘆息交じりの小声で言った。

「文化祭の成功のためには皆で協力しないとだめだろうからなあ」

薫と同じように手を挙げている堂野ものんびりと同意の頷きを返してきた。

「立候補は小野村君と、堂野君ですね。他にはいませんか？」

教卓の前でクラスの代表委員が、部屋中を見渡して聞いている。黒板には「材料集め」の文字の横にすぐさま薫たちの名前がチョークで書かれた。

「他にいなければ、これで決定としますが、異論のある人はいませんね？」

代表委員の呼びかけに、皆は嬉しそうに頷いている。ようやく無限に続くかと思われた話し合いが終了するのだから、当然だろう。

しばらくの沈黙の後に、

「では、これで決定とします」

と宣言される。

すると、薫たちの名前の上に、女子生徒が小さく花のマークを付けた。

そんな、当選の決まった政治家じゃないんだから、と猛烈にツッコミたくなるが、薫は目を閉じて机に臥せった。

「それでは、先日話し合って決まったように、一組の出し物は『お化け屋敷』ですので、各自、今日からそれぞれの準備を始めてください」

それでは、解散。

その言葉と同時にクラス全員が解放された喜びに歓声が上げた。拍手している者もいる。ばらばらと皆が席を立つ音が聞こえ、皆が教室を出て行く。

臥せっていた顔を上げ、堂野の方を見ると、彼は眠そうに目をこすり、大きくあくびをしていた。どうやら、彼にとってこの時間はかなり退屈なものだったらしい。

いつもより、幾分も眠そうな顔をしているように見える。

「それで、今日はもう帰るか？」

薫は椅子に座ったまま足をばたつかせる。

「一応、役割は決まったけど、まだやることもないよな」

材料を集めるという役目は物品の受注があってはじめて動くのである。まだ具体的にクラス内で出し物の準備が始まって時点では、必要になるものも断定できないわけで、することはないはずだった。

だが、厄介なことは一旦製作が始まると、怒涛の勢いで物品の注文が入り（それはもう、休み時間になる度に）、あちらへこちらへと奔走しなければならなくなる。

特に今回はお化け屋敷が出し物であるため、衣装や雰囲気作りの

ための装飾など、用意するものはかなりありそうである。
最終的にはてんてこ舞いとなり、わけがわからなくなることも茶飯事だった。そのため、毎年生徒から忌避される役割なのである。
「きっと今年も地獄だろうなあ。製作が遅れてぎりぎりになる奴らが出ることは疑いようがないし」
予測では、おそらく大半の生徒が直前にならなければ本腰を入れないだろう。
落胆をしている薫を尻目に堂野はなにやら机の中から数枚の白い紙を取り出した。さらにカバンからは筆記用具も持ち出して、何かを始める様子である。
「何するんだ？」
薫は椅子を寄せて、覗き込む。
「どうせ仕事をするんなら、楽なほうがいいだろ？　だから、そのための秘策」
「秘策？」
「ああ、これから注文書を作るんだ」
そして、堂野は自信満々に何かを書き始めた。
「なるほどな、こうすれば自分たちのするべきことが明白になるってことか」
数分後、教室の後ろの掲示板に背伸びしながら用紙を貼り付けて

薫は感心する。
堂野が作った注文書と言うのは、文化祭で様々なグループで必要になったものを一つずつ自由に記入してもらうものだった。
堂野が白い紙にものさしで表を書き、項目として、「必要なもの」と「注文者の名前」、それから「いつまでに準備して欲しいか」というものなどがある。つまりクラスメイトは薫たちに直接注文をしにくるのではなく、この注文書に記入してもらうというシステムをとるのことにしたのである。
しかも、堂野は丁寧にも「緊急を要する注文」という表を用紙の下部に設け、注文者にはきちんとした理由を書いてもらうことで、優先順位も決め易くしていた。
その上、注文受け付けの締め切りまで明記されている。これならば、文化祭直前までぐずぐずと製作を続けている生徒達からの頻繁で急を要する注文も防ぐことができる。
「でも、勝手に締め切りを決めて批難されないか？」
薫は不安になって堂野に訊くが、彼は飄々として、
「決めてはいけませんなんて誰も言ってないだろ？　それに、こっちには早めに行動を始め、準備を円滑にすすめるため、という列記とした理由がある。だから、むしろ感謝されるんじゃないか？」
とそう説明した。
「なるほど」
やはり堂野は頭がいいな、と薫は納得した。

再び、堂野の注文書を見て、確かにこれならば、効率も格段に上がるし、なにより分かり易いだろうと思った。

しかし、考えてみれば、当たり前と言えば当たり前の方式ような気もするが、薫は今までこんなやり方をしている人間を見たことが無かった。

「なんで今まで誰もこうしようとしなかったんだろう？」

疑問に思ってそう訊いた。

「さあね、皆、そんなこと適当でいいと思ってたんじゃないの？注文が来たらそのとき対応すればいいと思ってたんだよ」

「ああ、言えてる」

だから、今まではやることが後手後手に回って、大変だったのだ。

「物事はどう前もって準備するかによって、ずいぶん取り掛かりやすくなると思うんだよ。そうすれば、どっしりと構えていれる。よく言うだろ、転ばぬ先の杖さ」

ふうん、と薫は画びょうで用紙を留めている堂野を見上げる。いつもぼうっとしているようだが、それを信条にしているからこそ、準備が行き届き、ゆっくりと過ごしているのだろうか。堂野はただ気が抜けているのではなく、余裕を持って行動しているのかもしれないと薫は思う。

すると、堂野はちらりと薫が留めている用紙を見やり、

「薫、それはもっと上がいいよ」

と注意してきた。
その指摘に薫は自分の目線の高さに用紙を持ってきていたのに気がついた。
「あ、ああ。ごめん、背が低いから、つい……」
クラスの人間の背丈を標準にするならもう少し高いほうがいいのだろう。ぼんやりしていた薫は苦笑いした。
それに対し、堂野は一瞬、息を詰まらせたようにして、
「あんまりマイナスに考えない方がいいよ」
とぽつりと言った。
「え？」
「その、背が低いとか、さ」
「あ、うん」
言ってから、苦笑いした自分の顔はそんなに暗かったのか、と不安に思った。数日前の憂鬱を思い出す。心の内の感情が、知らず、滲み出しているのかもしれない。
「そうだよな、身長なんて俺がどうこう出来るものじゃないし、深く思い込むだけ無駄ってもんだ」
ごまかすように、明るい声で言った。画びょうをずぶりと壁に突き刺す。
すると、堂野は用紙の紙を伸ばし、

「もっと明るく考えてさ、自分のいいところを少しずつでも見つけていくといい」

と言った。

本当に真剣に言っているのか分からないようなあっさりとした言い方だったが、薫にはそこに彼の優しさが潜んでいるのに気がつく。それが、直感で分かったのだ。

「……」

堂野を見上げたまま、一瞬言葉を失う。

「偉そうだけど、俺からのアドバイスだよ。薫にはそんなことで暗くなってもらいたくない」

「うん。堂野、ありがとう」

そう素直に感謝すると、堂野は珍しくも恥ずかしがっているのか、視線をあらぬ方向に向けた。

「た、大した、ことじゃない」

と変にどもる。

一息をついて、ごまかすように

「よし、今日はこれで終わりにしよう」

と言った。

そして、最後に画びょうで留めると、堂野は自分の作業を誇らしげに見つめた。

薫もそれに習って、用紙を見つめる。

ほほお、と眺める。

教室はすでに薄暗くなり始めていた。

それからタイミングを測ったように、学校のチャイムが鳴り響く。

第五話　雨降りの悲劇にアンダーライン

その日、天気予報通り朝から降り出した雨は、先ほどから横風を受け、成す術もなく翻弄されながら地面を打っていた。コンクリートの上にはいくつもの水たまりが出来ている。

薫はそれを店の中からガラス越しに見つめていた。

時折、強い風が吹きつけ、雨粒がガラスに当たり、弾けて小さく音を立てている。

その様子を観察しながら、薫は帰り道のことを考えていた。この様子では荷物も自分たちも無事では済まされないだろう。

つい、数分前までは小降りで、傘を差す必要もないほどであったのに。

「絶対に靴はびしょ濡れだな。それは免れない」

薫はぼやく。

そして、視線を落とし、持っている商品カゴの中身を確認した。そこには文化祭の出し物で使用する様々な小道具が放り込まれていた。

ガムテープに油性マジック、折り紙に録音用のＣＤ、トイレットペーパーや磁石、その他もろもろ。薫がもう片方の手に持っているメモには他にも購入すべき商品が羅列されていた。

気を取り直し、それに目を通しながら、商品が陳列された棚の間を進んでいく。

学校から程ない場所にあるホームセンターだった。値段もそこそ

こ安く、商品のバリエーションも豊富ということで堂野が前から目を付けていた店である。

今日はそこへ堂野とともに注文のあった品物を調達するために出かけてきていた。

数日前に堂野が提案した注文書のシステムは滞りなく機能していて、さっそく準備に積極的な女子のグループからの注文を受けていたのだ。

「ええっと、次は……つっかえ棒？　いったい何に使うんだろ？」

不思議に思った薫はメモを折り返してみた。そこに書いてあった所望する理由には「暖簾を使用するため」とある。

なるほど、暖簾を使ってお化け屋敷の雰囲気を作るためか。そうすれば光を遮断し薄暗くできるし、客の視界も妨げ、脅かしやすくなるといった利点もあるのだろう。

納得した薫は、つっかえ棒を探して歩く。その途中で通路を曲がってきた堂野に出くわした。

買うべきものは見つかったか、と問うと、彼は適当な様子で頷き、かごを示すように軽く持ち上げた。

「とりあえず、一通りは揃えたよ。薫はどう？」

「あと少しだよ。揃えたらなるべく早く帰ろう。予報で言ってたけど、確かこの雨、これから夜にかけてもっとひどくなるんだろ？」

「うん？　そうなのか。俺、あんまり天気なんて気にしないから。正直、雨に濡れてもそんなに嫌じゃないし」

おいおい、そんな心構えで風邪をひいたらどうするんだ、と薫は薄目で彼を見る。これから

文化祭に向けて本格的に忙しくなるというのに、堂野が寝込んでしまっては、薫としてはかなり心細い。
思えば、堂野はここへ来るときも傘を持っていなかったことに気づいていた。

「手ぶらだから変だと思ったけど……」

それを指摘すると、

「傘なんて、普段は親が渡してくるから持っていくんだけど、今朝は両親とも用事でいなくてさ、面倒でテレビも見なかった」

どうにもやる気のない彼の口ぶりに薫は肩を落とす。

「出来れば、俺の傘で一緒に帰ってもいいんだけど、さすがにこの雨じゃ被害がただではすまないだろうし」

薫は逡巡してから、堂野にビニール傘が置いてあった場所を教えて、購入するように言った。
堂野は、「別にどうでもいいんだけど」と不服そうにつぶやいていたが、

「どうでもよくない！」

と薫が語気を強めると、傘のコーナーを目指して歩いていった。

見送った薫は残りの品物を大急ぎでかごに入れるとレジに向かった。先に会計を済ませていた堂野はと言うと、風が吹いたらひとたまりもないような、脆そうなビニール傘を持っていた。
ううん、と唸った薫だったが、まあ、無いよりはマシだろうと結

論付け、何も言わなかった。

荷物が濡れないようにレジ袋の口をしっかりと縛ってから店を出た。

雨は先ほど大粒になってきたようだ。歩き出すと、薫が予想した通り、ものの数分もしないうちに、靴の内部まで水が浸入してきた。踏み出すたびに、ぐじょぐじょと不快な音を出している。

見上げた先、空を駆けるほどのスピードで流れていく黒い雲は途切れる気配を見せていない。時折道路を疾走していく車たちの水しぶきにも注意しながら先を急いだ。

そして、苦労した道のりもようやく終わりが見えてきた時だった。傘の下から覗くと、学校の手前の坂道が見えてきた。

「はあ、やっと到着だ」

隣の堂野を見ると、彼は制服の膝から下をしっかり濡らして、それでも、気にしない様子で口笛を吹いているようだった。風のせいで、その音も途切れ途切れに聞こえてくる。

薫たちは田んぼと山の斜面に挟まれた交差点の前に立ち、信号が変わるのを待っていた。

ふと前方の坂道の曲がり角から誰かが姿を現した。その道の向こうは中学校であるので、生徒の誰かなのだろう。間違いない、制服を着ているのが分かる。

最初は雨と風のせいでぼんやりとした輪郭しか分からなかったが、次第に近づくにつれ、その人物が薫のよく知っている人物であることが判明した。

須藤君恵である。

彼女は傘を飛ばされないように、身体に引き寄せるようにしっかりと掴んでこちらに向かってきていた。時々、周囲の安全を確認するようにそっと首を巡らせている。

「須藤さんだ」

薫が言うと、堂野も頷いた。

「みたいだね」

彼女は薫たちにまだ気がついていないようだった。おぼつかない足取りでゆっくりと歩いてくる。薫は彼女の様子を見ていてなんだか寄り添ってあげたくなるような気持ちになった。あの華奢な身体では途中で転んでしまうのでは、と不安になったのだ。

そして、彼女は交差点の横断歩道の前で立ち止まる。そのとき、薫は思いついて、彼女が信号を見上げたタイミングで手を振ってみた。

彼女もそれに気がついたようで、はっとして手を振りかえしてくれた。

それと同時に信号が青に変わる。

彼女は手を振ったままで、横断歩道に踏み出してきた。

そして、それからはまるで全ての物事がスローモーションのように見えた。

薫は視界の隅に角を曲がってきた黒い車が交差点に向かって走ってくるのを捉えた。ずいぶんと早いスピードだったと思う。

地面の凹凸に軽くバウンドしながら、獰猛な野獣の眼光を思わすヘッドランプが君恵を照らす。

彼女はまだこちらを見ていた。

一瞬遅れて、クラクションとブレーキ音。甲高い音が響き渡る。

嘘だと思った。

夢を見ているのか、と思った。

まだ夜でもないのに、である。

君恵の体が水しぶきの中に消えた。

傘が飛び上がり、風に舞って遠くに落ちていく。

車はハンドルを切って横断歩道の上、勢いを殺してスピンし、横様に停車した。

そして、静寂。

何事もなかったような静寂。

自分よりも先に堂野が走り出しているのが分かった。

傘とか、荷物とか、放り出してである。

おいおい、荷物が濡れたら女子に怒られるだろ、とか、薫はその瞬間のんきに思っていたのである。

目の前で、君恵が車に撥ねられたのに。

堂野が歩道の前で倒れている君恵に走っていく。

彼女が、倒れている。

冗談だろ、薫は今度こそ、自分の目を疑った。
その時になって思い出したように雨音と風の音が耳に戻ってくる。
そして、金縛りから解き放たれるように、薫は駆け出した。
同時に車の運転席から灰色のシャツを着た若い男性が飛び出してきた。いったいどんな顔をしていたのだろう。薫はよく見ていない。
そんなことより、
「須藤さん！」
そう叫んでいた。
堂野はすでに彼女の横にしゃがみこんでいる。その脇に薫もしゃがみこんだ。
彼女の目が閉じていたらどうしようかと思ったが、幸い、目は開いていた。
呼吸もしている。生きていた。
ただ、何が起こったのか分からないようで、朦朧としている。
頬に擦り傷が見えた。赤い血が彼女の白い肌に不釣合いだった。
「リュックがクッションになって、頭は強く打たなかったみたいだ」
堂野が言うとおり、彼女のリュックがちょうど枕になるように地面と頭の間にあった。
堂野は冷静だった。状況をしっかり観察している。そして、君恵の頬を優しく叩いて、自分が分かるか、と聞いていた。
「痛みはある？」

すると、目の焦点の合っていない君恵の表情が歪んだ。

「あ、足が……」

「足？」

見ると、彼女のスカートから伸びた片方の足が膝から下の位置で、少し不自然な方向に曲がっていた。骨折していることは誰の目にも明らかだった。見るだけで痛々しい。

「他には？　どこも痛くない？」

「だ、大丈夫だと、思う」

堂野はすばやく振り返ると、背後でどうすればいいのか、おろおろとしている運転手を見て、

「早く救急車を呼んでください！」

と一喝した。

それから、薫に向いて、

「とりあえず、須藤さんを安全な場所に動かそう。この場所じゃ、次の車が来てまた事故にならないとも言えない」

先ほどからろくに声も出ない薫は、必死に頷いた。堂野が頭の方に立ち、薫が彼女の足元に立った。

しかし、堂野が君恵の脇に腕を入れて持ち上げようとすると、彼女が呻いた。

彼女が呻く声なんて、薫は聞きたくなかった。胸が締め付けられ

るようだ。

「あし、足が、痛くて」

どうやら、骨折している部分に激痛が走ったようである。それに気づいた堂野はすぐにもう一度彼女を寝かせると、

「どうしようか」

と困った顔をした。

彼が何も思いつかないとなると、薫としてはいい考えなど思いつくはずもない。無意識に髪の毛を掻き毟っているが、混乱するばかりだった。

すると、堂野は何かをひらめいたようで、

「薫！　さっきの荷物の中につっぱり棒があったろ。それから、ミイラ男に使う包帯も俺の袋の中に入ってる。両方持ってきてくれ！」

と叫んだ。

「わ、分かった」

意図は分からなかったが、なんとか了解して、横断歩道の向こう側、自分たちが立っていた場所まで戻る。

「ええと、つっぱり棒と、包帯……」

そう復唱していないと、たった今言われたことも忘れそうだった。雨に晒されてすっかりびしょびしょになっているビニール袋から指示されたものを震える手で取り出す。

ふいに額からこぼれた水滴に気づいて、倒れている君恵に傘を差してやることを思いつく。傍らに転がっていたのは堂野のビニール傘だったので乱暴に掴んで立ち上がった。
自分の傘はどうやらどこかに飛ばされたようだ。
二本あってよかった。
君恵の元に戻ると、学校から下校中と思しき、他の生徒が堂野と話をしていた。

「とにかく、先生に早く連絡してほしいんだ」

そう必死に説明している堂野。
頷いた二人の女生徒は元来た坂を上っていった。彼女たちが助けを呼んできてくれるようである。

「堂野、持ってきた」

彼は薫から無言で道具を掴み取ると、まず、棒を彼女の足に添えた。どうやらそれを添え木
にして、包帯で足を固定するつもりらしい。彼なりの応急処置だ。
薫はその様子を見ながら、二人の上に傘を差して立っていた。
後から思い出してみれば、馬鹿だった、と思う。
その時、薫には呆然と倒れたままの君恵に対し、何かしら励ましの言葉でもかけられたのに。彼女の冷たい手を握って暖めることだってできたのに。
薫は、何も出来なかった。
ただ、目の前で起こっていることが、あまりにも唐突で、時間が止まったように立ち尽くしていた。
情けないほどに、自分は無力だった。

しばらくすると、学校の方から教師達や数人の生徒もやってきた。皆に抱えられて君恵は安全な歩道の上に寝かされた。
サイレンの音が近づいてきて、事故を起こした黒い車の運転手が慌てて車をどけていた。

到着した救急隊員が見たところによると、君恵は意識もはっきりしていて、足の骨折以外は特に大した外傷もないようだった。彼女が救急車に乗せられると担任の先生が一緒に乗り込み、近くの病院に搬送されていった。

とにかくこれから、骨折の様子や脳などに損傷がないかどうか精密な検査をするらしい。
その後に、警察のパトカーが止まり、中から制服を着た数名の警官が降りてきた。彼らは車の運転手はもちろん、薫たちもいくつかの質問をしてきた。

事故の瞬間の話だ。
これは明らかに自動車側の過失であったので、自分たちがどこでそれを目撃したか、とか、君恵はどの辺りに立っていたか、とか、よく覚えていないがそんな質問をされた。
だが、正直、そんなことはどうでもよかった。質問の最中、薫は君恵のことが気になって仕方なかったのだ。

自分の連絡先を答えて、

「今日はもう帰っていいよ」

と警官が解放してくれると、薫はすぐに堂野の服を引っ張った。

「須藤さんの病院に行こう」

しかし、それに待ったをかけたのが、担任の今田先生だった。
「小野村」
と強い口調で肩を掴んだ。
「今日はもう帰れ。たぶん、行っても面会は出来ないと思うぞ」
「でも、でも検査がどうだったのか、気になって」
「それなら、心配はいらない。さっき学校に連絡があったよ。足を骨折しているが、あとは体のどの部分にも問題は見当たらなかったらしい。だから安心しろ。今頃、ご両親が病院に着いているはずだ」
「そ、そうなんですか。よかった」
ふう、と胸を撫で下ろす。そのまま力が抜けてしまいそうだった。
それを聞いて堂野も安心したようである。
「命に別状がなくてなによりです」
すると、今田先生は優しげに微笑んで薫たちの頭を撫でてくれた。
「事故の後の処置がよかったと救急隊員の人が褒めていたぞ。満点と言ってもいいくらいの対応だったらしい」
「え、僕達が、ですか？」
「ああ、よくやった。人が事故にあって冷静に対処できる人間はそういない。お前達のおかげで事態が悪化することはなかったんだ。本当によくやったぞ」
今田先生はそのまま頭を軽く叩く。
しかし、褒められながら、薫は複雑な気持ちだった。なぜなら、

あの対応をしたのはほとんど堂野の指示があってのことだった。自分はそれに従っただけで、もし、あの場に堂野がいなければ、きっと慌てふためいていただろう。

自分は褒められるに値しない人間だった。

それを強く実感して、歯痒かった。悔しかった。

僕は違うんです、と手を振り払おうかとさえ思った。

そして、顔を上げた薫は、今田先生の背後に立って、沈痛な面持ちをした生徒がいるのに気がついた。

あの、演劇部部長の有川久美が立っていた。

君恵の友達であることは知っていたので、もちろん彼女を心配して、表情を曇らせているのは分かっていたが、それとはまた違う苦悩の表情も混ざっている気がした。

そこへ、一人の少女が駆け寄ってくる。

「劇のことですが……」

そんな言葉が漏れ聞こえた。

はっとした。

そうか、君恵は劇の主役だった。

足が骨折したあの状態では二週間後に待ち受けている文化祭に間に合わない。

その瞬間彼女は、劇の配役から除かれてしまったのだと、理解した。

彼女が楽しみにしていた、あの劇の配役から。

この雨降りの事故のせいで。

第六話　最低の日々にアンダーライン

「お前、何言ってんだよ」

山下が不可解なものを見ているかのように、怪訝な視線を向けてきた。いつものふざけた様子は微塵もなく、真剣に薫の言葉の真意が掴めないことに苛立っているようだった。

病室の前の廊下、簡易的なベンチがぎしりと軋む。
山下が俯いている薫に身体を近づいてきたせいだ。

「もう一回言ってみろよ」

薫としては何度でも言ってやるつもりだった。

「だから、あの事故は俺のせいだって言ってるんだ」

つぶやくように念じるように薫は断言する。

「はあ？　ふざけるのも大概にしろよな」

いつもふざけている山下にそんなことを言われるのは甚だ心外だったが、今はそんなことを彼に言い返せるときではないことは分かっていた。そもそも薫には何かを言い返せるだけの気力がない。

山下はベンチから立ち上がる。そして、熱くならないようにか、大きく溜息をついた。

「なんで、そう思う？」

その声は穏やかさを取り戻していた。
薫はゆっくり、事故の瞬間を思い出しながら話した。
「あの時、事故にあう直前に、俺が須藤さんに手を振ったんだ。それで、彼女の注意がこっちに向いた、もし、そうしなかったら、彼女は近づいて来てる危険な車に気づいていたと思うんだ」
「つまり、事故を未然に防げた、と？　そう言ってるのか？」
「それに、迫ってきた車も視界に入ってた。俺の判断が鈍くなけりゃ、彼女に危険を伝えられたのにさ。だから、それが出来なかった俺のせいだ」
見上げた山下の顔は呆気にとられているというか、薫の言葉を本気だと捉えてないのか、薄笑いをしているようだった。
「いったい、どんな理屈でものを考えればそんな結論に至るのやら……」
そして、彼は前にしゃがみこむと、俯いている薫の顔をのぞきこんできた。
「だから、小野村のせいじゃないって。あれは間違いなく信号無視で突っ込んできた車が悪い。間違いなく、な。事故を防げなかったことはお前が気に病むことじゃない。とんだお門違いってやつだ」
山下に慰められている、と分かった。それは嬉しかった。いつもお茶らけている彼でも真面目に誰かに優しく出来るのだと知った。
でも、薫としては、持論を押し曲げるつもりはなかった。誰が何を言おうと、断固としてだ。

「俺が悪いんだ、俺のせいで彼女は動けなくなった」

その言葉が何かの引き金になったようだった。山下の顔色がさっと変わった。すっと右手が伸びてきて、薫の胸倉を掴んだ。

強い衝撃。

壁に押し付けられたのだと分かった。

痛みで小さく薫は呻く。

「だから、何度言ったら分かる？　お前のせいじゃないって言ってるだろ！」

彼の声は病院に響き渡る大声だった。

何事かと周囲で気がついた看護師たちが駆け寄ってくる。

「わけわかんねえよ、お前。なんだよ、悲劇のヒーローのつもりかよ！」

彼の顔は怒りに歪んでいた。こんな彼の顔は見たことが無かった。なのに、薫はなんとも思わなかった。怖いという感情さえ、浮かんでこない。

突然の騒ぎに、近くの病室から顔を出している病人や、見舞い客の姿が見える。近寄ってきた看護師たちは山下の肩を掴んで、薫から引き離そうとしていた。

「何があったんだ。喧嘩なら外でやってくれ」

しかし、山下はその言葉を無視したまま、鼻息荒く薫の顔を見ていた。

「何か言え、この馬鹿！」

彼の唾が飛んできて頬を垂れる。でも、薫は何も言わなかった。無表情に山下を見返している。
すると、腕の力が抜け、薫の体は再びベンチの上に戻った。山下が説得を諦めたのか、それともか、本格的に薫のことを見放したのかもしれない。

腕を垂らし、止めに入っていた看護師や医師の手を振り払うと、出口の方へ向かって数歩歩いた。
そして、立ち止まると、

「お前、ここ数日変だぞ。俺にはお前がなんでそんなに思いつめてるのか、それが分かんねえ」

吐き捨てるようにそれだけ言って、彼の姿は通路の先に消えていった。
残された薫に看護師たちは大丈夫か、などと声をかけてきたが、

「放っておいて欲しい」

と素っ気無く返事をしておいた。心のうちで、どっかに行け、と思っていた。
しばらくしてから、山下の消えた方向から背の高い堂野が歩いてくるのに気づいた。薫を見つけ走ってくる。正直、今は彼の存在すら煙たかった。

「薫？」

そう呼びかけてきたが、返事をしないまま、首を僅かに傾けて反応を示した程度だった。

堂野は薫の前に立つと、数回何かを言いかけ、ためらって、それからしゃべった。

「山下の奴、すごい怒ってた」

「そう……」

「あいつから話を聞いた。ここで何があったのか、全部」

「そうか……」

そして、沈黙。

「薫、あのさ……」

「堂野、説教するつもりなら止めてくれ。今は誰の言葉も聞けそうにない」

薫は彼の言葉を遮って、拒絶した。

言ってから、さすがにこれには、堂野も自分に愛想を尽かすかもしれないと思った。勝手にしろと怒って帰ってしまうと思った。

しかし、堂野は静かに首を振り、こう提案した。

「なあ、少し、散歩でもしないか？」

事故の翌日の放課後、薫たちは文化祭の準備が一段落したのを見計らって、学校を抜け出して彼女の見舞いに行った。

近くの総合病院。

病院の受付で病室を尋ねると、愛想の良い若い看護師の女性が答えてくれた。

「西棟の３０３号室よ。実はさっき、診察に行ったんだけど、ちょうどご両親が帰ったところで、暇そうにしてたわ。きっと友達が来たと知ったら喜ぶんじゃないかしら」

十名以上の大所帯で病院に押しかけていた薫たちはその看護婦から、大騒ぎだけはしないようにと注意を受け、さっそくエレベーターに乗り込んだ。もしかすると、重量オーバーになるのではないか、と誰かが心配したが、なんとかエレベーターは作動した。

目的の階で停まり、我先にと友人たちは出て行く。

その中で薫は浮かない顔で堂野の隣に居た。確かその様子に気づいた堂野から、

「どうかしたのか？」

と訊かれたが、

「なんでもない」

と、そう返した。

だが、このときの薫の心情は間違いなく沈んでいた。ただ単純に事故のことを思い出して暗い気持ちになっていただけではない。

君恵に会うのが怖かったのだ。

彼女がどんな顔をしているのか、見るのが嫌だったのだ。

あの事故の後、薫は彼女が主役を演じる予定だった劇に出演することはほぼ絶望的だということを知った。なにしろ、骨折しているのだ。完治するまでにどう見積もっても一ヶ月以上かかるそうである。もちろん、仮に動けたとしても、松葉杖で舞台の上を歩き回ることは出来ないだろう。

突然の事態に、演劇部の部長である有川が奔走しているというこ

とも耳に入っていた。劇の代役を探しているらしいのだ。

当然、君恵も聞いているはずだ。

それを思うと、薫はやりきれない、眼を背けたくなるような気持ちになる。

彼女はその事実をどんな思いで受け取ったのだろうか。そして、今、どんな心持ちでいるのだろうか。

通路の先を進んでいくと、クラスメイトの話し声が聞こえてきた。間を置いて、笑い声も届いてくる。

病室の前、３０３の文字の横のネームプレート、「須藤君恵」の名前を見つける。個室のようだった。

歩みがためらいがちになる薫を気遣ってか、堂野が背中を押してくれた。

そして、入り口をくぐった先で、薫は事故後、初めて彼女の顔を見た。

窓際のベッドの上、友人たちに囲まれた彼女は笑っていた。まるで、何事もなかったように、手を叩いて。

足は痛々しく大きなギプスに固定され、頬には擦り傷を覆う絆創膏が貼られていたが、そのほかは普段の彼女と変わらない。

その無邪気さ、屈託のない澄んだ笑い声に、薫は嬉しいのか、悲しめばいいのか、よく分からなくなってしまった。その場に固まったまま動けない。

「あ、小野村君に堂野君」

君恵が、薫たちに気づいた。場が空気を読んでか、さっと静まった。彼女が手招きするので、おずおずとベッドの前まで歩く。

すると、彼女は垂れていた前髪を払い、

「事故の時は助けてくれたよね。本当にありがとう」

と丁寧に会釈をしてきた。

「あのとき、二人が居なかったら、私もっと大変なことになってたかもしれない」

そして、にっこりと微笑んだ。

薫は彼女の言葉を否定したかった。あれは違うのだと、薫は何一つ、君恵のために出来ていなかったのだと。

自分は意気地なしで、目の前で何かが起こると、パニックになって、何も分からなくなって、駄目な奴なのだ。それを自覚していた。

誰かが拍手をはじめ、それが次第に周りに伝播していく。

「よくやったぞ」などと褒めてくれるが、薫には受け取れない賞賛だった。

止めて欲しかった。

もう薫には真っ直ぐに君恵の顔を見れなかった。自分が虚構で作られた薄汚い衣装でスポットライトを浴びていることに誰も気づいていない。

その後ろめたさが、薫の首元にまとわりついて離れなかった。

その後の面会時間、薫は終始部屋の隅で女子生徒の話すどうでもいいテレビの話や、山下の根も葉もない噂話、そんなものに適当に相槌を打って後は、沈黙していた。

帰り際、一緒に帰ろうとする堂野に謝って一人で帰宅した。そんなことは初めてのことだった。堂野も困惑しているようだった。

でも仕方なかった。胸の内でのた打ち回る苦しみがふとした瞬間口を衝いて出てきそうだったのだ。

今日薫が実感したのは、惨めなほどの自分の弱さと正反対に光る君恵の強さだったのだ。

どうしてあんなに君恵が自然に振舞えるのか、不思議でならなかった。

なぜなら、薫は知っていた。

君恵があの劇の主役をどんなに心から喜んでいたか、演じることを楽しみにしていたか。

事故の数日前、薫は堂野を誘って彼女の練習を見学に行った。あの綺麗な声で台本を片手に演じる彼女は本当のお姫様のようだった。あの時、薫は彼女が本当に演劇が好きなのだと実感したのだ。

そして、事故の直前、最後に会ったときも、

「絶対に『白雪姫』見に来てね」

と念を押されたほどだった。

それなのに、どうして彼女は落ち込んでいないのだろう。どうして平気で笑えるのだろう。

自宅に帰って、悶々と薫は自室に籠もっていた。苛立ちながら考えていた。

自分が最低に恰好悪く思えてならなかった。暗い考えは夜が色濃

くなるに連れて、どんどんと心の中に蓄積され、重力を持ったかのように薫の身体を上から押さえつけているようだった。
アンダーラインを引いたわけでもないのに同じ言葉が何度も何度も脳内を行き来した。

「お前は弱い、最低の人間だ」

それは嵐の暗雲を連想させる妙に低い自分の声だった。もしかすると、知らず知らず自分の内で育ってきた劣等感の声なのかもしれないとも思った。

それから数日は、意気消沈して暮らしていた。山下が指摘していたのはそういうことなのだろう。
自分が悩んでいることを誰にも話さなかったから、余計周りの人間はおかしいと思ったに違いない。だから、優しく接してくれていたのかもしれない。

だが、結果的に薫はそれにも気づかず、山下を傷つけてしまった。
ますます最低な人間だな、と自嘲的に思う。

ああ、馬鹿な男だ、嫌気がさす、と。

俯いたままの薫の手を引いて、堂野が向かったのは、病院の非常階段の踊り場だった。散歩だというのに、歩いたのはせいぜい階段を上って扉を開けるまでの百メートルにも満たない距離だった。

「本当は屋上でも行こうかと思ったんだけど」

彼は鼻の頭を掻く。

「危ないから立ち入り禁止なんだってさ」
「そうか」
別に期待していたわけでもない薫は素っ気無い返事だ。適当にドアの付近で腰を下ろす。
堂野は錆の浮いた手すりに寄りかかり、景色を眺めているようだった。地上四階から眺める町の様子はそれなりにいいものだ。空が晴れていればもっと良くなるだろう。残念だが、今は曇っている。
こんな人気のない場所に連れてきたのだから、何か話すつもりなのだろうが、堂野は一向に話そうとはしなかった。身じろぎもしないで、薫に背を向けたままだ。
五分も経っただろうか。さすがにしびれを切らした薫は堂野に言った。
「用がないなら、俺は帰るよ。須藤さんにはよろしく言ってもらえないか？　病室に行けなくて御免って」
実は、あの日から薫は彼女に会うのが怖くて一度も病室に行けていなかったのだ。せっかく病院に来ているのだが、意味のない行動だった。
堂野から返事がない。生きているのだろうか。服についたほこりを払って立ち上がった。
「久しぶりに聞きたいな」
ドアのノブに触れたとき、背後から声が聞こえた。
「薫が俺の声まねするところ」

妙なタイミングでリクエストが入り、薫は戸惑った。

「まさかそんなことをさせるのに俺をここへ呼んだのか？」

「いいじゃんか。たまには聞いてみたくなったんだよ。薫の声まね」

「……やればいいんだな？」

薫はいったい堂野が何のつもりでそんなことをさせるのか、理解できなかったが、とりあえず、彼のいうことに従ってみた。

軽く咳払いして、喉の調子を整える。

「あー、あー」

いつものように、以前アンダーラインを引いていた彼の言葉のイメージを脳内で呼び起こした。そして、少し俯いて声を出した。

「それならからあげ定食でいいんじゃない？　なんていうかどうでもいいけど」

自分の興味のない質問をされたときの堂野の返答を想定してまねをしてみた。

「すごい、やっぱり似てるなあ」

彼は拍手をしている。

「自分の声をまねされて楽しいものか？」

薫は自分のまねをされるなんて考えるだけでも気恥ずかしいだけなのだが。

「他の人のまねもして欲しいな。例えば、生徒会長の高橋とか」
「高橋？」
「もしかして、出来ないのか？」
珍しく堂野が意地悪な言い方をする。
「そんなわけないだろ」
意地になって薫は答えた。
この声まねの技術は長年自分が研究を重ねて培ってきたものだ。こんなことが出来るのは学校に自分くらいしかいないと自負している。
もう一度声の調子を整える。
「あー、ごほん。生徒会長の、高橋です。き、今日は、晴天にめぐれ、恵まれまして、絶好の、体育祭日和となります、じゃない、なりました」
我ながら完璧な声まねだと思った。堂野を見ると、手を叩いて笑っている。
「すごいなあ、どもってるところまでそっくりだ」
「リアリティがあるだろ？」
「ああ、全く高橋そのものだ。じゃあ次は、吹奏楽部の部長さんやってくれ」
彼がタクトを振るまねをする。
「あ、ああ」

調子に乗ったのか、堂野は次々にリクエストをしてきた。薫としては断わってもよかったのだが、久しぶりに声まねを他人に披露する機会とあってか、悪い気分はしなかった。
自分が試行錯誤の上、手に入れた能力を評価されるのは気持ちがいい。

知らないうちに、堂野がリクエストを言う前に自分から声まねを始めていた。駆け込み乗車を注意する駅員や、球場に響くうぐいす嬢の声、日々の生活の中で取り入れた特徴のある声を次々に聞かせた。

「どうやらいつもの薫が戻ってきたみたいだな」

しばらくしてから堂野が口を開いた。途中から彼は一方的にしゃべる薫に相槌を打つだけとなっていたのだ。

「え？」

思わず、薫の動作が止まる。

「薫と俺じゃ、俺の方が無口だもんな。それが最近じゃ逆転してた。俺が何かをしゃべっても薫が話すのは二、三言。だからいつもより、一杯話して……これでも場が沈黙しないように結構気を遣ってたんだぜ」
「そうだったんだ」

そして、大きく息を吐き出して、自分の罪を認めるかのように、

「ごめん」

と一言謝った。ようやく素直になれたみたいだった。

「いろいろと自信喪失してたんだよ」

「自信喪失、か」

「ここ数日、自分の中で悩んでた。自分の弱さが浮き彫りになって、急にはっきりと認識できるようになって、それで、怖くなったんだ。周りには自分より強い人間ばっかで、こんなちっぽけな自分が到底太刀打ちできるような世界じゃないって思えてきてさ」

「山下に事故は自分のせいだって言ったのも、その理由からきてるのか？」

薫を気持ちを極力刺激しないためか、彼は控えめに訊いた。

「……自分が悪い空気の根源だって気がしてならないんだ。もちろん、冷静に考えれば、山下の言うとおりで、事故に俺の責任はないんだろうと思う。自信を無くして、少し自暴自棄気味になっているんだろうな、俺」

そして、余裕を見せるために、薫は苦笑いをしてみせた。でもそれはすぐに力の抜けた空しい笑いになってしまう。

胸の内にある濁った水は簡単に浄化されないのだろう。

そこで、薫はあることを思い出し、堂野に訊いてみた。

「そういえば、少し前に言ってくれたよな、堂野。自分のいいところを見つけろって」

「ああ、確かに言ったな」

薫はあの夕暮れの教室を思い出している。

「堂野は、俺のいいところって何だと思う。一つでもいいから、教えて欲しいんだ」
「俺が言うのか？」
堂野はきょとんとしている。
「他人の意見を聞くことで参考になるだろう？　ああ、俺、そういうところがあるんだってな」
「それなら、そうだなあ……」
彼は口元に手を当てて、少しの間考え込んでいたが、指を鳴らして人差し指を立てた。
「俺と友達になってくれたこと、かな」
「堂野と友達になったこと？」
「そうだよ、何か変か？」
「変というか、そんなことなのか？」
「重要なことだよ。薫が俺の友達になってくれたことはさ」
そして、彼は物思いに耽るような遠くを見るような目つきになる。
「きっとまともに友達なんて呼べる人間に出会ったのは薫が最初だと思うからさ。俺と話をするようになってくれた初めての人だ」
「そ、そうなのか？」
これには薫は目を瞠った。そんな事実は全く知らなかったのだ。
「正直、友達なんて別に必要ないと思ってた。一人で居たって、特に問題なく生きてきたし、これからもそうなんだろうなって思って

た。でも、薫が友達になってくれてその考えは変わった」
「どんな風に？」
「いや、なんていうか、上手く話せそうにないけど、楽しいんだ。薫と一緒にいれて、本を読むだけじゃ分からないような知らないことを一杯知ることが出来たと思う」

生き生きと話す堂野を見て、薫は不思議な気持ちになっていた。自分が堂野と友達になろうと思った明確な理由は思い出せなかったし、そこに重要なことなどないと考えていた薫にとっては新鮮な驚きだった。

「だから、薫には感謝してんだ」

そう言ってくれた彼に対し、自分が知らぬ間に、誰かのためになっていることだってあるのだと、薫は実感していた。自分の行動が誰かに作用して、その人を意識を変えているなんて、思いもしなかった。

そして、自分にも何か出来ることがあったのだと知って嬉しかった。

自分は何も出来ない、そう思っていたことは間違いだった。

「薫はそのままでもいい奴だよ」

堂野の言葉は背中を押してくれるようだった。

これまで鬱々と悩んできた自分を全て打ち払うことは出来ない。でも、少なくとも前に進むための準備が出来た、と薫は目を閉じて、思う。思い悩むのは、やーめた。

そう考えたから、堂野に感謝した。

「こっちこそ、ありがとうだ。亮介」

突然自分の名前を呼ばれた堂野は目を丸くしていた。これまで、薫が堂野を名前で呼ぶことなど一度もなかったのだ。当然の反応だろう。

「今日からは堂野のこと、亮介って呼ぶよ。そっちが俺のことを名前で呼んでくれてたのに、こっちは苗字っていうのは変だからな。やっぱり友人同士なら名前で呼び合うべきだろ？」

「ああ、俺もそれがいいと思うよ」

ほぼ即答で堂野は頷いた。

「これからもよろしくな、亮介。また助けてもらったよ。もうこんなことで悩んだりしない、誓うよ」

「そうか、ならよかった」

そして、薫たちは握手を交わした。改めてそんなことをするなど気恥ずかしかったが、それは、これまでの友情をさらに深く繋ぐために必要な一つの約束でもあった。

非常階段への扉が開いたのはその時だった。こんな場所であるから、昼日中、人の来る場所ではないはずなので、ぎょっとしたのは言うまでもない。

もしかすると、人の話し声を聞きつけた病院関係者がここには来るな、と注意をしに来たのかと思った。

しかし、ドアの隙間から顔を出したのは意外な人物だった。

「あら、こんなところにいたのね。小野村薫君」

そのどこか、人を見下しているような偉そうな物言いにはやはり聞き覚えがあった。眼鏡をかけ、その内側に鋭い眼光を光らす、長髪の少女。

有川久美だ。

「ど、どうして有川さんがここに？」

いまいち事態が飲み込めない薫。しかし、口ぶりからどうやら彼女は自分を探していたようだ。

「お友達の山下君から聞いたのよ。あなたがいま病院に来てるってね。私は君恵の見舞いもあったから都合がいいってことであなたを探してたんだけど。まさかこんなところにいるとはね、見つけるのに苦労したわ」

彼女は額の汗を拭う素振りを見せる。

「何か用、ですかね？」

訊くと、彼女はまるでそれが至高の幸福であるかのような満面の笑みを浮かべた。

「そうよ。とても重要な頼みがあってきたの」

同じクラスメイトでもない彼女がわざわざ自分に何の頼みごとをするのだろうか。薫には見当もつかない。しかも重要な頼みごとだと言う。

「な、何さ」
「いい？　よく聞きなさい」
彼女は薫の肩を掴む。そして、ふっと一呼吸するととんでもないことを口にした。
「あなたには、君恵の代わりに劇で白雪姫を演じてもらうわ」
さすがにこれには薫も卒倒するかもしれないと思った。予想外にもほどがある。
気が動転してしまった薫は、無意識に彼女の言葉にアンダーラインを引いてしまった。

第七話　有川の奇策にアンダーライン

小さい頃、よく薫は女の子に間違われた。現在の自分の容姿については以前、説明したが、幼いころの薫はそれに輪をかけて性別や年齢を勘違いされるほどのものだった。

写真を見せれば、十人が十人、女の子だと指を差したし、同じ年頃の女子のグループに見つかると決まっておままごとに付き合わされた。

他の男子は君付けなのに、薫はちゃんで名前を呼ばれたり、あるときなんか、親戚のおばさんに女の子ものの服を着せられかけた。その時は間一髪逃げ出したが、未だに心の奥のトラウマとなっている。ある意味散々な、幼年時代を過ごしたものだと我ながら思っている。

成長して、そういった男という性別を無視した扱いは軽減されたものの、小学生になっても、中学生になっても、一向に周りからの視線にはうんざりしていた。

少し廊下を歩けば、

「あの子、かわいい」

とか、そんな囁き声。

よっぽど、振り返って「俺は男だ」そう言い返してやろうかと思うこともたびたびだ。

前にも言ったが、背も低いため子供のように頭を撫でてくる奴らは居るし、弟扱いされたり、チビなんて呼ぶ輩は居るし。

俺が影でどれだけ、男として見られるようにと、努力しているの

か知ってるのかよ、と薫は、こっそり、叫んでいたりする。
思うに、つくづく自分は男らしさから見放された人間なのだろう。
でも、それでも、薫は今まで耐えてきた。この姿形という、神から賜りし逃げられない現実に真っ向に立ち向かって、今日まで生き抜いてきた。

そして、今、非常階段に立っている薫は、その結果がこれなのか、と目を塞ぎたくなる気持ちだった。

「お願い、君恵の代役をやれるのはあなたしかいないの」

いきなり現れた、それほど親密でもない女子から、劇で女役をやれと迫られている。
神が与えし試練、そういうものがこの世にあるのかはしらないが、もしあるのだとしたら、これはあまりにも酷ではないか。
劇の役柄とはいえ、ついに女になれと言われている。たちの悪い冗談だ。

「何を勘違いしているのか知らないけど、俺は男だぞ」
「もちろん、そんなこと分かってるわよ」

口を尖らせた彼女は、何をつまらないことを、と言いたげだった。

「じゃあ、言わせてもらうけど、女役っていうのは普通女がやるものって相場は決まってるだろ。生徒の中に他に女子は一杯いるし、演劇部だって他の部員がいるんじゃないのか？　それで何を血迷って俺のところに相談に来るんだよ」

薫は声を荒げる。

「だから言ってるでしょ、他にいないんだってば。本番までもう二週間もないのに見つかってないの。それも、なんと言っても主役の君恵の代わりをやらなければならない。それを考慮した上で、出来るのは今、他でもない、あなたぐらいなのよ」

熱弁を奮う彼女を前にして、薫は溜息をつき、お手上げだと、背後の堂野を見た。すると、その意を察してくれたのか、彼が一歩前に出た。

「あの、有川さん？」

「何、堂野君」

気だるそうに彼女の首が向く。

「その口ぶりだと、薫がどうしてもその役をやらなければいけないのには、きちんとした理由があるんだろ。まずはそれを俺たちに分かるように説明してくれよ。今の状況でやれって言われてやるやつなんていない」

「ああ！　そ、そうよね。私としたことが、慌てていて説明を怠るなんて」

すると、彼女は急に改まって咳払いする。

「えー、ごほん。もちろん、小野村君が適役なにのは理由があります。いい？」

「……」

「第一にして、最大の理由は誰も持っていない力をあなたが持っているからよ」

「力……ですか」
「そう、他人の声を忠実に意のままに再現できることよ。一種のものまねね」

薫はうんざりそうに肩をすくめる。
またしてもその力を利用する人間が出現するとは。山下だけで充分であったのに。

「それで？」
「もちろん、君恵の声に似せることが出来るはずよね？」
「出来ないことはないけど……」

薫は自信なさげに視線を足元に落とす。
確かに彼女の言うとおり、君恵の声をまねることは出来た。だが、それは薫が納得できるほどのでき前ではない。彼女のあの特別な澄んだ声を再現するまでには至っていないと思っていたのだ。つまり、自信がなかった。

「ねえ、やってみて」
「い、今ここで？」

薫から素っ頓狂な声が出た。

「私の聞いた噂によると、あなた、どんな状況でも、たとえ逆立ちしてたってできるんですってね。声まね」

いったい誰が流した噂だろうか。
大道芸人じゃあるまいし、逆立ちしても出来るなんて話、広めないでほしい。きっと山下辺りが調子に乗ってそれに加担しているに違いないと薫は予想した。

「ええっと」
「ほら、やってみせてよ」
有川に促され、渋々ながら薫は頷く。
意識を集中させ、いつもの要領で声を出す。
「こんにちわ、皆さん。転校してきた須藤君恵です」
ともかく、今自分が出せる精一杯のレベルで彼女の声を再現してみせた。やはり、納得のいくものではなかったが、それなりに似ているのではないか、と薫は思った。
有川を見ると、なぜか、きょとんと目を丸くして突っ立っている。
「もしかして、似てなかった？」
不安になりそう訊いた。
すると、彼女はふるふると首を振り、
「ま、まさか、これほどの精度とは思わなかったわ。あなた、天才？　いったいどんな喉の構造をしているのかしら？」
と感嘆の溜息を漏らしている。
「別にそんなに特別な人間じゃない。ちょっとずつ練習するうちに、いつの間にか出来るようになってたんだ」
「……それにしても、これほどとは。ますますあなたに代役をやってもらうしかないわ」
「ちょっと待て、まだ理由を全部説明してないだろ」

勝手に手を引っ張ってどこかに連れて行こうとする有川に薫は抗議する。

「なるほど、理由を全部説明したら代役を引き受けてくれるのね、そういう意味よね？　そうなればいろいろと手間が省けてうれしいわ」

彼女がにやりと不敵な笑みを浮かべる。

「そうとも言ってないって、それに手間が省けてってどうするつもりだったんだよ」

「だって、あなたはもうなんと言おうと代役確定だもの、今の声を聞いて迷いはないわ。だから、抵抗するなら、どんな手を使ってもあなたにやってもらう。その手間のことよ」

薫はごくりと唾を飲み込む。彼女の黒い噂が脳裏をよぎったからだ。

『自分がこうだと決めたら、どんな手段を使ってもとことんやりとおす』

彼女の言葉はなんらかの冗談ではすまされない、脅迫性を孕んでいるのを薫は察知する。

「ご、拷問とか？」

「何言ってるのよ、そんな物騒なことするはずないじゃない」

彼女の眼鏡の縁がきらりと光る。彼女が笑ったのが分かった。

なんでそこで微笑むんだよ。怖いだろ。

薫は必死にぶんぶんと腕を振り、彼女の手を振り切って後ずさっ

た。

「やめろ！」

「そんなに怖がらなくても」

「有川さん」

そこで口を挟んできたのは堂野だった。

「何、堂野君」

「話を進めてくれないかな？　他にどんな理由があるんだ？」

「あー、そのこと。それなら簡単よ」

彼女はどこか嬉しそうにそれだけ言って、薫の足元に視線を向け、じろじろと品定めをするように薫の頭までを観察した。顎に手を当てている様は練達の鑑定士のようでもある。

どうすればいいのか、たじろいだ薫だったが、彼女が何を言いたいのかは、もちろん想像がついた。

「だって、小野村君ってなんとなく、いや、かなり女っぽ……」

「ええい、みなまで言うなぁ！」

薫は瞬時に彼女の言葉を察知して有川の口を押さえる。

「――っぽは、はあ。なんだ、分かってるんじゃない。だったら話は早いわね。君恵の声をこれだけ再現できて、容姿も問題なし。言うことないじゃない」

「そ、それはそうかもしれませんがね」

「当然、オーケーしてくれるでしょ。あなた以上の代役はいないもの」

「……嫌だ、断わる」

薫はぽつりと拒否する。

「あら、どうして？」

「俺を馬鹿にしてんのか？　第一、この案にはそっちの都合だけで、俺の感情が無視されてる。男が女役なんてやってみろ、学校中に笑いものにされるに決まってるだろ。それに、そもそも俺は演劇部員じゃないし、この提案を拒否できるのは保障されて然るべき権利だ」

「ふむ。まあ、それも一理ある」

「一理も二理も百理もあるって。俺が正しいはずだ。あんたは知らないだろ、俺が今まで人並みの男として見られてなくて、どれだけ悩んでたか。今でも充分うんざりなのに、こんな、さらにその扱いを助長させるようなこと、協力できるわけないだろ！」

薫は間髪入れず、一気にまくし立てた。知らないうちに興奮し、鼻息が荒くなっていることに気がつく。

「亮介も何か言ってくれよ。こんなのおかしいって」

「うん、ああ、まあ確かに薫の感情を考慮すれば、いい気持ちはしないだろうな」

堂野はどこか、はっきりとしない態度でそう答えた。首を傾けて何か、考えているようだ。もしかすると、彼女の意見に賛同なのだろうか。

「小野村君」

すると、急に大人しくなった彼女がゆっくりと口を開く。

「なんだよ、もうやらないって決めたんだ」

「確かに、あなたがこの役をするのは苦痛なことかもしれない。でもね、私としても、簡単に引き下がれないのよ。これでも、演劇部の部長だし」
「……」
新たな抵抗の兆しを彼女から感じて、薫は口ごもる。
「責任があるの。一度やると決めた演劇を最後までやり通すっていう責任がね。このまま代役が見つからなければ、時間切れで、そのまま舞台が中止になるようなことはしたくない」
彼女はここで一度言葉を切る。
「動けない君恵だって、そんなこと望んでない。私は彼女から劇をどうにか続けて欲しいって頼まれたわ。彼女だけじゃない。他の部員だってこんな中途半端な終わり方、したくないって思ってるの。だから部長として、こうしてあなたに頼んでる。なんなら今ここで土下座してもいいわ、もう形振り構ってられないもの」
眼鏡の奥に光る、その演劇にかける情熱に燃えた瞳を薫はまじまじと見つめた。彼女は本気だ、と実感した。
それに気圧されて、薫は自分の意思が揺らいでいるのを感じた。
それに君恵のこともあった。彼女が劇を終わらせたくないと望んでいるなら、薫だってその望みを叶えてあげたい。
でも、さすがにこれは。
「薫、正直俺も彼女の提案に賛成だ」
「亮介まで」
「演劇部を救えるのは、今のところ、薫しかいないってことだ。俺

は薫の立場じゃないからこんなことを言うのかもしれないけど、力を貸してやってもいいんじゃないか？」
「おいおい……」
「お願い、小野村君」

有川はいつの間にか両手を組んで祈るように懇願していた。さすがにここまでされて断わっては薫としても後味が悪い。協力してもいいか、そんな気持ちにもなる。
しかし、もう一歩踏み出せないのは、やはり薫の根底で蠢く男としてのプライドだった。ここで引き受けてしまえば、もう引き返せないだろう。

男として、何か大切なものを失いそうで足が竦んでいるのだった。

「ねえ、だめ、なの？」

有川が瞳を潤ませて顔を上げてくる。くそう、ずるいぞ、そんな作戦。

「えっと、その……」

薫が言葉を濁らせると、その態度に腹を立てたのか、彼女は急に冷たい視線を向けてきた。何かを思いついたかのようでもある。

「やってくれないの、へえ。やってくれないんだ」
「ま、まだ何も言ってないだろ」
「早く決めてくれないと、あのこと、君恵に言っちゃおうかなあ」
「あのこと？」

首を傾げる薫には心当たりがない。

すると、彼女はイタズラっぽくにやりと笑った。

「何よ、しらばっくれちゃって」

「何のことだかさっぱりだ。須藤さんに言うことがあるのか？」

「ここで言ってもいい？」

「だから、何のことだよ」

有川は「了解しました」と数歩歩いて、手すりの近くまで行くと、振り返ってこう言った。

「小野村君って、君恵のこと好きなんでしょ」

時間が止まった気がした。開いた口がふさがらないとはこのことだろう。一気に心臓の拍動が激しくなるのを感じる。

そして口からは、

「な、な、な……」

という擦れた声が出た。

「そうでしょ？」

「薫、そうなのか？」

「な、なんでそのことを……」

確かに薫は君恵のことが好きだが、そのことは今まで自分のトップシークレットだったし、一度も誰かに話したことはない。それをまた、どうして有川が知っているのか、気が動転して事態を把握できなかった。

頬がぼうっと熱くなるのが分かる。

もしかすると、自分が君恵を見る目はそんなに分かり易く好意が表れていたのか？
それとも、もしかしてこの有川という少女、他人の心中をのぞき込める、そんな超能力があるのか？

見ると、彼女は大笑いでこの上なく楽しそうに手を叩いている。

「ハハハ、まさか本当に図星とはね」
「え、へ、どういうこと？」

訳がわからない薫はおろおろと堂野と有川の顔を交互に見る。

「はったりよ、はったり。なんとなく小野村君が君恵のことを好きなんじゃないかって、鎌かけてみたの。ふふふ、上手くいったわね。堂野君、聞いた？」
「ああ、『なんで、そのことを』って、言ってた」

ようやく、何が起こっていたのか、事態が飲み込めた薫は顔から火が出そうなくらい、羞恥の念にかられた。

「う、迂闊だった。俺の馬鹿！」

髪の毛を掻き毟り、地団太を踏む。しかし、時既に遅し。
腰に手を置いて、余裕を見せる有川は正に水を得た魚だ。鼻をつんと突き上げて勝ち誇ったように薫を見下ろしている。

「それで、どうする？　小野村君。君恵に胸に秘めた想いを暴露されるのがいいか、それとも、それをまだ胸に留め、劇で姫役を演じるか？　その二択よ」

「う、ぐう……」

彼女は決断を迫るように顔を近づけてくる。

「さあ、さあ、さあ」

「わ、分かったよ。やればいいんだろ？」

長年の秘密を自分の方から暴露してしまい、やけになっていた薫は、もうどうにでもなれ、と投げやりに了解した。

「ふふふ、やったわ。これで配役は問題ないわね」

その場で眼鏡の縁を押さえて高笑いを始める有川の横で、薫は足元に力が入らなくなるのが分かった。

いったい自分はこれからどうなってしまうのだろう。

へなへなと気を失うように倒れこむ薫を堂野が後ろから支える。

「大丈夫か？」

「亮介、もう俺ってお終いかな？」

いっそ、泣いてやろうか、そう思った。

第七話　有川の奇策にアンダーライン（後書き）

とりあえず、これで大体、考えている話の折り返し地点まで来ました。これから先は物語の核となる部分に入っていきます。
一段落ついたので、以前書いた部分を読み返し、修正、加筆していこうかと思っています。お読みになられた方で、矛盾している部分や言葉の使用法の間違い、アドバイスなどありましたら、お聞かせください。

第八話　演劇部の歓迎にアンダーライン（前編）（前書き）

一話で終わりたかったのですが、思いのほか内容が膨張してしまったので、分割して、とりあえず前半部分だけ書きました。

第八話　演劇部の歓迎にアンダーライン（前編）

翌日の放課後、クラスでの作業を早々に終え、演劇部の練習が行われているという体育館へと急いだ。

部長の有川から、出来るだけ早く集合するようにと、昼休みに呼び出しがかかっていたのだ。

その時まで、昨日の出来事は全て夢だったのではないかと思い込もうと、必死に暗示をかけていたところだったので、

「ホームルームが済んだら、走って来い」

という有川からの半分脅迫のような命令によって一気に現実に引き戻された薫だった。

いつもなら、堂野と共に一階の昇降口から帰るのだが、名残惜しくも今日はそこを素通りし、さらに先、渡り廊下を進んだ。

体育館の入り口は半分ほど開いていて、中から声が聞こえてくる。どうやら既に練習は始まっているらしい。

その声には本番に向かう覇気のようなものが漂っていて、薫は少し臆してしまう。

普段なら、この辺りまでバスケット部や、卓球部の練習に励む声が届いてくるのだが、この時期だけは特別に演劇部が場所を譲ってもらっているということだった。

短い練習期間であるため、それだけ熱が籠もっているのだろう。

「出来れば、あの扉をくぐりたくないんだけど」

渡り廊下で歩きながら、薫は隣の堂野にそんな弱音を吐く。

「でも、いまさら逃げられないだろう？」
「そりゃ、そうなんだけどさ」

もちろん、堂野が正しいのは分かっていた。しかし、もしかすると、じゃあ逃げるか？　と提案してくるかもしれない、という淡い期待を抱かずにはいれなかったのが薫の弱さだった。
このまま、文化祭に出て、女役を演じなければならないと思うと、憂鬱になる。
いくら、人助けのためとは言え、自分にはずいぶん荷が勝ちすぎている気は否めなかった。からかいの恰好の標的になることだってあるだろう。

有川は大丈夫だと言ってくれているが、本当に自分で勤まるのだろうか。
そんなことを思っているうちに、体育館の入り口に着いていた。上履きのまま、人のいないただっ広い空間へと足を踏み出す。

節電のためか、それとも、本番の雰囲気に似せるためか、明かりが点いているのはステージ場だけだった。そのため、辺りは暗い。
そして、そのステージでは、まさに今から薫が加わろうという劇の最中だった。

不安を煽るようなどろどろとした暗いＢＧＭが流れ、魔女役らしき、紺色のマントを羽織った少女が巨大な鏡を前に囁いている。白雪姫では、言わずもがなの有名なシーンである。
ステージ斜め上方から差すスポットライトの青い光がその様子を怪しく照らし出している。

以前、君恵の練習を見に来たときにはここまで本格的な演出はし

ていなかったので、薫はふっと立ち止まって一瞬見とれた。舞台ってこういうものか、と改めて思ったのだ。
まるで、どこか別次元の光景を切り取って、この世に再現するかのようだった。
すると、突然、スポットライトの明かりが消え、ステージ場の明かりに切り替わった。

「はーい、ストップ。一旦休憩ね。新人さんが来たみたいだから」

有川の声が舞台袖から聞こえる。それと同時に、演劇部員が了解する声が聞こえる。
「うーい」とか「へーい」そんな具合だ。

新人さん、とはつまり自分のことだろうから、どうすればいいのか、辺りを見回していると、ステージの上から有川が姿を現した。
片手をついてひょいと舞台から降り、こちらに歩いてきた。

「どう思う？」

彼女は開口一番、薫にそう訊いた。

「へ？」
「今の場面、劇のことを訊いてるの」
「ああ、いいんじゃない、かな？」

薫はこめかみの辺りを指で掻きながら答えた。すると、有川は腕を組み、ふうんと目を細めて薫を見た。

「１０点ね。誰にでも言える、ほとんど参考にならない無味無臭な感想。そんなもの必要ないわ」

突き放すような言い方である。

「……左様ですか」

げんなりして薫は俯く。

「次、堂野君は？」

彼女は隣の堂野に視線を向ける。堂野は少し首をうごかしてから、

「ううん、そうだな、俺はあんまり演劇なんて見ないけど、上手く魔女のおどろおどろしさが強調されてたんじゃないかなと思う。けど、気になったのはＢＧＭの音量を少し控えめにしたほうがいいかも。役者の台詞が少し聞き取り辛い」

有川は大きく頷く。どうやらその意見の仕方は気に入ったらしい。

「なるほど、それは舞台袖から聞いていたんじゃ分からない点ね。もう一度調整する必要がありそうだわ」

そして、振り向くと舞台の横の扉から出てきた少女を手招きして呼んだ。

「奥山さん。ちょっと来て」

はい、とよく通る返事をして、奥山と呼ばれたその少女が走ってきた。少し小柄で、ショートカットの髪を揺らしている彼女は、有川の前で立ち止まると、

「なんでしょうか？」

と訊いた。

「音響のボリュームのことで相談なんだけど……」

有川は彼女の耳元でそう小さく囁いている。どうやら、堂野に指摘された点をすぐに改善するように指示しているらしい。

彼女の方を見ていると、薫はふと誰かの視線に気がついた。それは、有川に耳元で囁かれている奥山という少女からで、有川が言葉を切るたびに、薫の方をちらちらと見ているのだ。

おそらくだが、彼女は薫が君恵の代役であることが分かったのだろう。ああ、間違いない。彼女の視線はどこか珍しそうな物を見ているようだったのだ。

薫は恥ずかしくなって体の向きをそっと反対側に向けた。きっと彼女は本当に代役が男子だと分かって、驚いているに違いない。嘘でしょ、と心の中で後ずさりしていることも考えられる。どっちにしても友好的な感情を抱いている可能性は低いと見ていいだろう。

でも、聞いてくれ、俺だって好きでやるわけじゃないんだ。やらないと秘密をばらされると脅されてるんだ、薫はそう弁解したい気持ちで一杯だった。

だから、変なやつだなんて……。

「小野村君」

「え？」

急に呼びかけられて振り向く。

「今から彼女が舞台の袖まで案内してくれるから」
有川が隣の奥山を親指で差す。すると、彼女は腰を折って丁寧な会釈をした。
「一年二組の奥山紗江と言います。よろしくお願いします」
「こ、こちらこそよろしく。二年の小野村薫、です」
おずおずと頭を下げる薫。
「えっと、こっちは同じクラスの堂野亮介」
「どうも、堂野です」
聞き覚えのあるとぼけた挨拶にツッコミたくなるのを必死で押さえる薫だったが、奥山はにこやかな笑顔のままで「よろしくお願いします」と再び会釈しただけだった。
もしかすると、冗談は通じないタイプなのだろうかと薫は思う。
「どうぞ、こっちです」
そして、彼女は先に見えるドアの方へ向かって薫たちを促し歩き出した。
しかし、そこで、薫は有川がついて来ていないのに気づく。
「あれ？　有川さんは来ないのか？」
「私は今から少し顧問の先生と話をしないといけないの。だから案内を奥山さんに頼んだのよ」
「ああ、なるほど」

顧問の先生への報告も部長の大切な仕事なのだろうと薫は納得する。

「じゃあ、しっかり彼女の言うこと聞くのよ。いい？　すぐに戻ってくるから」

そして、有川は聞き分けのない子供に釘を刺すように言うと、体育館の出口に背を向けて歩き出した。

「ええっと、こちらが舞台の横なんですけども」

手を伸ばして示しながら、先に歩いている奥山が説明する。

「このドア？」

「ええ、そうです。どうぞ」

「俺が開けるの？」

訊くと、立ち止まった彼女は頷く。そこに彼女のなんらかの作意が見えた気がするが、薫は構わずドアのノブに手を伸ばした。

「こんな場所、普段入らないからなあ。中がどうなってるのか気になってたんだ」

「同感」

堂野も首肯した。

ふっと息を吸い込んで薫はドアをゆっくりと開ける。

僅かに軋んだ音を立てて、ドアが開いた先は、短く細い通路が伸び、その先が舞台の高さまでの階段となっていた。どこか倉庫内に入ったようなほこりっぽい匂いがする。

「階段を上ったところが舞台の袖ってことか」
確認するように薄暗い通路に踏み出す。
そして、階段を上りきろうとしたときだった。
突然、全ての明かりが消え、辺りが真っ暗になった。これでは、真っ直ぐ歩くことが出来ず、薫はすぐ横の壁を手探りで探す。
「あれ、停電？」
「そんなまさか、誰かが消したんだろ？」
堂野は落ち着いている。
「奥山さん、電気のスイッチは？」
しかし、背後にいた彼女からの返事はない。
「あれ？　いない」
そう言ったのと同時に、暗闇の中で何かがこそこそと動いているのを薫は察知する。板張りの床の上を上履きが擦る音が聞こえるのだ。それも、一つや二つではない。他の演劇部員だろうか。
「すいません、誰か……」
言いかけて、急に強い光が現れた。
「うわっ」
まぶしくて目を押さえる。

細めた目から垣間見るにどうやら薫たちはライトに照らされているのだ。正面に大きなスポットライトが見える。カラーフィルムが貼り付けられた盤が回転し、色とりどりに薫たちを光らせている。さらに続いてドラムロール。

「なにこれ？」

そう口走った途端、今度はステージのライトが灯った。そして、薫たちはいつの間にか複数の人間によって周りを囲まれているのに気がつく。

「演劇部へ、ようこそ！」

誰かが高らかに大声で言うと、一拍置いて、クラッカーの炸裂する音が鳴り響いた。そして、拍手が巻き起こる。

「え、え、え？」

突然の事態にその場から薫は動けなくなった。複数のクラッカーのカラーテープを頭から被り、身動きが取り辛いという理由もあった。身体を揺すって振るい落とす。

見渡せば、十数名の生徒たちが目を輝かせてこちらを見ている。

「見よ、勇者のご登場だ」

大げさな素振りで、体格のいい男子が歩み寄り、薫の頭にポンと手を置いた。

「我らがヒロイン、君恵嬢が不慮の事故で動けなくなってから、すでに五日。ああ、おいたわ

しきや、君恵嬢。そして、それにより、我ら演劇部もかつてない存亡の危機に見舞われた」

舞台中に響き渡る声で彼はオーバーなほどの身振り手振りで悲しみを体現していた。

「嗚呼……」

その場の演劇部員が仰々しく全員悲しげに胸に手を置いて目を伏せる。

なんだこの茶番は。

薫は心の中でつぶやく。

「ろくに飯も喉を通らず、練習もどこか上の空、そこへ女王有川の怒声が飛ぶ。絶望の日々は我らを打ちのめし、不幸の懸崖(けんがい)から無慈悲にも突き落とした。雷鳴轟き、川は氾濫。もはやこれまでと誰もが思ったとき、黒雲割れ、一筋の光が地上に降り注いだ。そうだ、彼こそ、我らの救世主、小野村……」

「やめんかい」

ぽかん、と軽い音がして、台詞が止まった。見ると薫の隣の男子を背後から叩いた人物がいた。

先ほどの案内役、奥山である。

誰かの飲みかけのペットボトルを手に持っている。どうやらそれが凶器らしい。

「何すんだよ、奥山。せめて最後まで台詞言わせろって」

叩かれた彼は後頭部を押さえながら抗議する。

「小野村先輩が困ってるでしょ。空気読みなさいよ。それに他の皆さんもですよ、先輩たちも調子に乗り過ぎです」

すると、彼女は薫を向いて申し訳なさそうに頭を下げる。

「すいません。私はこんなはちゃめちゃな演出は最初から反対だったんですけど、多数決でこうなってしまって」

「いや、別にいいけど」

平常心を装っていた薫だったが、内心、とんでもないところに来てしまったものだと、若干後悔し始めていた。

「自己紹介、すればいいのかな？」

その場の全員の目が自分に集中しているのに耐えられなくなった薫は視線を泳がせながらそう切り出した。

「いいえ、そんなもの必要ありませんよ。小野村さんのことは皆よく部長から聞かせてもらいましたから。すごい才能をお持ちなんだそうで、あの部長が言うんだから間違いないんでしょう」

薫は自分の頭に手を乗っけたままの男子生徒からの言葉に首を振った。

「大したことじゃないよ」

「またまたぁ、ご謙遜なすって」

ぐりぐりと上から押さえつけてくる。薫はこれ以上背が縮んではたまらんと、隙を見てその魔の手から抜け出した。

「いろんな人の声まねが出来るんだってね」
部員たちのちょうど真ん中辺りに立っていた女子生徒が訊いた。
「ああ、うん」
「ねえ、聞かせてよ」
すると、彼女に続くように周りの生徒たちが口々に「聞かせてくれ」とせがんできた。
「ストーップ。今はそんなことをする時間じゃありません」
後ろで見ていた奥山がすかさず注意する。
「先輩はこれからしなくちゃいけないことがあるんですから。そういったリクエストに答えている暇はありませんので、悪しからず」
「ちぇ、奥山はいちいちうるせえな。人生には余裕を持つことが必要だぞ」
不平に口を尖らす部員に、彼女は堂々と毅然とした態度で返した。
「何と言われようと構いません。小野村先輩のことは部長から一任されているので、私には責任があります」
「分かったよ。じゃあ、せめて俺たちから自己紹介だけ簡単に済ますから。おい、皆一列に並べ」
今度は奥の方に立っていたひょろっとした男子生徒が号令をかける。見覚えがあるので、おそらく同じ二年の生徒だろう。
全員が了解の返事をして、即座に薫の前で横一列に並んだ。こういったチームワークがいいのはやはり日ごろの練習があるからに違

いない。

すると、目の前の一人が薫と握手をして、クラスを言い、名前を名乗る。それが終わると一人ずれた。そういった具合に次々に自己紹介が行われていく。

薫は出来るだけ顔と名前を覚えようと必死になっていたので、返事が少しおろそかになっていた。途中からは「よろしく」しか言っていなかった気がする。

演劇部は男子と女子の割り合いはちょうど半分ほどのようだった。三年は夏に引退してしまっているので、二年生と一年生しかいない。

そして、最後に握手をしてきたのは先ほど、薫の横で啖呵を切ったあの男子生徒だった。

「一年二組の馬場浩太といいます。さっきはいきなりあんなことをしてすいませんでした」

言いながら愛想よく笑ってくれた。

「いいって、気にしないから」

すると、彼は手を握りながら、口を薫の耳元に近づけてきた。

「奥山、気をつけてくださいね。いろいろとルールに厳しい奴ですから。俺たちの間じゃ、次期部長は間違いないって専らの噂です」

「……分かる気がする」

薫は苦笑いだ。

「ですよねえ」

見渡すと、既に他の部員たちは散らばっており、次の練習場面の調整に入っているようだった。そう言えば、奥山の姿が見えない。

「その奥山さん、どこ行ったんだろ？」

「ああ、きっと衣装でも取りに行ったんですよ」

「衣装？」

「先輩の衣装ですよ」

彼はなんでもないことのように言う。

それを聞いて薫は額に手を乗せた。

自分のこれからの運命を思い出したのだ。

演劇部の友好的な歓迎ムードに浮かれていたが、自分はこれから姫役をやるのだ。

それを思って暗澹（あんたん）たる心持ちになる。

第九話　演劇部の歓迎にアンダーライン（後編）

それから、薫と堂野はとりあえず邪魔にならない場所まで歩き、置いてあったパイプ椅子の上に座った。皆が準備をしているのを見ておこうということである。やることがなく、暇なのか、馬島もついてきていた。

「なんだか、意外だったなあ」

薫が天上を見上げながらぽつりとつぶやいた。

「何が？」

堂野が首を傾ける。

「こんなこと言ったら失礼かもしれないけど、思っていたより、みんな友好的だったから。男子が女子の役をやるなんて馬鹿にされると思ってた」

「そんなことありませんよ。先輩」

口を挟んできたのは馬場だ。

「役を演じるのに性別は関係ありませんから」

彼はあっけらかんと言う。

「え？」

「舞台の上では役者は役者であって、役者ではなくなるんです。表現したい他の何かになるために、そこではこの馬場浩太は消える。

登場人物と自分を重ね合わせ、現実には存在しないその登場人物となって観客に見せるんです。そこで性別は関係ありません。むしろそれを捨て、この体全体でもってどれだけ自分が表現したいものに近づけるかが問題だと思うんです」

「へえ……」

意外といえばまた失礼だが、薫は彼の強い意思のこもった言葉には感心した。薫から見える彼の横顔が先ほどの何倍か聡明になったようだったのだ。

すると、それは予想外だったのか、馬場は慌てて片手をぶんぶんと振り、

「まあ、これはほとんど有川部長の言ってたことの受け売りですけどね。皆それを分かってるから、君恵さんの代役が、たとえ小野村先輩でも特に気にしてないんだと思いますよ」

「ふうん、そうなんだ。だったら安心した」

それを聞いて、薫は安堵の溜息をつく。

「でも、それを聞くと今度は演劇の世界なんてよく知りもしない自分が、このままヒロインなんて重要な役を演じていいもんかなって思う。皆そうやって自分の表現したい対象に向けて日々練習してるわけでしょ。でも俺は突然出てきて、こんな……」

薫の目の前に君恵の顔が浮かぶ。

彼女だって、毎日練習して、他の演劇部と同じだったのだろう。不慮の事故で動けなくなったとはいえ、その役を自分が代わりにするというのはなんだか失礼な気がしたのだ。

「そんなことありませんて。だって、小野村先輩が引き受けてくれ

なかったら、最悪の場合、劇自体が中止になってたかもしれないんですから。もしそうなっていたら、誰も役を演じれなかった。それこそ最悪です」

「……そうなのか。うん、それもそうだよな」

薫はマイナス思考を振り払い、顔を上げる。

「だから、そんなこと気にしないでください」

彼は明るく薫の肩を叩くと、どこかから名前を呼ばれたのか、「はい」と元気よく返事をしてそのまま駆けていってしまった。それによって場が急に静かになる。

こうなると、薫たちとしては奥山が帰ってくるまで手持ち無沙汰に適当な世間話で時間を潰すしかなかった。テレビのこととか、ゲームのこととか、適当に話していることにした。

しばらくしてから、どこからか、今度は自分の名前を呼ぶ声がしたのに気がついた。

「ちょっと、小野村君、それに堂野君も」

見ると、椅子に座っている薫のすぐ横に誰かが立っている。すらっとした長身、細面に若干の吊り目をした少女がいた。腕を組んで余裕に満ちたその様子は、どこか上品さを漂わせている。

「あれ、吹奏楽部の芦沢千葉（あしざわかずは）さん？　だよね」

彼女とは以前、山下が村松先生にいたずらをした件で世話になっている。

薫は演劇部とは関係ないはずの彼女がどうしてこんな場所にいるのか気になった。見た感じ、周りに他の部員がいるわけでもなく一人のようだ。手にも何も持っていないから、楽器の演奏に来たわけではないのだろう。

「どうしてここに？」

「文化祭で吹奏楽部も演奏するから、楽器をここへ運ぶときにきちんとスペースをとれるか確認に来たの。それだけよ」

「ああ、なるほど。部長ってそういう仕事もあるんだ」

薫が言うと、彼女は少し落ち着きがなさそうに視線を泳がせた。そして、こんなことを言う。

「そんなことより、本当だったんだ」

「何が？」

「だから、劇で須藤さんの代役をするって」

「……誰かから聞いたの？」

薫は心当たりがあったので、恐る恐る聞いた。

「教室で山下君が他の男子に極秘事項だってふれ回ってたのよ。まあ、あれだけ大きな声で話してたら極秘もなにもないだろうけど」

あの馬鹿。

薫は心の中で毒づいた。

「あいつもついに何か吹っ切れたみたいだな、とか言ってた」

「ああ、そうなんだ」

考えてみれば薫は山下と一度喧嘩のような言い合いをしてからき

ちんと謝罪をしていなかった。そのため、彼がもしかするとまだ怒っているかもしれないと薫は危惧していたのだが、それを聞いて大丈夫だろうと安心した。いつもの山下に戻っているようだ。

「じゃあ、今日からここで練習なの？」

芦沢が訊く。

「うん、今衣装が来るのを待ってるとこ」

「でも、大丈夫なの？」

彼女が急に不安そうな顔をするので、薫はどうしたのか、疑問に思った。

「何が？」

「いや、これも山下君から聞いたけど、この間のいたずらのこと。っていうか、あれ本当なの？　井上先生の声で村松先生を誘惑したって」

薫はそこで一度堂野の顔を見てから頷きあった。芦沢は呆れたように肩をすくめる。

「男子って本当に馬鹿ね。一時の享楽のためにリスクを背負ってそんなことするなんて。後の危険を考えたら私は絶対にそんなことしないわ」

「とんでもない。俺と堂野を山下と一緒にしないでくれ。俺たちは別にそんなことしたくてやったわけじゃない。なんて言うか、そそのかされたんだ」

芦沢の眉がぴくりと動いた。

「だったら、もっとお馬鹿さんね」

「ぐう……」

芦沢の言葉は容赦がない。あの有川もかなりずけずけと発言するタイプだが、芦沢はもっときつい性格かもしれない。

堂野は全く気にしていないのか、隣で鼻歌を歌っている。

「まあ、ともかく先生にはばれないように気をつけてるよ。目立つ行為をしなければ、怪しまれないだろうし、先生もそのうち忘れるだろうしさ」

「そ、それはそうかもしれないけど、それを承知した上で演劇部に来たの？」

「うん？　それはどういうこと？」

薫には彼女が眉間に皺を寄せている意味が分からない。

「だって、ほら」

彼女は何気なく舞台の向こうを指差した。そこは先ほど薫たちがやってきた体育館の入り口。そして、そこには部長の有川と誰かもう一人立っている。

「え、村松先生？」

あの顎鬚と黒縁眼鏡は見間違えようがなかった。目をこすってみるが、幻ではない。

「どうしてここに？」

これには堂野も目を丸くしている。

「まさか、本気で言ってるの？」

「俺にはさっぱりだけど？」

「村松先生は演劇部の顧問よ」

嘘だろ。初耳だった。ふらつきそうになって椅子の背もたれを掴む。

「知らなかったわけ？」

彼女は素っ頓狂（すっとんきょう）な声を出す。

「これでも、だてに帰宅部やってないからね。教師がどのクラブの顧問をやっているかなんてさっぱりだよ」

言いながら、薫はある視線に気づき、はっと身構える。

「はあ……先が思いやられるわ、ってちょっと、何してるの？」

「何って、隠れてるんだよ。目立つとまずいだろ。だから、真っ直ぐ立ってよ」

薫はパイプ椅子に座ったままちょうど芦沢の影に隠れるように移動していたのだ。

「何してるの。やめなさいよ」

芦沢は注意しながら薫から逃れようと体の向きを変え、後ずさる。しかし、薫はと言うと、その度にくるくると彼女の後ろに回りこんだ。傍から見れば飼い主とその子犬がじゃれているような恰好だ。

「ちょっと、そんなことしてたら逆に目立つでしょ。それに全然隠れてないし」
「分かってる。ただの冗談」
薫は動きをやめて、椅子に座りなおす。
「はあ？」
「いや、芦沢さんは冗談って通じるかと思って。純粋な好奇心だよ」
険しい表情になり三白眼で睨んでくる彼女に薫はにやりと笑う。
「亮介、じゃあいつもの挨拶してやって」
薫が指示すると、堂野はいつもの無表情で立ち上がった。そして、ぺこりとお辞儀する。
「どうも、堂野です」
そこでさらに薫が畳み掛ける。
「今の堂野、どう思う？」
「意味が分からない……あなたたちって正真正銘の馬鹿なの？　人を怒らせてそんなに楽しい？」
さすがに彼女の顔がすさまじい剣幕に変わりそうだったので、薫はこのくらいでやめておこうと、素直に謝った。
「いや、ごめん。そんなつもりはなかったんだよ。村松先生が俺たちがこそこそしゃべってるところを怪しんで見てるみたいだったから、ごまかすためにふざけただけなんだ」

薫がそう言ったときにはすでに体育館の入り口から村松先生は消えていた。薫はそれを見計らって悪ふざけをやめたのだった。

「自意識過剰じゃない？　村松先生が私たちの話してる内容を察知してたとでも言うの？」

「ううん、よく分からないけど。なんだか嫌な予感がしたんだ。第六感っていうの？　先生に目をつけられていたような」

「代役がどんな生徒か、見てただけじゃない？　ともかく、私、厄介事は嫌いだから。これ以上巻き込まないないように、山下君にもきちんと釘を刺しておいてよね」

それだけ言って、怒ったように彼女はすたすたと歩いていってしまった。彼女には申し訳なかったが、やはり不穏な空気を感じていたのだ。

しばらくの間、薫は村松先生が消えていった入り口を見つめていた。

芦沢がいなくなってから、入れ違いになった形で今度は有川と奥山が戻ってきた。奥山の手には薫が想像したとおりの衣装があった。

白雪姫のドレスだ。

ひらひらとした柔らかそうな材質の白のスカートに、身頃部分は青い生地の上に花柄の刺繍が施されている。それに動けばきらきらと風に揺れはためく赤いマントも付属され、さらにプリンセス濃度を高めるためか、リボンのついたカチューシャもあった。

「はい、これ」

ハンガーに吊るされた状態で有川から薫に手渡される。
「すぐに着てみて。君恵とそれほど体格差はないと思ったから特別新調はしてないわ。それでも万が一きつかったら言ってね」
しかし、そう言われても、薫は衣装を恨めしそうに見つめたままその場から動こうとしない。妙な唸り声を出している。
「うう……」
「どうしたの？　向こうに更衣室があるからそこで着替えて」
「いえいえ、僕も一応男ですしね。この衣装を着る前にはそれなりに心構えが必要でして」
「大丈夫よ、きっと小野村君なら似合うから」
「そうです。間違いありません」
奥山も便乗して頷く。
「そういう問題じゃないんですけど、この汗が見えませんかね」
そして、薫は前髪を手で押さえて額の部分を有川たちに見せた。
「知らないわよ、そんなこと。心構えなんて着替えながらして、時間ないんだから」
乱暴な言い方にうんざりしながら、薫は溜息をつく。
「ほら、堂野君、突っ立ってないで彼を連行しなさい」
「ああ、はいはい」

すると、彼は言われるがまま、薫の脇に手を入れ、まるでわが子をあやす父親のようにひょいと持ち上げた。
そんなことをされたのは初めてだったので、薫は驚きながらじたばたと抵抗する。

「お、意外と軽いな、薫」
「や、やめろ。本当に子供みたいに見えるから」

傍からはどんな風に見えるのか薫には分からないが、きっと無様には違いない。一刻も早く地面に下ろして欲しかった。

「自分の足で歩く！　歩くってば！」

その声はほとんど悲鳴だった。

「それで？　もう着替えた？」

それから五分後、更衣室のドアの向こうから有川たちが呼んでいる声が聞こえている。

「着替えたことには着替えたけど」

薫は自分の姿を足元から眺め、茫然自失（ぼうぜんじしつ）と立ち尽くしていた。
特に衣装で入らないところはなかった。少しカチューシャがごわごわと頭を締め付けてくるので、微妙に位置を調整する。

「いい？　開けるわよ」
「どうぞ……」

覇気のない返事の後、待ちかねた様子で勢いよくドアが開き、有川と奥山、それから堂野が入ってきた。
そして、すっかりお姫様となった薫を一目見るやいなや、女性二人は口元に手を当て、息を呑んだ。そして、大げさに拍手をして、
「に、似合う。すっごい似合うー！」
と黄色い声を出した。
「本物のお姫様みたい」
目を閉じて、体中から湯気が出るほどの恥ずかしさを必死に耐え抜いた薫はぽつりと、
「死んでもいいですか？」
とこぼした。
「却下、それは出来ない相談よ。死ぬなら演技中、舞台の上で死ぬことね。その方が華があるってものよ。ああ、それにしてもこれほどマッチするとは」
有川たちは薫の様子を３６０度様々な角度から矯(た)めつ眇(すが)めつ眺めながら、溜息をついている。そして、時折服に触れては微妙に調整をしている。
「いいわ、舞台に映えること間違いない」
そんなことを言っているうちに、有川たちの声を聞きつけた部員たちが続々と更衣室の入り口から顔を出す。そして、皆一様に相好

を崩す。

「おお、似合ってる」

「小野村君、かわいい」

そして、いらぬ気遣いをした誰かが鏡を持って入ってきた。

見たくもない自分の姿がそこにはあった。

堂野は同情気味に見ている。

普段、男らしさを追及している薫にとってはそれと全く逆方向に向かう部員の反応にただただ、成す術もなく、されるがままに翻弄されていた。

こんな、こんな衣装が似合ってしまう自分って。自分って。

彼が自らの羞恥からくる体熱でふらふらしながら、本気で自分の将来を案じていたのは誰も知らない。

薫が白雪姫となって部員たちからその洗礼を受けてから、また十分ほど経った。衣装が似合うことが分かったので、薫は再び着替え、いつもの制服姿に戻っている。

今は舞台の上に上がり、有川から劇についての説明が始まるところだ。

「あのまま着ててもよかったのに」

舞台の端に立っている有川は名残惜しそうに言う。

「別にいいでしょ、その話は。それよりこれから演技について話してくれるんでしょ？」

「ああ、そうだったわね。それじゃ、始めましょうか」

そして、彼女は舞台の端から少しだけ中央に向かって歩いて振り返る。

「まず第一に承知して欲しいのは、演技は一朝一夕で出来るようになるものじゃないってこと」

「それは、さっき聞いたよ。でも今回はそれでもやらないといけないんだろう？」

「そうね、普通は演技をするのには基礎体力をつけるところから始まるの。毎日運動場を走って、ストレッチして、腹筋、腕立て伏せ……」

薫は彼女が話すことに呆気に取られた。

「ちょっと待って。それじゃ運動部じゃないの？」

「確かに、演劇部はそう言われても不思議じゃないかもね。でも、プロの舞台俳優、女優をいている人たちは私達よりもずっと動いて舞台向きの体作りをしていると思うわ」

「それが必要なの？」

「舞台に立って、お客さん全体に声を届けて、柔軟で多彩な動きで演技をするためにはね。実際の舞台ってかなり体力がいるのよ」

「……」

薫は口を噤んだ。演劇というものは自分が思っていたよりずっと大変なものなのであることを認識したのだ。ただ舞台に立ち、台詞をつらつらと喋ればいいのではないということだ。

「小野村君は運動は出来る方？」
「まあ、普通の人よりは出来るかな。小学校の頃はサッカー部だったし」
「でも今は何もしてないわよね。だったら、この二週間は毎日ランニングして、ストレッチ、あと発声練習も。少しでもよりよい演技をするためだから、協力してくれるわね？」

こればかりは拒否しても始まらないので、薫はすぐさま了承した。

「まあ、お姫様の役だから、それほど気負い込まなくてもいいと思うわ。大胆なアクションシーンがあるわけでもないし、むしろ、あまり動かずお淑やかな雰囲気が出るほうがそれっぽいと思う」
「なるほど、分かった」
「それと、台詞を言うときだって、そう簡単にお客さんに聞こえるほど大声が出せるようになるものじゃないわ。だから、これ」

彼女がポケットから出したのは小さなピンマイクだった。ワイヤレスのため、小型テープレコーダーのような機械にマイクのコードが繋がっている。

「声が大きい人は極力使わないことにしてるんだけど、中々大きな声も出ない人がいるから、そういう人のためのマイクよ。これでスピーカーから声を出すから、本番では付けて」
「ああ、了解」
「高い物だから数が少ないし、扱いには気をつけてね」

薫は有川からそれを受け取って珍しそうにいじっていたが、それを聞いてすぐに彼女に返した。

「もういいの？」

「下手にいじって弁償したくないからね」
彼女は再びそれをポケットに入れる。
「それで、これからが問題なんだけど」
「問題？」
急に有川は深刻そうな顔になって腕を組む。
「二週間で台詞を覚えて、どういった演技をするのか身につけられるかってこと」
「それは俺も思ってた」
これは堂野だ。
「なんと言っても薫は演劇に関してずぶの素人。演劇部なら台詞を覚えることも慣れているかもしれないが、二週間というタイムリミットで全て出来るようになるのはきついんじゃないかな。ヒロインだと台詞の量も多くなるだろうし」
堂野は心配そうに薫を見る。
しかし、これに薫は首を振った。
薫にはそれを何とかできるかもしれないという秘策があったのだ。
なにしろ、彼には他人の声を完璧に記憶し、忠実に再現できるという能力がある。今回はそれを応用すればいいのだ。
「大丈夫だよ。台詞もその言い回しも、須藤さんがやっている通りに再現できる。それもすぐに」
「本当に？」

有川は胡乱（うろん）な目つきで薫を睨んだ。

「妙に自信たっぷりね。それだけ言い切れるなら問題ないのかしら？」

しかし、薫は静かに二人の顔を見ながら静かに頷く。大丈夫だという確信があったのだ。

「ただし、そうは言っても、一つだけお願いがある」

「何よ？」

言いなさい、と有川。

「それには須藤さんの協力が必要なんだ」

第十話　二人きりの特訓にアンダーライン

土曜日の朝。いつもなら自宅でごろごろと過ごしている時間に薫は病院へと向かっていた。

もちろん、君恵が入院している病院である。

人のまばらのバスの窓側席に座り、手にはもらったばかりの劇の台本を持っている。薫はそれを見るわけでもなく、丸めて握っているだけで、窓の外を眺めていた。

彼はこれから会う君恵のことを考えていたのだ。

一昨日、有川からかかってきた電話。

「もしもし、小野村君？」

「有川さん？　こんばんわ。どうしたの？」

「どうしたのじゃないわよ。劇のことで電話したの」

「ああ、それでどうなったの？」

「小野村君に言われた通り、君恵に連絡しておいたの。彼の練習に付き合ってくれるかって。そうしたら、彼女、すぐに快諾してくれたわよ。断然オーケーだって」

「ほんとに？　嘘じゃない？」

「なんで嘘つくのよ。あ、そうか。君恵に会えるからうれしいんだ」

「げえっ、そうか、知ってるんだったよな」

「今からでも、もう一階君恵に電話しようかな。明日、小野村君が話したいことがあるって」

「……お願いします。やめてください」

「こ、これは面白い。小野村君をこのネタでゆすったら、百万円でも出してくれそう」

「からかうのは止めろって」

「はいはい。ともかく、そういうことだから、明日は病院に行って。忘れないでよ」
「分かった、明日だろ？」
「それじゃ、ね」
受話器の置く音、がちゃり。

病院は休日ということもあり、人影もあまりなく、閑散としていた。薫は駐車場を突っ切って歩く。入院棟には正面玄関からではなく、裏の通路から入った。
自動ドアが開き、エントランスに入る。
そこで、薫は一度深呼吸をしてみた。知らず、心臓の拍動が高鳴り、どこか息苦しくなっていたのだ。

思えば、君恵とまともに顔を合わせるのは事故の翌日見舞いに行ったきりである。それ以来気まずくて会っていなかったのだから、緊張しても仕方ない。ましてや、今日は自分の他に付き添いはいなかった。

一対一で彼女と話をするなど、薫の人生経験において、皆無だった。
普通に会話をするのだって、いろいろと一苦労してしまうのに。精一杯なのに。
薫は俯きながら歩く。広いエントランスに自分の靴音だけが響く。

君恵に練習を手伝ってもらいたい、と自分から申し出ておきながら、いざ来てみるとこの様か。笑えるな。

エレベーターのボタンを押し、彼女の入院している階まで向かっ

た。降りると、すぐ脇のナースステーションの看護師たちに挨拶をして、通路を進んだ。

「須藤君恵」

数日ぶりに見るネームプレートだった。

薫はそこで立ち止まる。

あれから、彼女は元気にしているのだろうか。足の具合はどうだろうか。学校に戻りたくて寂しがっていないだろうか。

様々な思いが頭の中で交錯する。そのせいでか、足が前に進まない。ノックするための手が挙がらない。

病院の個室にはドアはなかった。薄い水色のカーテンが敷かれ、廊下と仕切られている。

それを、薫は、しばらく眺めていた。

ふいにそのカーテンが風を受けて膨らむように舞い上がった。どうやら、部屋の中で誰かが窓を開けたのだろう。吹き込む風がカーテン越しに薫に吹き、前髪が揺れた。

そして、見えた。カーテンの隙間から、ちらりと君恵の姿が。

彼女はベッドに身体を横たえたままで、窓を開け、腰から上を捻る形で外の風景を眺めていた。その横顔は、薄っすら微笑んでいるようで、どこか、何かを探している風でもあった。

『自分を待っているんだ』

薫は直感した。
彼女には自分が来ることを有川が事前に告げてある。だったら、たぶん間違いない。
そして、そのまま踏み出して、部屋の壁をノックした。
「須藤さん？　居る？　あの、小野村です」
彼女の声はすぐに聞こえた。
「小野村君？　いいよ。入って」
今日の彼女の声は一段と澄んでいるように聞こえた。思い違いだろうか。数日間一度も彼女の声を聞かなかったせいだろうか。
カーテンを開け、おずおずと部屋に入った。君恵はベッドからあまり動けない様子で、近くに置いてあった椅子を指差した。薫に座るよう促す。
「どうぞ、そこに座って」
「あ、ありがとう」
礼を言って、座る。その時、薫ははっとした。せっかくこうして彼女に会いに来たのだから、見舞いの品の一つでも持ってくるべきだったのだ。薫はそのことをすっかり失念していて何も持ってきていない。なんて自分は気がきないんだろう。
「ええと、足の調子はどう？」
ごまかすように、薫は彼女の足のギプスを見た。
「うん、まだあまり動かすなって医者からは言われている。ベッド

に寝て出来る限り安静にしてなさいって」

彼女は動けなくてさもつまらないという風に、目を伏せがちに言った。

「そういえば、事故の時の相手の男の人はどうしたの？　警察からはあれから何かあった？」

「あの人、事故の後すぐに病院に謝罪しに来たんだ。話を聞いたら、あの時、その人連日の徹夜仕事でかなりの寝不足だったらしくて、そのせいで車の運転が雑になってたんだって。それで、ブレーキを踏み遅れて……。今は親と話し合って示談ってことで話しはついてるんだ」

「そうだったんだ」

「劇に出られないのは残念だけど、別にこれっきり出られないわけじゃないし、また、がんばって主役狙えばいいからさ」

それ以上、何も言えず、薫は頷いて終わった。事故のことを聞いてまた、あの時の暗い気持ちが浮かび上がり、目を逸らしたかったという理由もある。

「小野村君、ねえ、そんな変な顔しないで。今日は劇のことで来たんでしょ」

「ごめん。そうだったよね」

自分の暗い表情に彼女のにいらぬ気を遣わせてしまった。薫は首をぶんぶんと振る。

もうくよくよするのはやめると堂野に言ったではないか。そう自分に渇を入れる。

「小野村君が私の代役してくれるんだよね」
「えっと、うん。一応そういうことになってさ。その、皆が俺なら、姫の役が似合うとか、須藤さんの声のまねが出来るとか、そういう理由でこんなことになって」
「きっと久美ちゃんに無理強いされたんでしょ？」

君恵は思いついた顔でそう訊いた。

「そう！　そうなんだよ。分かった？」
「一緒に部活してたら、どういう人かってのはそれなりに承知してるつもり。強引なところがあるからねえ。一度こうだって決めたら、相手がイエスっていうまで帰らせなさそう」
「そうなんだよ、俺も弱みを握られて、それで否応なく男なのに、姫の役をやらされることに……」

薫はぐでんとうな垂れる。
すると、君恵は目を丸くした。

「弱み？」
「え？」

もしかすると、余計なことを言ってしまったのだろうか。

「ねえ、小野村君の弱みって何？」

なにやら興味がありそうに彼女はベッドから身を起こして、薫を見つめる。

「え、えっと……」

唐突な質問で、動揺に目が泳ぐ。まさか、君恵のことが好きだったことなど、本人の前で言えるはずもない。一気に顔に血が昇るのが分かった。

「それは無理。教えられないよ」

両手を振って拒否する。

「どうしても、駄目？」

「他人に知られちゃまずいから、弱みなんだって」

「でも、久美ちゃんには教えてるのに」

「まさか、俺が教えたわけじゃないって。好きでそんなことするやつはいないよ」

薫は否定したが、結果的には薫が自分から彼女に教えた形になっていたという情けない事実をすっかり忘れている。

「まあ、いっか。今度久美ちゃんに教えてもらおうっと」

そう言って、いたずらっぽい笑みを浮かべた彼女は小悪魔だ。

「困る。それは非常に困る。それだけは勘弁して」

頭を下げて、懇願した。彼女が有川に聞けば、あの有川のことだ、きっとすぐに教えてしまうだろう。そうなれば、もう薫は彼女の顔をまともに見れなくなる。廊下で出会っても声をかけられない。生活に支障をきたすことは間違いなかった。

「ふふ、嘘だよ。そんなことしないってば。誰にだって知られたくない秘密の一つや二つ持ってるものね」

彼女はそう言って鈴が転がるような綺麗な声で笑う。

「それより、練習しなくちゃいけないんでしょ。お話しばっかりしてちゃだめだよね」

彼女がベッドの脇のテーブルに置かれた置時計を見た。薫も腕時計の針を見た。ここに来てからしばらく経ったようだ。

「危うく、目的を忘れるところだった」

台本が膝の上に置かれたままになっている。それに手を伸ばしてぱらぱらと開いた彼女が訊いた。

「それで、私は何をすればいいんだっけ？」

「簡単だよ。ただ須藤さんの台詞を、劇で演じるときのように一度読んでくれればいいから」

「まさかと思うけど、それで、私のやった通りにまねが出来るの？」

薫は自信満々で頷いて、ぽんと胸を叩いた。

「一字一句違わず、正確にね」

「それって、本当に？　これまでいろいろ噂では聞いてきたけど、小野村君って、すごいんだね」

彼女は目を輝かせて賛嘆（さんたん）の声を漏らす。これには薫、謙遜して、「大したことじゃない」と言うが、どうにも顔が緩んでいる。

最近、自分の能力のことで様々な人間たちから賞賛の声を浴びたが、やはり、意中の女の子から言われるのでは、ずいぶん気分が高

揚する。この辺り、容姿には関わらず、薫は男の子だ。
大したことじゃないと言いながら、本当は自分はすごい奴なんじゃないかと思えてくるのだ。
「でも、どうやって覚えるの？　特別な暗記法があるとか？」
「まあ、あることはあるけど、それは秘密」
薫としては、今回、言葉にアンダーラインを引く能力をフルに使用して、台詞を覚えようという魂胆だった。
実は、この能力も何から何まで、際限なく言葉にアンダーラインを引けるわけではない。パソコンに内臓されているハードディスクの容量のように、限界値が決まっているのだ。
薫はそれを長年の経験で知っていた。ノートの古いページから破りとられていくように、アンダーラインを引いた言葉はいつしか消えていくのだ。
その量はどのくらいなのかと訊かれると、これまた説明が難しい（なにしろ、時間経過によって自動的に消えていくものもある）。
ともかく、その容量を多く使って、劇の台詞を頭の中に叩き込もうという作戦なのだ。
「それも秘密なんだ。なんだかずるいなあ」
君恵は不服そうにそう言って頬を膨らます。しかし、すぐに気を取り直したのか、
「まあ、いっか。じゃあ行こう」

と提案した。

「どこへ？」

何も考えてなかった薫はクエスチョンマークが浮かぶ。すると、彼女は天上を指差した。

「屋上。さすがに個室とはいっても、お隣の部屋にも患者さんはいるし、こんな場所で劇の台詞なんか喋ってたら立派な騒音だよ」

「確かに、そうだね」

「看護師さんに事情を話して連れてってもらおう？　車椅子があそこにあるから」

見ると、部屋の隅に折りたたまれた車椅子が立てかけてある。

「今日だけ、特別ですからね」

年配の看護師の女性は屋上の鍵を開けながら、そう何度も念を押す。

薫たちは渋るその看護師に無理を言って立ち入り禁止の屋上に行かせてもらえるよう頼んだ後だった。

迷惑そうに「他にも仕事があるんですけどね」と愚痴りながら扉を開けると、怒ったように足音強く響かせながら、階段を下りていった。

薫はすれ違い様、その女性が舌打ちをした音が聞こえた気がした。

それが、患者に対する態度かよ。薫は背が届くならその襟首を掴んで引っ張り上げてやりたかった。

「ずいぶん、機嫌が悪いみたいだったね」

足音が遠ざかり、後ろから車椅子を押してあげながら薫は言う。

「気にしなくてもいいよ。ナース長だかなんだか知らないけど、いつも不機嫌だから。かわいそうに、きっと長年患者さんにこき使われてきたんだね。機嫌が悪くなる病気なんだよ、きっと」

彼女は勝手に想像している。

「ふうん」

屋上に出てみると、まず、雲ひとつ無い快晴の空に目がいった。綺麗な秋晴れというやつだろう。清潔でひんやりとした微風が吹いている。その空を小鳥達が二羽か三羽、戯れるように飛んでいった。

しかし、そのさえずりが聞こえない。脇にあるエアコンの室外機だか、ダクトなのか知らないが、うるさく回転する音がするのだ。

全く清清しい気持ちが台無しである。

「小野村君、向こうの方に行こう」

君恵は車椅子の方向を変えようとしている。彼女が目指す先は何もなく、ひらけていて、転落防止のフェンスの前にはプランターに植えられた植物が見える。

いったい誰が世話をしているのか、花々はきちんと咲いていた。

薫は彼女をその手前まで押していく。

「この辺りでいいよ。少しは静かだし」
そして、薫から台本を受け取ると、
「じゃあ、準備はいい？　始めるけど」
そう言って最初のページを開いた。
「ちょっと待って、集中しないといけないから」
薫は息を大きく吸い込んだ。そして、ちょうどいい場所を探して、彼女の正面のフェンスを背もたれにして、しゃがみこんだ。目を閉じて、頭の中の雑念を捨てる。
今回は特殊で、彼女が話す全ての言葉にアンダーラインを引かなければならない。そのためにはそれなりの集中力を使うのだ。
薫は体操座りをして、頷いた。
「それじゃ、須藤さんの台詞の部分だけ、朗読して」
「うん、了解」
再び目を閉じて、薫は深い深い意識の海に沈みこんでいった。
体全部を投げ出すように、浮力を失った体がぬくもりの中に溶けていく。そんな感覚に包み込まれる。
身を束縛するものがなく、普段頭を締め付けている硬い紐が解かれたようにリラックスしている。
その中で薫は顎を挙げる。呼吸をするように。

遥か上方に燦然と輝く陽光が見える。それが、きっと君恵の声だ。
水面を揺らす、風の戯れ。
そして、全てを照らし出す、黄金の光。

柔らかな旋律のように彼女の声は薫の中を漂っていた。

その全てをインクに染み込ませた薫は、今、ペンを握っている。
彼の中の部屋で、机に座って。

そして、使い古した、色あせた表紙のノートを開いている。そこには、彼女が話す全ての言葉が記されていた。
薫はそこに手に持ったペンでもって、線を引いていく。一字一句、漏らさないように。文字が擦れてしまわないように、時折、気をつけて、インクを付けながら。

優しく、穏やかな時間が過ぎていった。

「小野村君？」

誰かが、そう呼んで体を揺すった。

「ねえってば、寝ちゃったの？」

薫は慌てて目をこすった。

「もう、終わり？」

見ると、彼女が車椅子から身を乗り出して、薫の肩を揺すっていたのだ。

「うん、これで全部読み終わったよ。でも、本当に聞いてた？」
「もちろん、問題ないよ」
薫は自分の脳内ノートをぱたりと閉じた。立ち上がって両手を掲げ背伸びをした。固まっていた身体をほぐす。長い間集中していたので、半分、体が眠ったような状態になっていたのだ。
「なんだか、怪しいなあ」
「本当だって、これだけで全部台詞は覚えたから、協力してくれてありがとう」
「そ、それはいいけど。じゃあ、試しに問題を出してあげる」
「え？」
君恵は台本を適当に開く。
「１５ページの最初の台詞。魔女の命令によって、命を狙いに来た狩人に命乞いをするシーンね。言ってみて」
挑戦的な彼女の視線に薫はえへんと咳払いをした。もちろん言える自信があった。
「もちろん、私の声そっくりに出来るんでしょ。ものまねも聞いてみたかったし、ちょうどいいね」
「いいよ。じゃあ、１５ページの最初の台詞」
薫は声の調整をする。そして、彼女の目の前で彼女の声まねをしてみせた。
「どうか、どうかお願いします狩人さん。命だけは助けてください。

もう二度と、お城には戻りませんから、この深い森の奥に行って戻りません。だから、どうか助けてください」

薫はそれっぽく身振り手振りも付け足してみた。言い終わった後、彼女を見ると、なんというか呆気に取られた顔をしていた。

「出来てた？」

「う、うん。台詞も完璧。声も多分かなり似てるんだと思う」

薫は彼女のその曖昧な表現が気に掛かった。似ていると思う。それはいまいち確信が持てなくて断定するのを避けているようだったのだ。そんな言い方をされたのが初めてだったので、動揺する。

彼女には薫自身が完璧に君恵の声を出せていないことが分かったのだろうか。しかし、それでもかなりの精度のはずだ。

彼女は困ったような顔で説明する。

「なんていうか、自分の声って普段聞く声と、テープなんかで録音したときに聞く声って感じが違うでしょ」

「ああ、なるほど」

それならば薫にも覚えがある。

「だからさ、なんだか違和感があって、変に聞こえて、ちょっとよく分からない」

「確かにそうかもしれないね」

「っていうか、何だか恥ずかしくなっちゃった。私って普段そんな声をしてるんだ。な、なんだかさ、変じゃない？　妙に間延びしているような……」

「そんなことない」

「ええ、本当に？」
「そうだよ、須藤さんの声は変じゃない！」
気がつけば、薫はそう強く否定していた。
「そうなの？」
「俺にはすごく綺麗に聞こえる。口笛みたいな、鳥が鳴いてるみたいな、邪魔なものがない透き通った声だと思うんだ」
「……」
彼女は突然のことに言葉を失ったようだった。薫はそこで我に帰り、慌てて謝る。
「ごめん、いきなり大きな声だして。その、ただ、須藤さんの声はおかしくないんだ。むしろ、普通の人よりも良いって、それが言いたかったんだ」
「ううん、ありがとう。私、声を褒められたなんて初めてだったから、ちょっと驚いてるだけ」
そういう彼女の頬はほんのり色づいている。
「そうなの？　俺は、須藤さんと初めて会ったときから、綺麗な声をしてると思ってた」
そう言ってから、薫は自分が言った言葉が恥ずかしいことに思えてきた。
まるで、これじゃ告白してるみたいだ。
二人きりというこの空間では、下手に笑ってごまかせそうにない。こんなとき、どうして堂野も呼んでいなかったのだろう。

「うれしいな、そう言ってもらえると」

そう言って、彼女は足のギプスをじれったく邪魔なもののようにさする。それから、寝癖もないのに、その髪をなぜか両手で包むように何度か撫で付けた。

まるで、それは何かをごまかしているような……。

「気がつかないものだね。自分の良さなんて」

彼女がつぶやく。

「え？」

「自分の中ででこうだって思っていても、それが結局自分の中で作っていたありもしない妄想だったってことや、むしろ気がつきもしなかったことってあるもの。例えば今の声のことみたいに。自分のことって、見えてるようで、すごく盲目になってる部分ってあると思う」

薫は話している彼女を無言で眺めている。彼女はさらに続けた。

「小さなことでくよくよして、それを誰かに聞いてみたら、なんだそんなことって笑い飛ばされるみたく、ね。外の世界と内の自分ってこんなにも認識が違うのかって驚かされることもある。特に病院に来て、いろいろと励まされてると、普段、皆から言われないようなことを言われるから。小野村君も、そう思わない？」

「うん、そうだね。きっと俺も、須藤さんと同じだと思う」

薫だって、自分自身の劣等感を抱えて生きていて、悩んで、苦しくなって、馬鹿みたいに思えていた。自分など、何もできないのだと。

でも、それは違った。

堂野は、こんな自分でもいいところがあると言ってくれた。
そして、今はなにより、こうして劇の代役を務めさせてもらっている。自分の能力が誰かの役に立っているのだ。

それに、彼女の言葉で気がついた。
もしも、自分が嫌いで、落ち込んでいる人がいるならば。薫は思う。
変てこに聞こえる自分の声を録音して、誰かに聞かせてみればいいかもしれない。きっとその相手は、それが普通だと言うに違いない。それがどうした、と首を捻るかもしれない。

変じゃない。落ち込むことなんかじゃない。
むしろ、それが本当の自分らしさなのかも、しれない。自分の良さかもしれない。
そういうこと、たくさんあるんじゃないかな。薫は思った。

「そう、だよね」

彼女は優しく微笑む。

「じゃあ、話を戻すけど、もう劇の台詞は大丈夫だと思っていいんだよね」
「うん、それは大船に乗ったつもりで。保障するよ」
「じゃあ、ここで改めて」
「え？」
「まだ、私は退院は出来ないと思うけど、劇の代役、よろしくお願

いします」

椅子に座ったまま彼女は丁寧に頭を下げる。

「こちらこそ、一生懸命やらせてもらいます」

そうだ、自分は彼女のためにこそ、やりたい。

薫も心を込めてお辞儀を返した。

その後、彼女を病室に送り返し、その日は帰った。

帰ってから、なんとなく後悔したのは、彼女に聞かなかった質問があったのだ。

彼女から見て、自分はいったいどう映っているのだろう。自分はどう見えるのか、聞いてみればよかった。

そんなことを思い出しながら、薫は堂野に報告を兼ねて、電話をすることにした。

第十一話　不測の事態にアンダーライン

体育館の中央、並べた椅子の上に有川久美は座っていた。神経質そうに眉間に皺を寄せ、足を組んで舞台の進行を見つめている。

シーンは白雪姫に扮した薫が魔女からもらったりんごを食べて、眠りについてしまうところだ。七人の小人が棺を囲んですすり泣いている。

ライトが消え、劇は幕間。

彼女は足を組み替え、隣に座っている薫の友人、堂野亮介を一瞥して言った。

「小野村君、大したものね。まさか本当に一日で全ての台詞を覚えてくるなんて。しかも、きちんと君恵の声の出し方まで真似してる」

それに対し、眠たそうに目をこする堂野は同感の意思を示した。

「うん、それは俺もびっくりしてる。薫の力は相当だと思ってたけど、これほどなんて」

「その割には、あんまり驚いてないようだけど？」

久美は一切表情を変えずに感想を口にした堂野を訝(いぶか)って訊いた。

「ああ、昔からリアクションが悪いっていう苦情は腐るほどきてる」

そう言った彼は自嘲気味に薄っすら笑った。それを見てから、久美はふと思いついたことを堂野に訊いてみた。

「でも、あれだけ他人の声を出せたら、自分の好きな声で一日中過

ごせたりするんじゃない？　日替わりで声を変えたりして　そう思うとなんだか羨ましくもなるわね」
「いや、それにも限界があるって薫は言ってた」
「限界？」
「過度に他人の声を出しすぎていると、声が出なくなるんだってさ。声が枯れるってことかな。一度、試しすぎてそうなったことがあるって話してた。だから、普段はあまり使わないようにしてるって」
「……へえ、彼の力も万能ってわけじゃないのね」

その時、舞台の方から大きな物音がした。久美は瞬時に部員が準備に手間取っているに気がついた。

「こら！　本番でもそんな風に騒音を立てるつもり？　大道具はしっかり連携して、慌てず準備しなさいって言ってるでしょ」

立ち上がり、口に手を当ててそう注意をする。すぐに、幕の内側から「すいません」という謝罪の声が聞こえた。

「もう、本番まであと何日だと思ってるのよ」
「部長さんも大変だね」

隣の堂野が労をねぎらうような言い方をした。久美は「まあね」と眉を動かす。

「それはいいとして、小野村君のことだけど」
「何？」
「彼、劇を始める前までずいぶん役を嫌がってたけど、最近は少しもそんな素振りはないわね」
「ああ、そういえば」
「衣装を着るのにだって抵抗を感じなくなってるみたいだし。きち

んと女役である白雪姫を演じてる。何かあったのかしら？」

堂野は首をすくめる。

「さあ？　でも、やる気がなくなるよりはマシだから、いいんじゃない？」

「まあ、それはそうだけど」

久美はいまいち腑に落ちなかったが、とりあえず、無視をした。

再び、幕にライトが当たり、劇が再開する。王子役の生徒が森の奥深くで眠ったままの白雪姫を見つける場面だ。

その後は特に滞りもなくそのまま進行し、ストーリーは悪い魔女が死に、白雪姫と王子の結婚式へ。

薫は姫の衣装で、城の上から王子と共に祝福してくれている人々に手を振る演技をしている。

それは決して、久美が納得するほど完璧なものではなかった。しかし、全くの素人にしてはかなりやる気の情熱があるように感じた。きっとそれは見ている客にも伝わる。この様子なら本番も大丈夫だろう。

そして、劇はひとまず終了した。

それを確認して、久美は愚痴るように口を開く。

「本当に、彼が帰宅部なのが惜しいわよ」

「うん？」

「これを機にぜひ、私達の部に来てもらえないかしら？　このままじゃ宝の持ち腐れってやつよ」

「そういうことなら、薫に言った方がいいんじゃ？」

「そりゃもちろん、彼にだって訊くつもり。でも、友達であるあな

たからも言われれば、少しは可能性が高まるかもしれないじゃない？」

「なんだ、買収でもするつもりか？」

彼は怪訝そうに目を細めた。

その言葉に久美は不機嫌になり、ふんとそっぽを向く。

「堂野君は勘繰り過ぎ。まるで、私が極悪人みたいじゃない。私の評判ってそんなに悪いの？」

「ご高名はかねがね聞いてるよ。でも、俺はそういう噂だけで人を判断しない性質（たち）だから。今のはちょっとした嘘だよ。どういう反応するか見てたんだ」

これには久美も目を丸くする。そして、その驚きをすぐに表情から隠し、

「……ふうん。それで、その慧眼（けいがん）の士は今の私の反応からどんな分析をしたのかしら？　聞いてみたいわね」

と聞いた。

「ううん、そうだね」

堂野は顎に手を当てて、考える素振りを見せる。

「傍からは一匹狼なように見えて、実は、意外と周りの視線を気にしてたり……痛てっ」

突然の痛みに、思わず堂野が椅子から立ち上がり、後ずさる。実は、久美は彼の話を聞いている振りをして、かかとで彼の足を踏み

つけたのだった。

「そうやって、あんまり人のことを知ったように喋らないほうがいいわよ。それに、人を試すようなこともね。不快に思う人もいるだろうし」

「ご、ご忠告、どうも。変なことして、ごめん」

彼は申し訳なさそうに、頭を下げる。

「分かればいいの」

満足な気分に浸りながら、久美は横目に彼を見ながら立ち上がった。

ほんとに切れる人ね。何も考えていないようなその辺りの男子とは違う。

久美は堂野からそんな印象を受け取った。

副部長にでもなってくれたら、とても心強いのに。薫君と一緒に演劇部に入ってくれないかしら。久美は思った。

舞台の隅から小走りで奥山が駆けて来る。

「先輩、どうしましょうか？」

次なる指示を仰ぎにきたようである。

「それじゃ、まだ時間があるからもう一度始めから通してみましょう。各自、問題点は分かってると思うから、特に注意はしないわ」

「分かりました。すぐに準備をします」

彼女は頷いて、再び、舞台に戻っていく。それを見送って、ふと

隣にいるはずの堂野を見ると、彼の姿はなかった。

「あら？　堂野君？」

もしかすると、帰ったのだろうか。

しかし、辺りを見回してその推測は違うことが分かる。彼は体育館の入り口で立っていた。それも、なにやら誰かと話をしているようである。

久美はそれを怪しく思ったが、持ち場を離れるわけにもいかず、椅子に座った。ちらちらと堂野の方を見るが、誰と話しているのかは距離があって分からない。

まあ、いいか。きっと自分には関係のないことに違いない。

舞台で幕が上がり始めた。

踏みつけられた足をさすり、椅子に戻ろうとして、堂野は誰かから名前を呼ばれるのに気がついた。

「堂野、おい、こっちこっち」

見ると、体育館の入り口で人が自分のことを手招きしている。その様子で誰なのかは分かった。小走りで近寄る。

「山下、何か用か？」

訊くと、彼はここまで走ってきたのか、息を切らしながら、身体を揺らして大きく頷いた。

「ハア、ハア、あのさ。厄介なことになりそうなんだ」

「厄介なこと？」

山下が言うのだから、聞き捨てならない。言っては悪いが、堂野にとって彼は厄介ごとの塊のような存在だった。

「そうそう、かなりヘヴィーだぜ」

肩を上下させながら、彼はにやりと笑う。

「日本語文化の崩壊を助長するような言葉遣いは止めて、さっさと何があったのか話せって」

「それがよ、村松のことだ」

「村松先生がどうかしたか？」

「……小野村のことを調べてる」

これには、堂野も言葉を詰まらせた。一応警戒していたことだが、まさか、こんなにも早く事が発生するとは思わなかったのだ。

「担任の今田先生にどんな生徒かって訊いたり、他の先生たちにも、あの他人の声を真似する技術について知っているか訊いてるみたいだ」

「やっぱり、目を付けられたか」

薫の技術が高いことは親友である堂野がよく分かっている。あの声を持ってすれば、姿さえ見られなければ他人に成りすますことも可能だ。

村松先生が劇の様子を見たなら、そこまで推測してもおかしくはない。彼はきっといたずらの犯人を見つけたと思っているのだろう。

「なあ堂野、どう思う？」

「どう思うって言われても」
さすがにどうでもいい、とは言えない。
「きっと村松のことだ、このまま放っておいたら、今週中にも小野村を呼び出すに違いない」
「……とりあえず、薫に話しておくか？」
「だめだ」
山下は首を振る。
「今回のことの責任の発端は俺にあるのは分かってる。だから、小野村に迷惑はかけられないんだ。あいつは劇に集中してるんだろ。変に心配させたら、何かしら演技に支障がでるかもしれない。俺がなんとかしたい」
いつになく、彼らしくもない真剣な口調だ。
「山下……」
「なんとか、俺たちだけでこの問題を解決しよう、な」
「俺たち？」
「ああ、俺と、お前だ」
山下は当然のことのように自分と堂野を指差した。
「発端の責任を俺にも擦り付けるつもりか？　今の言い方だと、山下が解決するんじゃないのか」
「あのな、俺だけでそんなことできると思うか？」
「出来ないと決めてかかるのは容易いぞ。責任を感じてるなら、少しは自分で解決しようと努力しろって」
「何言ってんだ、一人より二人の方が良いに決まってるだろ。労力も分散される。そんなささいなことをうじうじ気にしてると大きく

なれないぞ」
「今でも充分大きくなってるつもりだ」
そう言った堂野に対し、山下は自分と彼の背を目線で測った。明らかに十センチは高さが違う。
「堂野に言うべきことじゃなかったな」
彼は失敗したと肩を落とす。
「だろ？」
「でも堂野、友人が困ってるのに手を貸さないってのもどうだ？」
「そうは言ってないけど……」
こうなれば、仕方ない。力を貸すしかないだろう。
「じゃあ、これからどうする？」
そう言うと、山下はきょとんとした顔をした。
「それをお前に考えてもらおうとここに来たんじゃないか」
「いきなり俺を頼るのか。さっきも言ったけど、少しは自分で考えてくれ。自分で撒いた種なら、自分で芽を摘み取るために積極的になれよ」
「そうか、なら俺は、お前に頼むことに積極的になる」
彼の目が光る。
「力を注ぐ方向が違う、方向が」

そうツッコミながら、堂野は山下相手だと、かなり会話で疲れることに気がついた。普段こんなに喋らないからだろうか。薫がいない分、自分が全て応答しないといけない。

正直、疲れた。

「頼む、堂野」

山下は手のひらを前で合わせて、ひざまずく。それを見て、堂野は溜息。

「ここで話してても埒が明かないな。向こうに行こう」

と校舎の方を指差した。

第十二話　水面下の不穏にアンダーライン

それから二日後の放課後、小野村薫は再び、君恵の入院する病院を訪れていた。通学用のカバンを持って、入院棟の正面玄関をくぐる。

今日も一人だ。

しかし、今回は別に堂野を呼び忘れたとか、そんな些細なミスをしたわけではない。

呼べない理由があったのだ。

「なんでかなあ、最近、亮介が山下と仲がいいのは」

そうなのだ。彼が歩きながら小声で言ったように、ここ二日間というもの、休み時間になるたびに堂野は山下と共にこそこそとクラスを出て行ってしまうのである。下校時も、勝手にどこかに行ってしまうので、呼ぶことも出来ない。

しかも二人で、という点が怪しい。

そして、薫が付いていこうとすれば、決まって堂野がそれを制する。

「ごめん、ちょっと事情があるんだ。山下と話してくるから薫は待っててくれない？」

親友であるのに、これはつれない言葉である。せめて、もう少しくらい詳細な説明が欲しいところだ。

しかし、それでも堂野は事情があり、言えないという一点張りで、

「大したことじゃないんだ。数日すれば終わるからさ」

と、それだけ。

大したことじゃないなら話せよ、と言いたくもなったが、何度も続くので、薫としてはもう無視することにした。

了承したつもりはないが、堂野が嘘をつくとも思えないので、すぐに終わるのだろう。質問はその時に浴びせてやろうと、考えていた。

その一方で、劇の方は上手くいっていた。あの有川が首を縦に振っているのだ。完璧とはいえないにしても出来はそれで申し分ないのだろう。

薫としても、その実感はあった。

役に慣れてきた、いや、本音を言えば女役など慣れたくないのはやまやまなのだが、少なくとも、最初の頃のような抵抗感はなくなった。

以前、演劇部の馬場が言っていたように、舞台の上では役者は何か別の表現体になると言っていた意味が分かる気がしたのだ。

あの場所では、普段の自分とは違う、非日常が許される空間なのだ。

それに比例して、周りで自分のことをひそひそと噂をしている生徒たちは日ごとに増えていった。

よく興味津々といった様子の生徒達のグループから「女役ってどうなんだ？」とか、「やってみせろよ」とか姫役を揶揄（やゆ）する言葉を言われたが、ことごとく無視する態度を薫は貫徹していた。

それにより向こうも面白くないと諦めたのか、興味を失い、逆に

君恵が事故にあったことによって生じた事情を知り、応援してくれる者も現れ始めた。
そんなこんなで、演劇も悪くないな、そう思い始めている薫。

そんなことを考えながら、いつものように、エレベーターに向かった。
ボタンを押し、エレベーターが下りてくるのを待つ。開閉ドアの上部に表示される階数のランプが点滅しながら、数字を減らし、次第に降りてくるのが分かった。
それを見ていると、ふいにそのランプがある階で止まる。

君恵が入院している階である。どうやら、そこで人の乗り降りがあったらしい。
数十秒の停止の後、再びランプが移動を始めた。そして、薫がいる一階へ。

到着のチンという音がする。
薫は誰から降りてくるかもしれないと察知してそっとドアの脇へ避けた。
ドアがゆっくりと開き、中の明かりが隙間から漏れてくる。

そして、そのエレベーターから出てきたのは、薫の知っている人物だった。
突然のことに、薫の身体に緊張が走る。すると、その人物は薫がいることに気づいたようで、すたすたと歩み寄ってきた。

「おや、そこにいるのは、確か、小野村薫君だったかな？」
「は、はい」
「須藤さんのお見舞いかい？」
「ええ、まあ」

緊張しているため、薫はその人物の顔を見れない。

「殊勝な心がけだな。友達は大切にするのがいい。私もついさっきまで、須藤さんの見舞いに来ていたのだよ。クラスの担任というわけでもないが、受け持っているクラブの生徒が事故にあったのだ。少し様子を、と思ってね」

その口調は優しく穏やかで、薫に燕尾服を着た紳士を彷彿(ほうふつ)とさせた。

しかし、相手が相手なだけに薫は油断できない。

しかも、見あげたその人物の瞳の奥に、何か企んでいるような、上から薫を嘲笑しているような、くすんだ光を閉じ込めている気がしたのだ。

はっと薫は身構える。

「そうだったんですか」

「じゃあ、私はこれで失礼」

その人物は意外にもあっさりそれだけ言うと、くるりときびすを返し、エントランスの出口の方へ歩きだした。

それを見て、薫はほっと胸を撫で下ろ……。

「時に、小野村君」

「は、はい！」

背後から声をかけられ、薫はびくりとその場で小さく飛び上がった。

「君は、聞いたところによると、特殊な技能を持っているらしいな。その、他人の声を、真似するとか」
「……確かにそうですが」
「それもかなり熟達している、とか」

薫は戸惑った。どうしていきなりそんなことを聞いてくるのか、全く理解できなかったからだ。

というよりもそんな話をどこで聞いたのだろう。まさか、君恵からだろうか。

「そうですけど、それが何か？」
「いや、なんでもない。ただちょっと小耳に挟んだ程度だ。本当かどうか確かめたくてね。それじゃあ」

すると、それだけ言って、彼は再び背を向け、自動ドアをくぐって行った。

薫は彼が話し終わる直前、口元が僅（わず）かに微笑んでいたような気がして、ぞっとした。

「いったいどうして、村松先生が」

行ってしまった男性教師の名前をつぶやいて、閉じてしまったエレベーターのドアをボタンで開ける。乗り込み、君恵のいる階に向かった。

エレベーターが動きだし、額の汗を拭いた薫は下唇を噛む。

「芦沢さん、あれはやっぱり気のせいなんかじゃないかもしれない」

薫の脳内では、先ほど、村松先生が言った言葉がアンダーラインによって反芻されていた。

「須藤さん、いる？　小野村だけど」

少し乱暴に個室の壁をノックした。

「どうぞ、入って」

その声を聞いて、薫はすぐさまカーテンを開け、ベッドにいた君恵に歩み寄った。薫の様子がいつもとは違って切迫していたので、君恵は驚いて身を起こす。

「ど、どうかした？」

「今、村松先生が来てた？」

「うん。見舞いに来たって。突然だったからどうしたのかと思ったけど」

「それで、何て言ってた？　変なこと聞かれた？」

そう言われて、君恵は怪しむように目を瞠った。

「変なこと？　いや、足の具合を聞かれたり、事故についてとか、退院はいつできそうかとか、劇に出られなくて残念だねとか……」

「それ、だけ？」

君恵の視線が数分前の記憶を探るように下に向いた。首をゆっくり横に振る。

「……ううん、そういえば、小野村君のこと、訊いてきた」

やっぱり。自分のことを調べてるんだ。
薫はごくりと生唾を飲み込む。

「先生、代役の小野村君のことを知りたいって言ってたけど、今思えばあれって変な質問だったかも」
「それで、何て答えたの？」
「何って、それはありのままに。小野村君とは小学校で転校してきて以来の付き合いで、今は別のクラスだけど、会えば話をするって」
「他には？」
「ずいぶん人の声の真似が得意みたいだけど、昔から知ってたかって」
「それには、どう答えたの？」
「つい最近噂で聞いたって。それまでは全然知らなかったから。そう言ったら、そうか、分かったって。それ以上のことはもう聞いてこなかった」

薫は額に手を当てて俯く。
まずいな。もしかすると、すでに村松先生はあのイタズラを自分がやったものとして断定し、証拠を集めているのかもしれない。
彼女からはよく知らない様子だったから深く聞かなかったのだろう。
薫はそう考える。

「ねえ、何がどうしたの？」

彼女はベッドの端に腰掛けて、薫を不安そうに見つめている。そんな彼女をなだめるように薫は表情を緩めて言った。

「須藤さんが気にすることじゃないよ」

「でも、何か大変なことでしょ。じゃなきゃ、そんな深刻な顔するはずないもの」
「いや、まだ深刻なことかどうか。その辺りは判断できないよ。単なる杞憂ってこともあるし」

言いながら、それでも出来るだけ早く堂野に連絡をしなければと思っていた。

君恵はそんな薫を見、溜息をついて、

「村松先生に目を付けられているんでしょ、悪いことした？」

図星を衝かれてぐっと息が詰まる。

「そ、そんなんじゃないって」
「また、そうやってごまかして。ねえ」

彼女に詰め寄られ、次第に返答に窮する薫。

「……ええっと」
「ほら、小野村君、そこに座りなさい。私は前みたいに物分りよくないからね。今日はきちんと話してもらうんだから」

君恵は怒ったように両手を腰に当て、薫を睨んできた。これにはたまらず、言われた通り、「分かったよ」と椅子に座った。

嫌な予感に冷や汗が垂れる。

このまま、彼女に全てを話してよいものか、と考えていたのだ。

話すとなると、当然、山下の悪事に加担したところから話すことは避けられない。本意ではないしても、やったことは共犯だ。先生を陥れる悪事のである。

そんなことをしたと聞いて彼女の自分に対するイメージが悪くならないかどうかが不安だったのだ。
薫としては、君恵にだけは嫌われたくない。
言うべきか言わざるべきか、その二択で迷っていると、ふいに膝の上に置いていた薫の両手に何かが触れた。滑らかで、暖かいその感触……。
「え、須藤さん？」
それは、彼女が薫の手の上に自分の両手を置いていたのだ。しかも、逃がさないようにか、ぎゅっと掴んでくる。その感触、嫋(たお)やかな指先に見とれた。
彼女を見ると、目を細め、寂しそうな表情で、
「帰っちゃ、やだよ。お願いだから、何があったのか教えて」
しかも、顔を近づけてそう言われ、心拍数が一気に跳ね上がるのを感じる。軽いめまいもした。
そんな顔、されたら。
多分だが、好きな女の子からこんな風に言われて、断われる男なんていないと薫は考えた。いや、多分じゃない、絶対だ。
嬉しさと困惑の入り混じった感情に本当に倒れてしまいそうである。
このまま隠し通すのは無理と判断した薫はもう早めに白状してしまおうと、頭を下げる。
「須藤さん、俺の負けだよ。正直に話すから」

「へえ、そんなことがあったんだ」

事の進行の具合を薫から聞いた君恵は予想に反して、驚くでも怒るでもなく、平然としていた。ニュースのレポーターが各地の天気予報を伝えているときのように小さく相槌を打って聞いていた。

「今思えば、まさかこんなことになるなんて思ってもみなかったから。その、軽率な行為だったよ」

薫は俯いて拳を握った。

「反省してる？」

そんな薫を覗き込むようにして、君恵が訊く。

「そりゃ、してる。あんなこと関わらなければよかった」

「だよねえ、下手すれば劇に出られなくなるかもしれないんだから」

「劇？」

彼女に言われて一瞬薫は虚を衝かれた思いだった。目を瞬かせる。

「だって、もしイタズラがばれて、先生に怒られるようなことになったら、劇の役からも降ろされるかもよ」

それは盲点だった。もしそうなれば演劇部にも迷惑をかけることになってしまう。

おそらく、いまここで自分が居なくなってしまえば、もはや代役を探すことなど不可能だろう。そうなれば、劇は続行不能だ。

「そうか、そんなこと思いもしなかった」

事の重大性に、寒気を感じる。

これが有川に知れたら、何を言われるか分かったものではない。

「ね、私に関係ないなんてことないでしょ」

「そうだね。ごめん」

情けなくなりながら頭を下げる。

「それより、これからどうするかが問題だね。すぐにでも手を打たないと、今回ばっかりは謝ってそれで無罪放免とはいかなそうだし」

「なんとか、せめて文化祭が終わるまででも、隠し通さなければいけない」

「ねえ、まず堂野君や山下君に相談したらどうかな。大勢で考えたほうがいい知恵が浮かぶものでしょ」

彼女は人差し指を一本立てる。

「それは俺も考えてたんだ」

彼女の意見に薫は何の異論もない。

「そう、なら善は急げね。病院の一階に公衆電話があるからそこから掛けようよ」

「ああ……うん」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

その時、返答しながら薫の脳裏をかすめたのは、最近自分に対し

て素っ気無い堂野の態度だったのだ。

その後、彼女と共に階下に降り、エントランスの隅に置かれた公衆電話において、薫はポケットから小銭を出し、すぐさま番号を押した。

堂野の自宅の番号である。

隣には君恵が車椅子で心配そうに受話器を持った薫を見ている。

耳元では無機質な呼び出し音が響いていた。そして、それが途切れ、大人の女性の声が聞こえてくる。堂野の母親だった。薫は堂野と代わってくれるように頼む。

しばらくして、電話に出た彼は眠たそうな声で喋った。

もしかして眠っていたのだろうか。こんなときに。

「どうした？　いきなり電話を掛けてくるなんて珍しいな」

いつものぼんやりした声である。

「緊急事態だから、仕方なかった」

「緊急事態？」

堂野の声に緊張が混じる。

「ああ、かなりまずいかもしれない」

そして、薫は手短に病院で突然村松先生と出会ったこと、それから君恵に薫のことを質問していたことを報告した。

そして、さらにもし事が発覚すれば、劇の降板もありうることも話した。できるだけ事態が切迫している様子を伝える。

「なあ、亮介。どうしたらいいと思う？」

しかし、それにも関わらず、彼は欠伸混じりに、

「心配しすぎじゃないのか？　薫は考えすぎだよ」

といういつもの彼にあるまじき、事の重大性を無視した平和ボケした返答をした（まあ、彼は普段からぼうっとしているが、それでもこれは変だ）。

「でも、現に村松先生は俺の声まねに妙に興味を持っている風だった。少なくとも、そこから発展して俺を疑うことは充分に考えられることだぜ」

「大丈夫だよ。きっと来週にはそんな興味も失せてるって」

「俺にはとてもそうは思えない」

なぜなら、去り際に見せた村松先生の不敵な笑みは網膜にしっかり焼きついていた。あれは間違いなく、薫の警告信号を鳴らせている。

「心配症だなあ、薫は。もっとリラックスしろよ、そんなことじゃ演技にも支障が出るぞ。俺が保障する。きっと来週には村松先生は薫に大して何の興味も持たなくなってる」

「いったい何を根拠にそんなことが言えるんだよ」

「大丈夫だって。俺を信じろ」

その言葉に薫は怒りで受話器を強く握った。

「なんだよ、大丈夫、大丈夫って。亮介、どうかしてるのか？　最近だって、まるで俺を避けるようにしてるし。真剣に俺の言うことを聞いてくれてるのか。どうなんだ！」

苛立った薫は、つい、感情まかせに受話器に向け、怒鳴った。

そうでもなければ、この寝ぼけた友人の目を覚ませそうになかったのだ。じわり、と握った手のひらに汗が滲む。

「……熱くなるな。落ち着け、薫。俺はきちんと薫の言うことを聞いてる。その上で大丈夫だって言ってるんだ」

いやに落ち着いた声だ。

「でも、亮介……」

そこで、薫は自分の服の袖を誰かが引っ張っているのに気がついた。振り向くと、君恵だった。なぜか、片手を差し出している。

「ねえ、私と電話を代わって」

「いいけど……亮介、今、須藤さんと代わる」

そう告げ、彼女に受話器を手渡した。彼女はそっと耳元の髪を掻き揚げ、そこに受話器を当てて話し始めた。

「……ええそう、須藤君恵です」

彼女と堂野の会話が始まる。

「小野村君の言ってることは全部、本当よ。うん……。でも、どう

してそうなるの……うん、うん。え、山下君？」

急に会話に山下という名前が出てきて、隣に立っていた薫は額に皺を寄せる。いったいどんな会話をしているのだろう。

「ええ、うん。確かに、そうだね……堂野君の言ってることは分かる。でも、えっ！」

意外なことを言われたのか、彼女は受話器をさらに引き寄せた。そして、なぜか、薫をはばかるように口元を隠しながら会話を始めたのだ。ちらちらと薫を見ている。

この状況に薫としてはいても経ってもいられない。自分が知らない話を堂野が彼女に話していることは明白だった。しかも、君恵はそれを薫に聞かせたくないらしい。

そのまま、深刻そうな顔をして頷いている君恵。

しかしその表情が一変、明るくなった。

「ふふふ、そうなんだ。それは面白いかもね。きっと大丈夫だよ」

なんと相好を崩して笑い始めたのである。

大丈夫だよって、どういうこと？

まさか、彼女にまで堂野の能天気病がうつったのだろうか。

妙な不安に駆られる。

まるで、自分だけが蚊帳の外に置かれている気分だ。

「うん、分かった。がんばって。それじゃあね」

君恵は会話が終わったのか、別れの挨拶をして、受話器を薫に返

すこともなくそのまま本体のフックにかけた。

「え？　終わり？」

肩透かしを食らったような気分だ。

「うん、堂野君の言ったとおり、大丈夫みたい」

「いまいち信用が出来ないんだけど」

如何ともしがたい不安な気持ちに困惑してしまう。

すると彼女は手を叩いて急に話題を変えた。

「そんなことより、今日は劇のことを話しに来てくれたんでしょ」

「うん、そうだけど」

薫は今になって本来の目的を思い出した。そのために今日は病院を訪れたのである。

「嫌なことは忘れて、私とそのこと話そ。そうだ、お母さんが持ってきてくれたシュークリームがあるんだった。薫君も食べるよね。だから行こうよ、ほら」

なぜか妙に楽しそうに手を引っぱった君恵の提案を、薫は断われるはずもなく、頷いた。君恵の車椅子を後ろから押す。

君恵と二人で話を出来るのはもちろん嬉しい。

しかし、本当にこれでいいのか、と意識の奥でノックをする音が聞こえて、その日の間、鳴り止まなかった。

妙な事態に陥ったのは次の日のことだった。

いつものように体育館での劇の練習が終わった後、薫はホームルーム後、行方不明の堂野を探しもせず、自宅に帰ろうと校門を目指していた。
秋の夕暮れは早く、すでに陽は沈み、夜が辺りに忍び寄ってきていた。
そんな校庭の向こうから数名の生徒が薫の名前を呼んでいるのに気がついたのは、校門をくぐる手前のことだった。

「小野村君、ちょっと待って」

振り返ると、同じクラスの生徒である。女子の生徒と男子の生徒も数名見える。

「どうかしたの？　材料が足らなくなった？」

忘れていた方もいるかもしれないが、薫は文化祭準備の材料集めの役員でもある。彼は今でもきちんとその職務を果たしていた。
だから、今回もその用事かと思ったのである。

「ううん、違うの」

先頭に走ってきた女子生徒が言う。

「山下君と堂野君を知らない？」

薫は首を傾げた。

「はあ、知らないけど？　その二人がどうかした？」

ここ数日の妙な二人の行動が薫の目の前でよみがえった。

その二人がセットになって会話に出てきたので、薫は身構える。何か問題を起こしたのだろうか。

「えっとそれがね……。文化祭に使うために用意していた準備物をいくつか持っていったみたいなの」

「なんで？」

「それが分からないの。数名の人たちが二人がどこかに持っていったのを見てたみたいけど、それっきり戻ってこないから変だと思って」

「……」

「小野村君も分からない？　いつも二人とは仲良さそうだけど」

「それが、最近妙に避けられててさ。変だとは思ってたんだ」

そう言って薫は唸って考え込む。

そんなものを二人で勝手に持ち出して何をするつもりだろうか。

がっかりしたように、その生徒は肩を落とした。

「なあんだ。分からないのか」

「とりあえず、一緒に教室に行かない？　戻ってきてるかもしれないし」

気になってとてもこのまま帰れそうになかった薫はそう提案した。

生徒たちはそれに同意し、全員で校舎に戻ることになった。

そして、自分たちのクラスに戻ってきたところで、薫は入り口に誰かが立っているのに気がついた。中の様子をドアから覗いている少女がいる。

「あれ、芦沢さん。どうかした？」

後ろから声をかけられたのに驚いたのか、彼女は「きゃあ」と悲

鳴を上げる。
「驚かさないでよ」
口元を引きつらせながら彼女は怒る。
「いや、行動が怪しかったんで、つい」
薫はにやつきながら、頭を掻いて反省した振りをする。すると、彼女から意外な言葉が出た。
「それより、山下君を知らない？　教室にいないみたいだけど」
「え、芦沢さんも探してるの？」
これには驚く。
「実は、彼に貸してた音楽室に保管してあるCDを返してもらいに来たのよ。今日の昼間に持っていってそれきりだから。でも、その様子だと知らないみたいね」
「うん、俺たちも探してるんだけどね。どこにいったのやら」
そう言って、周囲を見渡していると、今度は廊下の曲がり角から見知った顔が現れた。蛍光灯が照らした廊下をこちらに向かって走ってくる。
「有川さんだ」
彼女は薫を見つけると、はっとして手を振ってくる。
「小野村君、まだ帰ってなかったんだ」

彼女は薫の目の前で立ち止まり、ひざに手を突いて大きく息をした。

「それが、ちょっと変なことになってて。有川さんこそ、どうしたの？」

「それが、事情があって。山下君と堂野君を知らない？」

もしや、とは思ったが、またそれか。薫には訳がわからない。疑問が膨らむばかりだ。

いったいあの二人は何をしているんだ？

隣の芦沢は、

「あなたもなの？」

と有川を指差している。

「あなたもって、どういうこと？　とにかく私は一年の馬場君と奥山さんを勝手にどこか連れて行った堂野君たちを探してるの」

「私も山下君を探してるの」

「え、あなたも？」

「ついでに言うと、小野村君たちもみたいよ」

芦沢がぽんと薫の頭に手を乗せる。

すると、有川がめがねの奥でその瞳を光らせた。何か思いついたようである。

「これは、どういうことなの？　小野村君。何か知ってるんでしょ」

「そうなの？　小野村君。じゃあ説明して」

なぜか、二人から詰め寄られ、薫はじりじりと後退する。

しかし、薫、何も知るはずもない。混乱した頭で目を瞑り、両手を挙げ、降参のポーズをする。切羽詰って、

「そ、そう言われても、俺だって」

「俺だって？」

「何も分からないんだ！」

と叫んだ。

第十三話　闇に潜む影にアンダーライン（前編）（前書き）

以前から懸念していたのですが、やはり内容が多くなってしまったため、例によって二話に分割します。

すいません。会話の中に一部、不自然な部分があったため、修正しました。６／１２

第十三話　闇に潜む影にアンダーライン（前編）

すっかり陽が西の山に沈み、人の気配が消えた校舎。冬の訪れを告げるような冷めた夜気（やき）。

闇の静かな侵攻に僅か、抗うだけの教室の明かりが見えた。

その校舎の二階、小さな部屋から光が漏れている。理科教室の準備室である。

そして、その準備室の面している廊下の隅に暗い人影が二つ。通路の壁に張り付くようにして、様子を窺っている。

二人はまるで、敵地に潜入した忍者さながらに、ほこりさえ動かないような小さな呼吸をしている。

沈黙が流れる。空気は止まって動かず、二人以外の生物はこの場から立ち去ってしまったかのようだ。

すると、沈黙に耐えかねたのか、その二人のうち、比較的小柄な影の方が、大きな影に囁く声が聞こえる。

「ねえ、なんで私がこんなことしなくちゃいけないのよ。さっきからじっとしたままで足が疲れてきたんだけど」

「おい、話しかけるな。俺たちは今、忍者になりきってる。そう言ったろ。これも一つの舞台稽古だと思えば苦痛でもない」

「こんな動かない稽古に何の意味があるのよ。馬場君、私、帰りたくなってきた」

小さな影はやる気がないように壁から離れた。馬場と呼ばれた方は静かに、と人差し指を口元に持ってくる。

「おい、俺の名前を呼ぶんじゃない。敵がどこで聞いているか分からない。壁に耳あり、障子に目ありだ。そして、俺の名前は影丸だ。以後はその名で呼べ。それから、奥山は、そうだなあ、アニ丸なんてどうだ？　動物のアニマルとかかってるわけだ。よし、いい、それにしよう」

「あんただって人の名前呼んでるじゃん。それにそんな阿呆丸出しの名前、嫌だから。忍者になりきってる振りなんてして、ばっかじゃないの？」

奥山と呼ばれた影からの痛烈な批判に一生懸命壁に張り付いていた馬場も、さすがにやる気が削がれたようだった。その大きめの頭を俯かせる。

「ああ、せっかくの気分が台無しだ。これは列記とした訓練なのに、奥山のせいだ。これは責任をとってもらわないと」

「じゃあ、責任をとってこの役目を辞退させてもらいます。安心してください、振り向きもしないで一目散に猛スピードで家に帰ってやるんで」

大げさに嘆いている馬場を奥山は白目で眺め、そう吐き捨てると、くるりときびすを返し逃げ出そうとした。

しかし、その肩をむんずと掴む馬場の大きな手。

「ちょっと待て」

奥山は舌打ちをする。

「チッ、あと少しだったのに」

「この役目には奥山の協力が不可欠だってことは堂野先輩に聞いた

ことから説明しただろ？　準備室から村松先生を呼び出すには、奥山みたいに真面目で、先生からの信頼が置かれている生徒の言葉が必要なんだ」

奥山は馬場の説明に合点がいったとばかりに手のひらを打つ。

「ああ、そうよね。馬場君みたいにガサツで、無遠慮で、思慮の浅い、そんな生徒の言葉を村松先生は信用しない、ええ、よく理解できました。ついでに私もあまり信用してないけど」

「ぐう、さっきからずいぶん反抗的な態度だな。いい加減にしろよ」

「あら、いいの？　私が協力しないと、この作戦は上手くいかないんじゃない？　もし失敗したらまずいんでしょ」

「それはお前もだろ。なんとしても、村松先生の目を小野村先輩から逸らさないと、劇が中止になりかねない。事が露見したら、いくら自分が顧問をしているクラブとはいえ、あの先生は容赦がないだろうし」

そう言った馬場は上級生から聞いた話を思い出してる。

それは一年前の文化祭の劇の発表が差し迫ったこの時期に、練習をさぼっている生徒がいたことだ。そのことが村松先生にばれ、やる気がないのならする必要がないと発表を取りやめる寸前までいったそうである。

その時は部員が頭を下げ、なんとか事なきを得たが、しかし、それ以来、先生を恐れてか、無断で練習を休む生徒はいなくなったということらしい。

「それは分かってるわよ。私が言いたいのはそういうことじゃないの」

奥山はつんと口を尖らす。

「何だ、はっきり言え」

「私が居なくちゃ成立しない作戦なのに、馬場君が勝手にあれこれ命令してくるのが、気に入らないって言ってるの。何よ、隠れろ、とか、忍者になれって。だから帰りたくもなるのよ」

「俺は、堂野先輩から直々に頼まれたんだ」

馬場は自信満々に胸を叩く。

「そんなの知らないわよ。私が用事があってたまたまいなかったから馬場君が呼び出されたに過ぎないじゃない。私がいたら先輩は私に頼んでましたよーだ」

「な、なにー！」

馬場はふんと鼻から息を出す。

そんな二人が隠れている廊下の隅から階段の踊り場を一階分上がった場所に、今度は彼らとは違う、三人分の影があった。廊下の明かりがその影を細長く引き伸ばしている。

その影の中の一人、髪を頭の後ろで結んだ少女が二人の様子を見て、くすくすと笑いだした。

「ふふふ、妬けるわね。こんな場所でなにやら、痴話げんかを始めるとは」

「あんな声で話をしたら、周りにばれると思わないのかしら」

と、これは隣に立つもう一人の少女の声。確かに二人の声は少々聞き取りにくいものの、隠れるつもりがあるのかないのか、普通の

会話でするような大きさだ。

「普段から、舞台で大声で話してるから職業病みたいなものよ。それがこうして仇になるとも知らずに。くっくっく」

「そうだね。学校で待ち構えてたら、いとも簡単に見つけられたし」

これは、三人の右端で階段に腰掛けている小柄な少年が言った。

「それで、有川さん。これからどうするの？」

「決まってるでしょ、これからあの二人を見張って、どうするつもりなのか見届けるのよ。場合によっては現行犯逮捕」

「……さいですか」

「はあ、私できるだけ早く帰らないとお母さんに怒られるな」

二人の会話を聞きながら芦沢は溜息をついた。

そこから遡ること、一時間前。

行方不明の堂野と山下を探して鉢合わせをした薫と有川、それに芦沢。その三人は協力して学校中を捜索をすることになった。

校庭、部室、各教室を手分けして彼らを探す。

そして、それが始まって間もなく、有川が一年生の教室であるものを発見する。

それが、同じく行方が分からなくなっていた馬場と奥山の通学用のカバンだった。無造作に机に置かれているところを見ると、まだ学校から帰宅していないということが分かった。

そのため、有川の提案で生徒達がほとんど帰ったこの時間まで、学校内に戻ってくると思われた馬場と奥山の姿を探していたのである。

結果、こうして首尾よく二人の姿を見つけられたのだが……。

「あ、どうしたのかしら」

有川が目を細めて、通路の壁際にいる馬場たちを見る。

「何？」

薫も手すりの上からのぞく。

すると、二人はどこかに向かって廊下を歩き始めるところだった。

「どうやら動き出したようね」

「どこに行くのかしら」

「さあ？　ともかく、気づかれないように後をつけるわよ」

有川は静かに立ち上がった。

「そろそろ時間だな」

しばらくして、腕時計を見ながら馬場がつぶやいた。話の途中にも関わらず、勝手に廊下を歩いていこうとしている。

そんな彼が奥山紗江には許せない。

「ちょっと、話は終わってないわよ」

「それは後からでも出来るだろ。先輩たちに言われてるんだ。ここでぐずぐずしてるわけにはいかない」

そして、彼は「行くぞ」と合図をすると廊下を走り出した。

「はあ、行くしかないのね」

うんざりだと思いながら仕方なく後に続く紗江。

そして、準備室の前にたどり着いた馬場はまるで大事件が発生し、息を切らしてやっとここまでたどり着いたかのように、部屋のドアを激しく叩いた。

「先生、いますか？」

紗江も馬場に続いて村松先生を呼ぶ。

「大変なことがあったんです！」

馬場がそう言ってから、紗江はふと「大変なこと？」と首を傾げたくなった。

よく考えてみれば、具体的な作戦の内容について馬場と打ち合わせをしていないことに気がついたのだ。

いったいどういう理由で先生をここから呼び出すのか、まったく聞いていなかったのである。これは作戦の大きな欠陥だ。

馬場が適当な嘘をつき、辻褄が合わなければ、先生にはすぐにばれてしまう。

しかし、そんなことを思っているうちに、中から物音が聞こえ、ドアがガラリと開く。

もう後には引けない。

立派な顎鬚に黒い眼鏡をかけた教師が顔を出した。目の前にいるのが、自分が受け持っているクラブの生徒と分かり、目を丸くして

いる。

「なんだ、馬場と奥山か。どうしたんだ」

馬場が一歩前に出て説明する。

「それが、僕達さっきまで学校林の中で劇の練習をしていたんです」

怪訝そうな顔をして、村松は顎鬚を触る。

「学校林？　なんでまたそんな場所で？」

村松がそう言ったのは当然なことだった。

綾坂中学校所有の学校林は学校のすぐ背後の山にあるのだが、普段生徒たちが立ち入ることは皆無なのである。

生徒がこんな普通の日にそんな場所にいたということ自体がおかしいのだ。

馬場はこう続ける。

「いえ、部長が自然の中で練習をしたほうが、開放的な気分になれて想像力が刺激される、とかで」

うう、苦しい言い訳だ。紗江は渋い顔をする。

「……それで、何があったんだ」

「それが、練習中にですね……爆弾」

「はあ？」

「いえ、あのう、茂みの中に不発弾らしきものを見つけまして」

これには前のめりに倒れてしまうかと紗江は思った。よりよって

とんでもない大嘘だ。
何で自身満々に立ってるのよ。そんな嘘が通じると思っているのか。
紗江はそんな彼の膝の裏を蹴ってやりたい気分だった。
案の定、
「はああ？」
村松は目を白黒させている。
当然だろう。そんな突飛な話、信じれるほうがおかしい。
そんな彼の目が隣でおどおどしている紗江に向く。
「本当なのか？　奥山」
つい、「ひっ」と声を上げてしまう。
「どうなんだ？」
「ええ、私も見ましたけど、かなりふるーい感じで、こう、丸っこくて、その、なんというか、爆弾って感じでした」
そこはかとなく抽象的で、情報量の少ない、リアリティに欠ける説明しながら、自分で馬鹿みたいだ、と紗江は泣きたくなった。
「いまいち分からんが」
村松は首を捻る。
これではまずい、そう思った紗江、今度は両手を使って、爆弾の形を宙に書いて表現した。なるべく、事の重大性が伝わるように大きく書いてみる。

「こう！　こんなに大きい爆弾なんです！」

いつか教科書で見たような爆弾の形をイメージしながら、もうどうにでもなれと、大げさに爆弾をアピールした。

「もしも爆発したら、この辺り一帯、全部吹き飛ぶくらいです。学校なんてひとたまりもありません。私達は塵も残りませんよ」

と勢い余ったこの少女は、とんでもないことを言い出す始末。

「そ、それはまずいな。そんなものを見つけたのか」

しかし、紗江の必死の演技の甲斐あってか、先生は話を信じたようだった。どう考えても荒唐無稽（こうとうむけい）な話だが、人間の必死さは他人を動かすものらしい。

「そうです。だから先生に来てもらいたいんです」

馬場がそう頼んだ。

「いや、私よりも警察に頼んだ方がいいだろう。それにその場所に他の人間がいるならすぐに避難させなさい」

確かに、村松の意見は最もだった。これには紗江、上手い切り返しを思いつかない。

慌てて馬場のほうを見る。

すると、彼は、

「いえ、それでもですね。万が一、億が一爆弾でなかった場合。大騒ぎだけして、近隣住民に迷惑をかけてしまうことも考えられるん

です。ですから、先生に本物かどうか、確かめてもらいたいんです」
とさっきまでの自分たちの勢いとは打って変わって、慎重な言い方をした。
「だがしかし、私は教師であって、爆弾の専門家ではないのだがね。私を頼るのはお門違いというやつだが」
これまた、ごもっともな意見だ。
紗江はその場で土下座をしてしまいたい気分になる。
しかし、馬場は一度信じたらこっちのものと強引に先生の腕を引っ張った。
「ともかく、現場に来てください。警察への電話はその場でしてもらえばいいですから」
「だが、しかし」
「お願いします。確認してもらうだけですから」
紗江も片方の手を持って引っ張る。
すると、先生も観念したのか、不服そうではあったものの、
「しかたないな」
とゆっくり歩き出した。
中学校から学校林へ向かう道はいくつかに限られている。村松を連れた馬場たちは校舎の裏にある教師専用の通用口からその向こうにある道路に出た。
しばらくはその道路沿いに進み、少し傾斜のある坂道に差し掛かったところで、すぐ脇の雑木林の中に細い山道が見えてくる。

そこを上っていくと、綾坂中学の学校林があるのだ。
いつもなら、多少木々が茂っているものの、道の先まで見通せるのだが、今は陽が沈んだ夜。明かりがなければ、前に進むのも危険だ。
馬場と紗江は前もって用意していたライトを取り出して、村松を案内した。

「こんなくらい場所で、練習をしていたのかね」

歩きながら、当然の疑問を村松が口にした。

「ええ、多少暗い方が、本番の舞台の雰囲気に似ていていいんです」

とんだでたらめを馬場が言う。
それを信じたのか、どうかは分からないが村松は唸る。

「ううむ……待て、よく考えてみれば練習してもいいと許可も出していないぞ。有川は無断で皆をここへ連れてきたのか？」
「いえ、これは自主トレーニングです。一年生だけで練習しようって、な、奥山」

またしてもでたらめ。
それに対し、村松は不思議そうに首を捻る。

「おい、さっきお前は部長がここで練習するのがいい、そう提案したと言っていたじゃないか。有川はいないのか？」

と、ついにここで墓穴を掘ってしまったことが発覚した。

はわわわ。紗江は背筋に悪寒を感じる。
すると、馬場はすかさず、
「あ、それはですね。あくまで部長が言っただけでして、実際に実行したのは一年だけだったんです。だよな？」
と取り繕った。
「あ、うん」
紗江はそれに頷くが、正直、ひやひやしている。
「そうか、ふむ。どちらにしても許可をとらずにこんな場所で練習してはいかん。暗くなれば危険この上ない」
「はい、すいません。今度からきちんと許可を取りますから」
「それはもういいとして、その爆弾とやらはどこにあるんだ。それに他の生徒は？　こう暗くてはきちんと進めているのかも分からん」
「もう少しです。もう少しなんで」
不安そうな村松の背中を馬場が押している。
紗江はこっそり自分たちの歩いている位置をライトで確認しながらだいたいの目星をつけた。
例のポイントまではあと百メートルほどだ。
「あの子達、先生を連れて学校林の道に入っていったわよ。どうするつもりかしら」
三人の後を追いながら、有川が言った。

「さあ、全く分からないけど。この先も追いかけるの？」
「当然でしょ。何、ここで止めるって言ってるの？」
「だって俺たち、明かりがないし」

その時、三人は完全に手ぶらで追跡をしていたのだ。ポケットに入っているのはハンカチくらいなもので、そんな状態で暗い山道を進むには心細い。
しかし、有川は余裕綽々で、

「問題ないわ。あの三人の明かりの後をついていけばいいんだから。それに、仮に私たちが明かりになるものを持っていたとしても、その光で向こうに気づかれては追跡は失敗じゃない」

と説明した。

「それはそうだけど」
「ええ！　じゃあこのままこんな暗いところに入るの？」

すると、そんなことは真っ平だ、と芦沢が言う。

「嫌なら帰りなさいよ。別にあなたがついて来なくても何の問題もないんだから。山下君にあったら、そのＣＤのこと聞いておいてあげる」
「じゃ、じゃあ私、帰る。親が心配してるだろうし」
「そう、それじゃあね芦沢さん。またあした。行きましょ、小野村君」

とそれだけ告げて、薫たちが数歩道を進んだときだった。薫は後ろから誰かに腕を引っ張られた。

「うわっ！　何？」
「何、じゃない。私をここから一人で帰らせるつもり？」
腕を掴んでいたのは今しがた別れの挨拶をしたばかりの芦沢さんだった。冷たい視線で睨んでくる。
「え、何のこと？」
「見なさいよ、真っ暗じゃない」
彼女が指して示したのは、今まで薫たちが歩いてきた道路沿いの道。確かに彼女の言うとおり、光源らしいものはところどころに見える街灯しか見えない。
この辺りは車の通りも少ないので、夜はそんな寂しい様子になるのだ。
「そりゃそうでしょ、夜なんだから」
「それに、この道を帰ったとして、あの暗い校舎の中に荷物を取りに行かないといけないじゃない。どうするのよ」
「どうするのよって言われても」
「芦沢さん、一人で帰るのが怖いなら怖いってはっきり言いなさいよ」
人の弱点を知って、まるで優位に立ったかのように有川が白い歯を見せ、にやつく。
「怖くなんかないってば、ただ、そうよ、危険でしょ、夜道は。どこから誰が出てくるか分からないし」
彼女はそう返したが、薫たちからは虚勢を張っているのはみえみ

えだった。

「だから、その、小野村君を護衛に」

「そのチビ助が役に立つの？」

「チビ助いうなあ！」

薫は有川の言動に憤慨する。

「ともかく、小野村君まで連れて行くのは駄目よ。小野村君は堂野君たちを探してるんでしょ、おそらく馬場君たちが行く先に彼らは居る。見つけるには、追跡しないと」

「ああ、俺もあの三人の後を追いかけたい」

薫もそれに同意した。

「ええ、そんなあ！」

見捨てられた少女は泣き出しそうな声を出す。

「こうしてる間にも前を歩く三人との距離が離れてるわ。こうなったら、芦沢さんに早く決めてもらわないと」

しかし、有川はそう言いながら少しも焦っている様子はない。むしろ何かを楽しんでいるようだ。

すると、彼女は芦沢の目の前で二本指を立てた。

「芦沢さん、あなたがとれる選択肢は二つ。このまま一人で帰るか、それとも、我慢して私たちに付いて来るか。さあ、どっちにする？」

残酷な質問を隣で聞きながら薫は、心底、人を追い込むのが好きなんだろうな、この人は、と芦沢に同情しながら思っていた。
芦沢はというと、薫の腕を放そうとはせず、帰り道と、山道とを何度か見比べてようやく、
「わかった。ついてく」
と不承不承頷いた。

第十四話　闇に潜む影にアンダーライン（後編）

綾坂中学校の学校林にはこれで、馬場、奥山、それに連れられた村松の三人。それから、その背後で彼らの後を追う、薫に有川、それから周囲の物音に人一倍敏感になっている芦沢が入ってきたことになる。

しかし、彼らが進むその先の闇には、彼らを待ち受けている二人の影があった。全ての計画を発案した山下、それから堂野の二人である。

二人は少しずつ山道を登ってくる馬場と奥山のライトの光を眺めながら、そこよりさらに道を登った小さな広場の茂みにいた。

周りには木々がなく、古ぼけた公衆トイレといくつかのベンチが見えるそんな場所だ。公園とは違うが、一種の簡易的な休憩場である。

毎年、夏と冬に生徒たちによる一斉清掃があり、そのときにこの辺りも伸びた枝や群生する雑草も取り除かれるのだが、今は残念なことにかなり荒んだ状態だ。

草は伸び放題、木々の枝は野放図に垂れ下っている。

そんな邪魔な枝を払いのけながら、山下はうれしそうな声を出す。

「おい、見ろよ。ようやくお出ましだ。あの村松を呼び出してきたらしいぞ。馬場と、奥山って言ったっけ？　うまくやってくれたみたいだ」

「ああ、そうみたいだな。山下、いったいどんな嘘で呼び出せって指示したんだ？　俺はそれが不安だったけど」

馬場をこの作戦のために呼び出し、大雑把な説明をしたのは堂野だったのだが、実はその後、入れ替わりで山下が出向き、直接村松を呼び出すための具体的な内容について彼に説明したらしい。
そのため、堂野はその「具体的な内容」について聞かされずに、今ここにいる。彼が危惧しているのはその点だったのだ。

「なあに、聞いたらおったまげて、いてもたってもいられなくなるような、とんでもない内容の嘘さ」

山下は自信満々に鼻の頭を擦る。

「現に、村松の奴、きちんとこっちに来てるし、まあ、問題はなかったってことだな」
「……確かに、まあいいか。ともかく、今はこれからのことに集中すべきだな」
「そういうこと」

この二人、山下が考案した嘘で、紗江が冷や汗を掻いていたことを知らない。

「CDプレーヤーの準備はいいか？　目標はC地点を越えた。確認するが、B地点で馬場と奥山はその場を離脱する手筈になってるんだな？」

茂みの中でペンライトを点け、ごそごそとカバンをあさりながら、堂野が山下にそう囁いた。

「ああ、そうするように言ってある。それより、セロハンを貼り付けたライトはどこだ？　それがないと、演出効果が半減するぞ」
「リュックのポケットに三本入ってる。山下の方に入ってたはずだ

ぞ。衣装の方もそろそろ被ったほうがいい。台詞は覚えてるのか？」
「いや、それはこっちのラジカセのテープにあらかじめ吹き込んである」
堂野は彼の如才無さに小さく口笛を吹いた。
「準備がいいな、やまし……」
「山下にしては、は余計だ」
そう注意して彼は頭から白っぽく装飾された何かを被る。

山道を登ってどのくらい歩いただろうか。薫たちは、前を歩く三人の後方、五十メートル付近にいた。
明かりがない分、慎重に足場を確認しながら彼らを追跡するため、悪戦苦闘しながらの道のりだ。

しかも、薫は芦沢に腕を掴まれ、その上、足元で何かを踏んづけた音がするたびに小さく悲鳴を上げる彼女の対処に困っていた。道を歩くのでやっとなのに、である。
「ひゃあ！　な、何か、足に触った」
またしても、彼女の小さな悲鳴。
「ただの草だって。そんなに驚かなくても。それにもう少し静かにしてもらわないと、村松先生たちに気づかれるって」
「だ、だって。絶対ここ、何かいるって」
そう細い声で訴えてくる芦沢は、普段の気の強い彼女とは違う、

か弱い少女の声だった。それに心なしか小刻みに震えているようだ。
「大丈夫だって、何もいないから。もう少し俺の真後ろを歩いたほうがいいよ」
「う、うん」

いつになく素直な様子で彼女は言われた通り、薫の後ろにつく。
それを前に歩く有川が見つめている。ふふんと鼻をならした。
「おびえてる女の子には優しいのね、小野村君」
「それはまるで俺がいつも優しくないみたいだな」

むっとして薫は返す。
「ああ、ごめん。そんな風に聞こえちゃった？」
「これでも俺も男だからね。こんな時に何も出来ないようじゃ、不甲斐ないよ」

薫はここぞとばかりに胸を張る。普段、小さいだのなんだのと周りから抑圧されている分、彼の男としてのプライドが今だ、と顔を出しているのだろう。
「なるほど、おびえた芦沢さんに男らしいところを見せていると。これは君恵に話しておかなければいけないわね」
「え、な！」

突然、君恵の名前が出てきて薫はたじろぐ。
「君恵……それって須藤君恵さんのことよね。なんで彼女が出てくるの？」

これには怖がっていたはずの芦沢も興味を示してきた。

「聞くな、芦沢さん」

「それはねえ、小野村君が……」

「言うな、有川さん」

「ふふふ、焦ってる焦ってる」

ストレス発散でもしているつもりなのか、有川は堪え切れないように笑う。

「そんなことより、先に進まないと見失うから。ほら、早く」

薫は話を終わらせ、そう急かしながら足早に前方の明かりを追いかけた。まるで逃げるような態度をとってしまったことは男としてはマイナスだろうか。

薫が少し不安に思った、その時。

前方の明かりが消失した。

「あれ、どうしたんだろ？」

「明かりが消えた？」

次いで、暗闇の中から村松が誰かを呼ぶ声が響いてきた。どうやら、馬場と奥山を呼んでいるようだ。

「ど、どうしたのかしら、ま、まさか、ユーレイ、とか」

背後から芦沢さんの震えた声が聞こえる。

「落ち着いて、芦沢さん。そうとは思えないって。多分、馬場君と奥山さんがいきなり身を隠したんだよ」

実は、明かりが消える寸前、その明かりが道の脇に逸れていくのを薫は見ていたのだ。

「でも、だとしたら、どうしてそんなことを？」

これには有川が答える。

「それは分からないけど。おそらく、こんな場所に村松先生を呼び出したのはやっぱり何か、企みがあったってことよ。こうなると事の顛末を見届けるまでは帰れないわ」

「確か、あの辺りって、休憩所があったよね」

薫は以前、この場所に来たときの風景を思い出しながら言った。

「そうなの？　よく覚えてないけど」

しかし、薫はよく記憶していた。村松の位置が大方分かれば、自分たちがいる場所も同時に分かった。

暗闇に慣れ始めた目で、近くにわき道を見つける。

「こっちだ。この道を行けば、ちょうど休憩所の反対側に廻りこめる」

「本当？　よく知ってるわね」

「たまたま覚えていたに過ぎないよ。それより、早く行かないと何が起こってるのか分からないって」

「ちょっと待ってよ」

薫と有川が進みだした道を少し遅れて、芦沢が恐る恐る足を踏み入れる。

薫は足早に草の生い茂った細い山道を進みながら、あることを思い出していた。

それは、村松が自分に明らかに目を付けていると知りながら、堂野が妙に落ち着いていたあの電話での会話である。

その時は、堂野が真面目に薫の話を聞いてくれていないのだと、腹が立ったものだが、冷静に考えればこう考えることも出来た。

つまり、その事態を最初から堂野が知っていたかもしれないという可能性だ。

そう仮定すれば、彼の行動がここ数日おかしかったのも頷ける。

村松をここに呼び出し、薫から目を背けさせるための何らかの作戦を講じる準備をしていたとすれば、辻褄も合う。

そして、それを今日まで黙っていたのか。

薫は走りながらぎゅっと拳を握り締める。転ばないように慎重に足場を探りながらも、強く地面を蹴り、村松がいる小さな広場へと急いだ。

もう後ろに二人がついてきているかなどと考えなかった。

物音がすることも気にしなかった。

これから何が起こるのかを見届けたかったのだ。

広場まで、あと数メートルというところまで来たとき、前方の闇でなにやら青白い光が突如、灯った。その怪しげな光に照らされて何かが立っているのが分かる。

そして、その僅か後方に村松の姿を確認する。

それから間髪入れず、彼のものと思しき悲鳴が聞こえた。「うわあ」だったように思うが、大人にしてはみっともない声だったのは確かだ。

何が起こっているのかは分からないが、ともかく作戦が実行されているらしい。

薫は残りの数メートルを大股で駆け抜け、一息つく間もなく、近くのベンチの影に隠れる。

そして、その横から顔をのぞかせ、様子を窺った。

ようやく、青い明かりの中に立っているものの正体が見える。

「あっ！」

そう叫びかけて慌てて口を押さえる薫。

彼がそんな反応をしてしまったのも無理もない。

そこにいたのは、体中に包帯を巻いていると思しき女性だった。

その女性がうつろな表情で村松を凝視しているのだ。異様な光景に薫は目を瞠る。

すると、どこからか、聞いたことのあるようなおどろおどろしさを誘う音が聞こえてきた。細い笛の音と、太鼓の「ドロドロ」という音、いかにも幽霊が登場するときの効果音である。

「なんだ、お前は！」

対峙している村松がそう叫んだが、見ると、腰が引けていた。隙あらば、すぐにでも逃げ帰ってしまいそうな雰囲気である。

薫は目を凝らして、その女性が立っている背後の茂みを見た。つ

い、今しがた何かが動いたような気がしたのである。

堂野だ。瞬時に悟る。

茂みに隠れてもあの高い身長は見間違いようがない。

ということはやはり、目の前に立っている女性は山下が変装しているのだろう。

薫たちの教室から、文化祭で使うおばけに変装する道具が、彼らによって盗み出されていたのを思い出したのだ。

「お前が村松か」

すると、身体に白い包帯を巻いた女性が低い声を出した。生気を感じさせない青白い唇が動く。

「小野村薫を知っているな」

「な、なんだ、奴がどうした？」

「最近、あの子を付けねらっているとか」

「な、何の話だ？　お、お前に関係があるのか？」

青白い光に村松は照らされているが、きっと普通の明かりで照らされても、彼の顔は青白いことだろう。

再び、低い声でその女性が言う。

「あの子はただの人の子に非ず。我が霊力が宿りし、異能を持つ者であるぞ。お前が手出しをするべき存在ではない」

「ひいっ！」

「よいか、命惜しければ、あの子に近づくことは止めよ。さもなくば、お前だけではない、家族、一族に至るまで全員、呪い殺すぞ！」

その女性の幽霊はそうすごんだ。まるで、村松に覆いかぶさろうとするかのように、両手を大きく広げ、血を吸った後のような真っ赤な口をかっと開いている。

「は、はあああ、分かった。分かったから、頼むから見逃してくれ」

それには村松も緊張の糸が切れたようだった。おびえた声を出し、一歩後ずさったのを合図にしたかのようにきびすを返し、一目散に駆け出した。

情けない悲鳴を上げながら、木にぶつかろうとも気にせず、元来た道を走っていく。

そして、その声も遠のいた頃合いを見計らったように、包帯を巻いた幽霊が身体を揺すって笑い始めた。

「ハハハ、上手くいった。傑作だな」

それは、聞き覚えのある山下の快活な笑い声だった。

それから、数分後。

「なるほどね。そういう事情があったわけだ」

腕組しながら山道を下りていく有川は腕組みをして頷いている。

その前でライトを照らしているのが、山下。そして有川の背後には、堂野、それから薫、芦沢、奥山、馬場と続いている。全員が一列となって堂野の話に耳を傾けていた。

彼によってこの一連の珍事の種明かしが行われた後だった。山下のイタズラから始まり、今日までの出来事を順を追って説明した。

「すると、やっぱり俺が電話をしたときには、亮介は村松先生のことは知ってたんだ」

薫が訊いた。

「まあな。あのときには既に山下と準備を始めてたから。その事情を須藤さんには話したんだ」

それで彼女が電話の後、微笑んでいた理由が分かった。

「まあ、私にそんな大事なことを話しておかなかったことはさておき、それにしても、幽霊に変装して村松先生を驚かすなんて安っぽいアイデア、よく上手くいくなんて思ったわね」

有川が鼻で笑うように言った。

だが、堂野はそれに冷静な口調で返す。

「確かに単純だけれども、驚かすっていうのは一番効果があると思ったんだ。得体の知れないものからの恐怖の感情っていうのは強い衝撃があるし。簡単に忘れられるものじゃない」

「そうだそうだ。村松の奴、あれだけ驚いてたんだ。おそらく、小野村が卒業するまでは呪われると思って枕を高くして眠れないだろうな。かわいそうに」

山下は俯いてくっくと笑う。そうすると彼が被っている包帯女の頭が揺れた。

「いつまでそんなものを被ってるのよ。ちょっと見せてみなさい」

有川がそう言って、彼の頭から掴み取る。それは薄いビニールか何かで作られているらしく、彼女が持つとクシャリと音がした。

「こ、こんなちゃちな変装だったの？　よく先生が気がつかなかったわね」

「まあ、暗かったからね。細部までは見れなかったんだろうな。それも計算に入れて、照明も青いライトで照らしたんだ」

これは堂野が説明する。手に持っていたライトになにやら青いビニールを被せ、照らして見せた。

「ほら、こんな風に」

「それから、雰囲気も出るようにお化けの登場に使うCDも用意した」

「それは、私が貸した効果音の入ったCDでしょ。すぐ返すっていったのに、待っててもその気配がないし。そのせいでこんな場所までくるはめになったんだからね。山下君には責任とってもらうわ」

人が大勢いるので安心しているのか、芦沢はいつもの調子に戻ったようだ。軽い口調の山下に噛み付く。

「結局こうして、あなた達に関わることになるなんて。計算外だわ」

「まあ、これで、村松と後腐れなく終われそうだからいいじゃないか」

「ちっともよくない！」

「うおっ、おっかねえ」

山下はその怒声に首を引っ込める。

「……それで、馬場君に奥山さんは大丈夫だったの？」

有川が一番後ろを歩く二人に振り返って聞いた。

「ええ、なんとかな……」

「全然問題ありませんでした！」

先につぶやいた奥山の声を遮って馬場が元気一杯の声を出す。ライトの光で彼がそれっぽく敬礼しているのが分かる。

それを見て、奥山が持っていたライトで背中を小突く。

「何言ってるの、問題ありまくりでしょうが」

「……まあ、無事でなによりだわ」

そこで堂野が口を開いた。

「二人には感謝してる。馬場君と奥山さんがいなければ村松先生をここへ呼び出す口実を俺たち二人じゃ作れなかったからね。ばれたら危険な役だったけど、上手くやってくれて本当にありがとう」

丁寧に感謝の意を示す。

「いいえ、どうってことありません。我ら演劇部の危機を救ってくれた小野村先輩を助けるためなら、お茶の子さいさいですよ」

彼はなぜか両腕をぶんぶんと振り回している。

「だけど、まさか小野村たちがここに来るなんて予想外だったよなあ」

山下は思い出したようにしみじみと言う。

「ああ、それにはびっくりした。村松が行ったあと、ベンチから誰かがやってきたと思ったら薫だったもんな」

堂野が頷いた。しかし、この言葉に対し、なぜか力なく返事をする薫。

「……うん」

「本当なら薫には何も知られずに、俺たちだけで全てを終わらせるつもりだったのに、計算が狂ったといえばその点だよな」

「……」

これには無言だ。

「どうした、浮かない顔で」

堂野が言って、薫は思いつめたように立ち止まる。それによって、その背後の列も立ち止まざるを得なかった。

「どうして……」

「え？」

「どうして、こんな大事なこと、俺に話さなかった？」

そう言って歯を食いしばる。

確かに、村松を自分から遠ざけてくれたことに、薫は感謝をしていた。だが、そんな一大事から自分が疎外されている気がしてならなかったのだ。それが薫には解せない。

少しの沈黙の後、堂野が口を開く。

「それは、俺も何度か考えた。やっぱりお前に話すべきかどうか、

でも……」
「……」
「でも、お前は今回の主役だ」
「主役？」

薫は顔を上げて、彼を見上げた。

「ああ、劇に慣れてなからおうが、須藤さんの代役だろうが関係ない。薫は今回の劇の主役だ。だからこそ、お前にはそのことだけを考えていて欲しかった」

彼はそこで言葉を切る。

「そして、そのお膳立てをするのは周りにいる俺たちだ。邪魔する奴が来れば、追い返すし、演技で悩んでるなら聞いてやる。後ろから支えてやる」
「……亮介」
「お前はヒーローなんだよ」

彼はそう高らかに言い放って薫の肩に手を置いた。それに呼応するように皆が頷く。

「そうだぞ」
「そうよ」
「そうです」
「そうッス」

皆、満面の笑みだった。

「そ、そうだと思うわ」

少し遅れて、空気を読んだ芦沢が言う。
「だから、まっすぐ前を向け。俯くな」
その力強い声援は薫の中に奥深く突き刺さった。そして、まるでそこから暖かなエネルギーが染み出してくるように、薫の中に浸透し、返事をしたように心臓がドクリと脈打った。それが分かった。
目の前の暗いもやもやが晴れていくようだ。
ただ、純粋にうれしかった。
「分かったよ。みんなありがとう」
そうだ、自分に今出来ることは精一杯、文化祭の劇で役を演じきること。それだ。
薫は深くお辞儀をする。
「でも、一ついいかな？」
「何？」
「激励してもらったのは嬉しいけど、みんなから言われると、プレッシャーが半端じゃないんだよ。その辺りの配慮はしてもらえないんですかね？」
薫はこめかみを人差し指で掻いた。
それを聞いて全員が笑った。
「確かに、ね」
「かなり芝居がかってたよな」
「ハッハ、確かに。今のはかなりみんな期待がこもってたよな。俺がこれだけがんばったのに、重圧で劇に出るまえに倒れたら洒落に

ならないもんな」

最後に山下が言い、腰に手を当て豪快に笑う。しかし、皆、なぜかそれを見て、冷たい視線になった。

その嫌な空気に気がついたのか、中途半端に山下の笑い声が止まった。

「な、なんだよ。皆」

「俺がこれだけがんばったですって？」

有川の言葉には憎しみがたっぷりこもっている。

「そ、それが？」

「元をただせば、あんたが村松先生にいらないちょっかいだそうと考えたからでしょうが。どの面さげてそんなこと言ってるの？」

山下の表情がみるみる凍りつき、視線が宙を泳ぐ。

その場の全員が彼を取り囲むように並び、じりじりと間を狭めた。一様に皆、半眼で睨んでいる。

「え、え、え」

「確かに、有川さんの言うとおりだ」

「皆、落ち着け、話せば分かる」

彼は両手でストップをかけていた。

「山下！」

そこに芦沢さんのしびれるような声が響く。

「土下座、百回！」
「ど、どうか、ご勘弁を～～」
村松に続き、夜の森に消えていったのは山下の情けない声だった。

第十五話　君恵からの電話にアンダーライン

学校林での出来事から一夜明け、薫はいつも通りに登校をしていた。眠たい目をこすり、欠伸を堪えながら、学校にへと続く坂道を上る。

他の仲間たちとも登校後、薫は顔を合わせたが、特に何事も無かったかのように挨拶を返してくれた。

何か変わったことと言えば、昨日皆からこっぴどく叱られた山下がさすがに落ち込んでいたこと。

それから、薫に怪しい視線を向けていた村松が廊下で薫を見つけた途端、青い顔をして回れ右をし、教室の中に帰っていったこと（これには堂野と一緒に二人で笑った）が挙げられる。

それから、忘れてはならないことがもう一つ。

病院の検査やら治療やらで少々退院が長引いていた君恵が久々の登校をしてきていたことだった。

まだ足はギプスで固定され、松葉杖をつきながらの登校だったが、校門で薫たちを見つけるや否や、急いで歩いてきて挨拶をしてきた。

そして、彼女が戻ってきたことを知った薫たちは、休憩時間に彼女の教室に集まり、一昨日の学校林での出来事を、さも息詰まる戦いしたかのように熱く語ってみせた。

それには彼女は手を叩いて笑い、私も出来ればその場にいたかったものだと少ししょんぼりした。

だが、ともかくこれにより、心配ごとのなくなった薫たちが目指すものは本番の劇だけに絞られていた。

そのため毎日の練習で、有川の指示も一段と熱が入り、日に日に緊張感が増してきた。
自然と薫もどうしたらもっとよりよい演技が出来るのかと考えるようにもなった。今までは誰かに説明されるだけだったが、ただ成されるがままというのも恰好悪いものだ。

自分で考え演技の向上を目指す、そこにはもっと面白い演劇の深みがあると薫は思っていた。
そういえば、ようやく学校に登校できるようになった君恵だったが、彼女が劇の練習に来ることがなかった。

それに気づいた薫はどうしてなのか、と疑問に思った。
それを有川に尋ねると、彼女は、

「完成した劇を本番でお客さんと一緒に見たいからだそうよ。それまではお楽しみとして練習も見ないことにしたって言ってたわ」

と話した。
なるほど、それならば万全の体制で劇が行われるようにさらなる努力をせねば、と薫はさらに意気込んだのだった。

そうするうちに日々は瞬く間に流れて行き、いつしか文化祭前日を迎えていた。
学校中で、文化祭の準備が急ピッチで進められていて、教室や廊下は様々な装飾品で飾られ、校門近くにはクラスの作品であるいろいろなオブジェが校庭に出現したりしていた。
学校内は活気ある声で溢れ、普段は走ったら注意される廊下も今日はひっきりなしに道具を持った生徒たちが駆けていく。

薫たちのクラスもその例外ではない。
苦労して作った「お化け屋敷」を成功させるため、クラスメイト一丸となって最後の調整に入っていた。
教室のカーテンは取り払われ、全ての窓に黒い暗幕が張り巡らされた。机も椅子もなくなり、小さな迷路のように壁が置かれ、通路を作っている。

実際、どれほどの怖さなのかを調べるため、出来たばかりのお化け屋敷に暇そうな他のクラスの生徒を集めてきて、意見や感想を求めているグループもいた。

その一方で、もちろん、演劇部も明日に本番を迎えた劇の準備に余念がない。薫がそちらを覗くと、衣装や様々な小道具が部長の指示の元で入念にチェックされている最中だった。その後、薫も衣装に着替え、本番を意識したリハーサルが行われた。

舞台中がぴりぴりとした言いようのない緊迫感に包まれており、薫はいつもの倍以上の力を使った気がした。
そんなこんなで、薫にはあっちにこっちにと身を引き摺られ、東奔西走しているうちに終わった一日だった。

そして、その夜。
薫は忙殺された一日の疲れを癒そうと自室のベッドに寝転んでいた。すでに夕食も終わって風呂にも入り、翌日のための準備も終わっている。

特に目ぼしいテレビ番組もなく、とりあえず部屋のミニコンポのラジオがついていたが、内容は耳に入っていない。ほとんどＢＧＭとして流れている。

そんな薫は何もすることのなくなり、寝るわけでもなく、うだうだと転がっているのだ。
時折、
「うう、疲れた」
と唸ったり、読むわけでもなく漫画のページを開いたりして、気がつけば、とろとろと時間だけが過ぎていっていた。
今日だけは早めに寝なければ、明日の劇に影響するかもしれないと思っているのだが、目を閉じても眠れそうな気配がない。
その理由はもちろん分かっている。
薫は今、緊張しているのだ。
彼にとって経験の少ない舞台というあの場所で、明日、客を目の前にして自分は白雪姫を演じるのだ。
今さら、女役を演じることに四の五の言うつもりはないが、それ以上に薫の前に立ちはだかっているのは役者としてのプレッシャーだった。
いくら代役であろうと、自分の責任は決して軽くないことぐらい薫は承知していた。
その不安が消えない。
まるで耳の周りをぶんぶんと浮遊するうざったい蚊のようについてくる。
薫はそこでふと思うことがあった。
君恵も、彼女も劇を演じる前はこんな気分だったのだろうか、と。

自分の周りの世界が圧縮されるような、逃げられない行き場のない緊張を感じていたのだろうか。
そして、薫と同じように緊張で眠れなくなったり、無為に時間を過ごすようなことがあったのだろうか。

その瞬間、薫はふっと気が緩み、胸が温かくなるようなものを感じた。
なぜか、うれしかったのだ。
彼女とどこか、繋がっている、そんな感覚が。同じぴりぴりした痛みを共有している、そう思うと、すごくくすぐったくも思えてくる。

自分が彼女と似通った経験をしている。
ただそれだけのことだが、そう思うだけで薫の頬が自然と熱くなった。
すると、突然部屋の外から名前を呼ばれた。

「薫、起きてる？」

それは薫の母の声だった。階段を上ってくるのが分かる。

「どうしたの？」

身を起こして、部屋のドアを開けた。

「須藤さんからお電話よ」

そう言って、母は薫に電話の子機を手渡した。

「須藤、さん？」

薫は大きく口を開いて発音し、確認する。ちょうど今、彼女のことを考えていたときで、ドキリとしたのだ。なんというタイミングだろう。

「そうよ。ほら、待たせてるんだから、早く出てあげなさい」

「あ、うん」

薫が頷くと、母は階段を下りていく。それを見て、部屋に戻り、すぐに通話ボタンを押した。

「もしもし、須藤さん？」

「あ、小野村君？　ごめん、もう寝てた？」

電話に出た彼女は申し訳なさそうな声を出す。

「そんなことないよ。ずっと起きてたよ」

「そう、それならよかった。明日が本番だからもう寝ちゃってるかと思って」

確かに、薫はそれを思って寝ようとしているところだったが、それは言わなかった。

「それより、どうかしたの？」

「大したことじゃないんだけどね。ただ、明日が本番だから、きっと緊張してるだろうなって。それで、気になって電話したんだ」

「ああ、なるほど」

「それで、気分はどう？」

「お察しの通り、緊張してる」

薫は抵抗することなく白状した。

「ふふ、やっぱり。だよね、緊張しちゃうよね」

彼女が受話器の前で笑っている。薫はそれを聞きながら、部屋のドアを背もたれにして座った。

「須藤さんもやっぱりそうなる？」

「もちろん。人間なら誰だって多かれ少なかれ緊張しちゃうんだよ。どうしようもないことだって」

「どうしようもないこと、か」

「そうだよ」

「じゃあ、そんなとき、須藤さんはどうするの？」

薫が質問する。

「そうだねえ、私だと好きな音楽を聴くんだ。気分の切り替えが出来るでしょ、それでリラックスしてよく眠れる。そういうことをするといいと思うんだ」

「ふうん」

「じゃあ聞くけど、小野村君はどんなことをしてるとリラックスできる？」

逆に質問されて、一瞬薫は言葉に詰まった。自分がリラックスできること、何かあるだろうか。

本を読む？　ストレッチするとか？　彼女と同じで音楽を聴く？

聴く、といえば、薫は何気なく思い出す。

薫が君恵の声にアンダーラインを引いて時々、自分の中で繰り返し聞いていることだ。
落ち着く、というとあれはかなりリラックスできることだ。だが、そんなことを彼女に言うわけにはいかない。

「ええっと……」
「なになに？」
「その、須藤さんの、声、聞いてると……」

薫はそう言いかけて、途中で自分にストップをかける。手のひらで口を塞ぎ、なんとか押し込む。
その先は、とても言えなかった。

「え？」
「いや、こうして友達と話してると楽しいし、それだけで充分、リラックスできると思う」
「……」

すると、受話器の向こう側が無言になった。薫は心配して彼女の名前を呼ぶ。

「須藤さん？」
「うん、聞こえてる。ごめん、なんでもない」
「だったらいいけど」

すると、彼女は声の調子を変えて、薫に優しく語りかけた。

「じゃあ、小野村君が眠りたくなるまで、私が話し相手になってあげるね」

薫にはそれが驚きだった。彼女がわざわざ自分の話し相手になってくれると言ってくれるなんて、願ってもないことだった。

「い、いいの？」

ドキドキしながら遠慮がちに訊いた。

「それくらいなんでもないよ。それより、ねえ、何の話しようか？」

薫は少しだけ天上を見上げ、逡巡して答える。

「そうだねえ、これまで、須藤さんは劇でどんな役を演じてきたの？　それについて聞いてみたい」

すると、君恵はそんなものお安い御用といわんばかりに話し出した。

中学校に入ってからはもちろんのこと、小学生、さらに、通っていた幼稚園での発表会で演じたウサギの役についても話し慣れているかのように滑らかに喋った。

これはああだった、こうだったとその時の気持ちまで全て語ってくれる。

薫としてはそれに対して、ただ相槌を打つくらいしかできないので、「うん」とか「へえ」とか返していた。

「それでね、劇の途中にその子、被ってた熊の頭が取れちゃってさ……」

「あはは、それで…こほっ、こほっ」

二十分ほど話したときだろうか、薫はなぜか喉に異変を感じ、そ

れと同時に咳が出始めた。
「小野村君、大丈夫？　さっきから咳が出てるみたいだけど」
「ど、どうってことないよ、ごほっ、ごほっ」
「ほら、またしてる」
彼女が不安げな声を出す。
「おかしいな、空気が乾燥してるせいだと思うけど、こほっ」
口を押さえているが、どうしても咳が出てしまう。
「もう今日は寝たほうがいいよ。これ以上話をして、悪化しても悪いし」
「分かった、そうするよ。須藤さんに心配はさせられないし」
「それじゃ、電話切るよ。ちゃんと、すぐ寝るんだよ。ベッドに入って、ちゃんと暖かくして」
まるで、おせっかいを焼く母親のようなことを彼女は注意した。
しかし、彼女が自分のことを心配してくれていると思うとうれしい薫、余計なことは言わず、素直に応じた。
「うん、そうするよ」
「それじゃあね、また明日……おやすみ」
彼女がつぶやくように別れの挨拶をする。それがどこか、まだ話し足りないようで、名残惜しそうだったように感じた。
その切なそうな言葉に、こっそりアンダーラインを引いておく。
「それじゃあ、須藤さんもおやすみ」

そう返して、通話終了のボタンを押した。そして、電話の子機はそのままにして、すぐさまベッドに入った。彼女に言われた通り、喉の辺りまで掛け布団を引き寄せる。

明かりを消そうとして、また咳が出た。

まさか、風邪でも引いたのだろうか、と思うが、特に熱がある風でもない。

でも、いつだったか、同じようなことがあったような。

変だとは思ったが、不安を振り払って目を閉じた。

すると、君恵の声を聞いたあとで安心していたためか、数秒後にはあっという間に夢の中に落ちていっていた。

第十六話　開演の舞台にアンダーライン

文化祭当日ということもあって、堂野亮介はその日、早めに家を出た。

いつもならもっと遅めに家を出ることが習慣になっているのだが、さすがに今日のような特別な行事があると、そんなことも出来ない。母親に起こされ、いそいそと支度をして、家を出る。

そして、大きな欠伸をかましながら校門をくぐり、昇降口で靴を履き替えると教室へと向かった。

すでに到着しているクラスメイトたちは本番前の準備をしている。がやがやと騒がしい中を堂野は移動した。

予定としてはこれから全校生徒が一旦体育館に集合し、ほとんど形だけの開会式が行われる。

その具体的な内容など、いちいち述べるに値しないものだが、大雑把に言うと、開会宣言や、生徒会長からの挨拶、校長、教頭などの右から左に受け流す話が続き、大抵は校歌を歌ってそれで終わり。

それから、本格的な文化祭となる。特に前夜祭のようなこともないので、生徒達はその一日に全力をかける。

青春を謳歌する生徒たちにとっては欠かすことの出来ない重要なイベントになるのだ。

だが、そんなことなど特に気にならない堂野は暇な朝の時間、教室の後ろの壁によりかかりうとうとしている。

低血圧の彼はいつでも朝が弱い。

そんな彼に教室の外から声がかかる。

「堂野君、おはよう」

顔を上げると、廊下に立っているのは演劇部部長の有川だ。気合が入っているのか、今日は一段と凛々しく見える。

「有川さん、ふぁ、おはよう」

またしても出てきた欠伸をかみ殺しながら堂野は手を振る。

「あら、ずいぶん眠たそうだこと」

彼女はそう言って、結わえた髪を揺らし、颯爽と教室に入ってきた。

「どうしたの？」

「どうしたですって？　いつもの冴えた推理はどこにいったの？あなたなら当ててみなさいよ」

堂野は彼女の挑戦的な目つきに、面倒くさそうに首を振る。

「あいにく、朝はそんな気分にはなれないんだ」

「そう、残念」

「けど……」

「けど？」

「その様子なら緊急の用事ではないらしい。何か問題があるわけじゃなさそうで安心した」

「そりゃ、この時点で問題があれば悠長に話なんてしてられないでしょうね」

彼女は不機嫌そうに眉間に皺を寄せる。

「予想外の問題なんて、もうこりごりよ」

と苦々しげに言った。

堂野にはそう言う彼女の気持ちが分かった気がした。思えば、順調に波に乗っていた劇が君恵の突然の事故により、暗礁に乗り上げた。

そして、苦労して薫を代役として選び、全くの初心者を一から練習させた。しかし、安心したのもつかの間、村松に不審に思われていたことで、危うくその代役をも失うところだったのだ。

部長の彼女からしてみれば心底、疲れがたまっているに違いない。それは堂野も同じだった。ここ数週間何かと息つく間もなく出来事が連続している。一日一日がとても長く感じていた。

「俺も同感だ」

堂野は頷きながらそう返した。

「ねえ、小野村君は？　開会式の前に彼の顔を見ておこうと思ってここに来たんだけど」

有川は慌ただしい教室を見渡す。

「ああ、まだみたいだ。そろそろ来てもいいころなんだけど」

すると、噂をすれば影、とよく言うように、背丈の低い少年がひょっこり教室の後ろの入り口に姿を現した。小さな顔の瞳をきょろきょろと動かし、ためらいがちに教室に入ってきた。

その様子はどこか臆病なリスのようにも見える。おそらく、女子から見れば、そんな仕草が可愛く見えるのだろう。

「おうい、薫」

堂野の呼ぶ声に彼は気づいたようだ。

「ああ、亮介、おはよう」

そう返事をした薫の声に、堂野と有川はいつもとは違う微妙な差異を感じた。

なぜだか分からないが、いつもと違う。

そんな違和感があった。

手入れされているはずのフルートの中に小さな異物が入っているような、そんな感じ。

整っている旋律のはずが、どこかずれているようなのである。

「……」

その感覚に無言になる堂野。

「どうしたんだよ。変な顔して」

「いや、薫。まさか、声変わりしてるか？」

「声変わり？　いや、分からないけど。してないと思うぞ」

不安になって堂野は隣の有川を見る。すると、彼女も首を傾げていた。

となると、やはり勘違いではないのだろう。

「薫？」

「だ、だからなんだよ？」
「試しに、声まねをしてみてくれないか？　なんでもいいからさ」
「どうして？」
「いいから、早く」
「なんでもいいんだな？　じゃあ、こほん」

堂野の前で薫は少し目を閉じ、

「ど、どうか、ご勘弁を～～」

これは山下が芦沢に謝っていたときのものだ。
これには堂野、有川と顔を見合わせた。
その声には特に問題がなく、完璧と言えるほど、うまく真似している。
先ほど感じた違和感は微塵もない。
これはいったいどういうことだろう。

「どうだった？」

しかし、こうして普通の言葉を聞くと、やはり歯に物が詰まったような不快感がある。

「よく分からないけど、声まねの方は問題ないみたいだな」
「そうね、声がなんだかおかしな感じだけど」

と有川も首を縦に振る。

「声って、何がおかしいのさ」
「何がおかしい、というか。うまく言い表せないけど。薫は自分でいつもと違う感じはしないか？」

「違う感じ？」
薫は首を捻る。
「そう言えば、関係があるかは分からないけど、昨日の夜、咳が出た」
「咳って？」
「普通の咳だよ。風邪になってるときみたいな。でも、朝になったら治ってた。それに、熱もないし、ごらんの通りぴんぴんしてる。問題ないよ」
「経験から言わせてもらっていいかな」
親友の真剣な声に薫は身構える。
「なんだよ」
堂野はゆっくり子供に言葉を教えるように発音した。
「嫌な、感じ、だ」
「何言ってるんだよ。不吉なこと言うなって。ちゃんと声で真似が出来てるんだから、万事問題ないよ」
そんなこと歯牙にもかけない様子で、薫は後ろを向いて手で払う仕草をする。振り返った顔は、うっすらと微笑んでさえいる。
それと同時に、学校のチャイムが鳴った。放送が入り、生徒全員、体育館に集まるようにと指示をされる。
クラスメイトたちがばらばらと立ち上がり、廊下に向かい始めた。堂野はまだ薫と話をしたかったが、彼は先に駆けて行ってしまったのでどうしようもなかった。

すでに薫の姿は人ごみの中に消えている。

「大丈夫かな？」

溜息交じりに堂野はそれだけつぶやいて、有川と共に教室を出ることにした。

開会式が終わると、綾坂中学校には一般客がぞろぞろと入場門を歩き、流れてくる。

時間が過ぎるにつれ、学校のそこかしこに人の流れができ、留まっていることが難しい。

そんな人が溢れている廊下を松葉杖をついている少女がいた。須藤君恵だ。

前進しようとするのだが、なかなか前に進めない。隅の方で、杖を持ちながら壁に沿ってゆっくり歩くのが精一杯だ。

先ほどまで、友人が一人、君恵に付き添って歩いてくれていたのだが、ほんの少し離れている間にばらばらとなってしまった。

その友人は行方知れずとなって、君恵はなんだか陸の孤島で立ち往生している気持ちである。

「あーあ、困ったな。こんなことなら先に行ってればよかった」

と一人、途方に暮れている。

確か、お昼を過ぎた一時からは演劇部の「白雪姫」が始まるはずなのだが、このままカタツムリのような速度で進んでいてはいつまでたっても、校舎から外にも出れない。

「あれ、須藤先輩」

すると、前方から肩幅が広く、体つきのいい少年が歩いてきた。見覚えのあるその風貌は演劇部の後輩だった。

「ああ、馬場君じゃない。ちょうどいいところに来てくれた」

「どうしたんですか、須藤先輩。こんなところで、それも一人で」

「友達とはぐれちゃって、大変だったところなの。うん？　後ろにいるのは山下君？」

君恵は馬場の後ろに立っていた山下の姿に気がついた。すると、彼はにやりと笑って会釈する。

「もしかして、一緒に回ってたの？」

「そうなんだよ、馬場と一緒にいるとさ、人ごみの中でも前に進むのも簡単なんだぜ。好きな場所に行くのも楯にして移動すればいいんだ」

山下の説明に君恵の中で波を掻き分けて進む大船が思い浮かんだ。

「違うでしょ、先輩。遊んでたわけじゃなくて、演劇部のチラシを配ってたんです」

馬場が右手に持っていた大量のビラを君恵に見せた。

誰がデザインしたものかは分からないが（おそらく演劇部の女子だろう）とてもメルヘンチックな文字で「白雪姫」と大きく書かれている。

「そうなんだよ」

とうんざり気味に山下も持っているビラを見せた。

「あれ、山下君も手伝ってくれてるんだ。演劇部じゃないのに」

「有川の奴に言われてさ。この前の罰だからってこき使われてんの。助けてよ」

彼が言っているのは、村松先生の件だろう。

「それは駄目だって、自業自得でしょ。それにきっと私が頼んだところで久美ちゃん見逃してくれないと思うな」

「はあ、だよなあ」

山下ががっくり肩を落とす。

「ところでさ、もう少しで劇が始まるんでしょ、一緒に連れて行ってくれない？」

君恵が足のギプスを見ながら頼むと、馬場は快く承諾してくれた。

「お安い御用ですよ。俺の肩に掴まってください。ほら、山下先輩もぼうっとしないで、反対側の肩を持ってあげてくださいよ」

「お、おう」

二人が君恵の体を支える。すると、二人より背が低いせいか、君恵の足が宙に浮いてしまった。

「わあ、飛んでるみたい」

と、ついはしゃいでしまう。それに気分が盛り上がったのか、馬場がよく通る声で掛け声をかけた。

「それ！　お姫様を会場までお連れするぞ」

それに応じて山下も腕を突き上げた。

「アイアイサー！」

その様子に周りにいた人々が振り向き、道を開ける。その真ん中を三人が走った。

君恵にはそれが恥ずかしい。

これは、助けを頼む相手を間違えただろうか。

「ちょ、ちょっと」

どうにか制そうとする。

しかし、君恵の言葉など聞いていない二人はどんどん廊下を突っ切っていく。

「どいた、どいた」

誰か先生に見つかったら、絶対怒られるな、そう思いながら、君恵はいつの間にか笑い出していた。

一方、こちらはイベント会場の体育館。

会場に座っている人々から拍手が送られている舞台の袖で薫は衣装に着替え、椅子に座っていた。

両手を目の前で組み、緊張の面持ちで目を閉じている。

舞台では、薫たちの前のステージ、吹奏楽部による演奏が行われたところだった。タクトを握った芦沢が立ち上がった他の部員と共

に、お辞儀をしている。

そこへ観客からの惜しみない拍手が送られる。演奏は大成功だったらしい。

薫から見える芦沢の横顔はとても満足そうだ。

幕が下ろされ、そこで十分の休憩が入る。それが終われば、いよいよ薫たちの出番だ。嫌がおうにも不安が募った。

自分の演技は客に見せるほどのものなのか、興ざめにならないか。そもそも、ヒロインを男子がやっていて大丈夫なのか。

そんな元も子もないことまで頭に浮かんで消える。

小人役の衣装に着替えた奥山が薫に近づいてきた。

「生きてます？」

「脈は止まってないから多分」

手首に指を当てた薫は冗談っぽく言ってみせる。

「その割には顔色が悪いような」

「いろいろと初めてなことで不安なんだ」

「大丈夫ですよ。我ら演劇部の劇はヒロイン役が男子っていう噂が広がって、宣伝効果はばっちりですから、お客が居なくてがらんがらんなんてことにはなりませんって」

鼻を鳴らして自慢げに奥山は話す。

「そ、それはうれしいけど」

むしろそれはプレッシャーになるから、と思って薫は溜息をつい

た。
するとそんな薫の頭にぽんと丸めた台本が振り下ろされる。
「痛っ！」
部長の有川だ。
「しかめっ面してるんじゃないわよ。男なら腹くくって堂々としてなさい」
彼女は物語のナレーション役なので、服装はそのままだ。前に立って、薫の胸元のピンマイクの位置を調整してくれている。
「ほら、ちゃんと背筋伸ばして」
「わ、分かってるたら」
薫は痛んだ頭をさする。
そうするうちに、今度は舞台の袖のドアが開き、そこから山下、馬場、堂野が顔を出した。
山下が、いの一番に駆け寄ってきて、
「小野村、姫をいい席へお連れしてきたぜ」
と得意満面で言い放った。
「姫？」
きょとんとする薫。心当たりのない名前だ。
「須藤さんのことだよ。彼女が人ごみの中で白旗振ってたから、俺

と馬場が救助してきたの」
「どうやらそうらしい」
と隣で頷く堂野がいた。
「そうか、彼女、来てるんだよな。がんばらないと」
薫はつぶやいて、衣装の袖をぐっと握った。
目の前の幕の向こうには、事故で惜しくもこの舞台のチャンスを逃してしまった君恵が座っている。どんな顔をして座っているのだろう。
不安そうにドキドキしながら幕が上がるのを待っている？
それとも劇が始まるのが楽しみでワクワクしている？
どちらにしても、怪我で立てない彼女の分も自分が背負ってやり通さなければならない。
「ようし！」
一人、薫は奮起の声を上げた。
そんな彼を見下ろす親友、堂野は最後に彼の肩を掴んだ。
その背後ではすでに大道具の準備が始まっている。馬場や山下まで手伝わされ、有川が指示を出していた。
「薫、幸運を祈る」
親友への励ましをその短い言葉に彼は込めた。
「ああ、ありがとう」

親指を立て、誇らしげに薫は胸を張ってみせた。
その歩いていく背中を見ながら、堂野は自分も出していた親指を引っ込める。
彼は自分に出来ることはこれまでだ、と思っていた。後は劇の成功を願うことだけだ、と。

場内のざわつきがそこまで聞こえてくる。
アナウンスが入り、観客たちへの説明が始まった。

始まりは秒読みだ。
舞台上の放送室に上った有川がそこから見下ろして、全員の顔を見下ろした。
口に手を当て、大声で、
「みんな、やるわよ！」
と一言。
開演のベルは鳴った。

第十七話　天使の声にアンダーライン（前書き）

６／２３　加筆修正しました。他の人の視点も入れて内容を広げたつもりです。
おかしなところがあれば、教えてください。
最終話の方も早いうちに修正しようと思っています。

第十七話　天使の声にアンダーライン

幕が上がる瞬間というのを、薫は練習を通じて何度か体験してきたのだが、今回は違うと思った。
誰かがスイッチによって幕を上げる。
電動モーターが低く回転する音が聞こえ、明かりが消えた会場と舞台が繋がるのである。

足元からぽっかり開いた闇に吸い込まれそうな、そんな心地さえした。

観客からの拍手が聞こえてくる。
だが、薫にはそれが聞こえていて聞いていない。
自らがこれから喋るべき台詞を、君恵の声を脳内で再生させ、集中の頂点にいた。
朝を連想させる穏やかなＢＧＭが流れ始めると、ついに出て行く瞬間だ。
場内に有川のナレーションが響く。

「むかしむかし、あるお城に、美しい黒い髪をした、白雪姫というお姫さまが住んでいました。そのお姫様には意地悪な継母がおり、彼女は恐ろしい魔女でもありました。そんな継母に毎日毎日、白雪姫は召使いのようにこき使われていたのです」

それが合図で、薫は舞台の影から中心まで歩み行く。粗末なつぎはぎだらけの服を着て、手には粗末な木の桶を持っている。

「さあ、今日もお城の掃除を始めなければいけないわ」

ゆっくりスキップするように中央の井戸に近づく。
演技は有川から習ったとおりだ。
普通の行動よりはオーバーに、だが、あまりそれも過ぎると、不自然さが目立つ。
バランスが大事だ。
観客の顔を見る余裕はなかった。

ライトが当たるので、どちらにしても見えにくいのだが、その声はきちんと薫の耳に届いている。

「おい、あれ本当に男子かよ」
「え、かわいいじゃん」
「女の子じゃないの？」
「声も高いし、男の子の声には聞こえないわ」
「小さいし、きれいな顔してる」

こんなざわつき。
普段の薫なら、顔が真っ赤になるほど恥ずかしい状況だが、取り乱すわけにはいかない。
その意識が薫を演技に集中させていた。
今、自分は小野村薫ではない。
白雪姫だ。
お姫様なんだ。
雑念は、ここで断つ。
手に箒を持ちかえ、その場を掃除するシーンだ。鼻歌を歌いながら、軽やかにステップを踏んだ。
たったそれだけなのに、額にじんわりと汗が滲む。体が温まってきたのだ。

しばらくすると、王子役の男子が登場し、通りすがりに白雪姫に

声をかけた。薫扮する白雪姫は突然のことに動揺し、お城の中に戻ってしまう。
それで、この場面は終わりだ。
幕が一旦閉じ、魔女の登場場面に移る。

舞台の袖に戻り、大きな吐息が漏れた。
なんともいえない安堵感に、薫は包まれていた。
どうにか何事もなく劇がスタートしたことに肩の荷が下りたのだ。

「どうだ？　本番の劇の感覚は」

堂野が背後から訊いた。彼は客席からではなく、ここで見てくれているらしい。
それが薫に安心感を与えてくれた。
平気な様子を見せるためにへらへらっと笑ってみせる。

「うん、緊張してるけど、なんとかなるもんだな」
「そうか、それはよかった。客の反応もいいみたいだ」

堂野は幕の隙間からそっと外を眺めた後で、目配せをした。
そんな彼に薫は今しがた、自分の胸の内に膨らんできた何ともいえない幸福感を口にしようと彼を呼んだ。

「亮介」
「何だ？」
「なんていうか、こういうことも悪くないな。つい数週間前までは演劇のことなんて何も知らなくて、全くの素人だったけど。今は役を演じるのも面白い、そう感じてる俺がいる」

そう語りながら、薫はかつてない自信が満ちているのが分かる。

自らの劣等感に落ち込んでいた頃がまるで嘘のように、今は以前のように深く考え込むことなどない。
明らかに今の薫は昔の薫よりも成長していた。それは、前で見つめている堂野から見ても分かる。

「これが、男子の役なら文句ないんだけど」

と薫は苦笑いする。

「……」
「ともかく、須藤さんが見てた景色ってこういうことなんだなって、そう分かっ、て、ごほっ、ごほっ」

途端、強く咳き込む。

「薫！」
「大丈夫、だって。ちょっと埃っぽかったのかな」

駆け寄る堂野を手で止めて、薫は喉を触った。特に異常があるようには思えない。
試しに、君恵の声を出すが、問題はなかった。

「小野村先輩、そろそろ出番ですから、こっちに来て下さい」

そこへ奥山が迎えに来る。
舞台が次の場面に移るらしい。

「分かった、すぐに行くよ」
「薫、やっぱりまずいんじゃないか？」

心配そうに目を細める親友の言葉に無言で首を振る。

「何言ってるんだよ。いまさらここでストップなんてしてどうするんだ？　俺以外に役を演じれる人間なんていないんだぞ」

「それはそうだが」

薫は自分で自分に渇を入れると、立ち上がった。きっとこの咳はただの気のせいだ。

一時の不調に過ぎない。

舞台はその後も何の問題もなく進んだ。

やはり堂野の言うことは杞憂にだったに違いないと薫は思い始めていた。

そればかりか、そんなことも忘れ、いまや薫は一種の余裕を持って演技に集中することが出来た。

ステージの一列目、一番真ん中の席に君恵がいることが分かったのである。

彼女は他の観客と同じように手を叩いては、舞台で起こる物語を反射するライトに光らせた瞳で見ていたのだ。

そこに、薫の不安は消えた。

彼女に自分の精一杯を見せるために集中力が増していく。

それによって、途中で危うく咳が出そうにもなったが、何とか堪えることが出来たのである。

怖いもの無しの感情が、薫を背中から押し、勇気づけていた。

場面は気がつけば、白雪姫が森の中をさまよい、小人たちの家を見つけるところまできていた。

なんとか、この調子で最後までいけるはずだ。
薫はそう確信していた。

しかし、このとき舞台の袖にいた堂野が他の演劇部員の影までこっそり移動し、そこから姿を消していたことに彼は気がついていなかった。

須藤君恵は目の前で繰り広げられる物語にただただ、呆気にとられたように舞台を踊るように駆け回る役者たちを眺めていた。

まるでそれは演技をしているのではなく、人々が様々な衣装で参加する舞踏会にも見えたのだ。

そんな人々の中で白雪姫を演じている薫を、輝いている彼を見つけ、君恵は親になったような気分で誇らしく、うれしい反面、どこか、報われない悔しさも胸の内に残っていた。
あの日、事故に遭い、失われてしまった今日という日の舞台。

君恵はその瞬間、ギプスが巻かれた足元が疼いた気がする。

病室に来てくれた皆には精一杯自分が持っている元気でもって、明るく振舞ったつもりだ。
見舞いに来てくれる誰もが、出演するはずだった舞台のことを慰めてくれた。演劇部の有川や他の部員はもちろんのこと、クラスメイトたちや、両親も気にかけてくれた。

皆一様に、気を落とすな、とそう優しく語りかけてくれた。

嬉しかった。
けれど、
やっぱり残念な気持ちは拭えなかった。

ほんの些細な出来事で確定していたはずの未来も変わってしまう。
分かっていたつもりで、覚悟は出来ていなかった。
掴んだはずの主役は指の間を水のようにすり抜け、それと引き換えたのは引き摺っている足。

自分なしで進行していく劇に置いてけぼりにされていく、あの感覚。
あのえもいわれぬ寂寥感(せきりょうかん)。
君恵は君恵なりに辛かった。
泣いてしまおう、と思ったこともある。

そして、舞台を見つめるそんな君恵の瞳には幼い頃の記憶が蘇っていた。
いつのことだったのかは覚えていない。
それくらい幼いころだ。
両親と初めて演劇なるものを見に出かけた。
車に乗って、確か夜のことだった。

大きなホールの中央辺りに座り、これから何が始まるのかと息を呑んでいた君恵に飛び込んできたのは、圧倒的なパワーだった。
舞台で役を演じている一人一人の役者は明らかに常人の域を超えているように君恵には感じたのだ。

舞台を所狭しと駆け回る役者、ぶつかってくるような声。
観客たちが静まり返っているのは、ただ静かにしなければならないからじゃない、負かされているんだ、と君恵には思えた。

これだけ大勢の人々を圧し、楽しませ、感動で包み込む超人的なエネルギーに成すすべもなくしびれていた。

幼い君恵にはその出来事が忘れられない記憶のフィルムに焼きついたのだ。

それから演劇をしてみたいと思うようになったのも当然そのことが理由だった。

舞台からはどんな景色が見えるのだろう。

そこに立つのはどんな気持ちだろう。

無垢な好奇心は一度興味を持つと言うことなど聞かない。

中学校に入学した君恵は、迷わず演劇部のドアを叩いていた。

そして、今、あの時確かに感じていた鮮やかな感動の色が目の前で広がっていくような感覚にとらわれている。

薫が自分の代役をしてくれているからだろうか？

ああ、やっぱり演劇っていいものだなあ。

なんて思って手を叩いてる。

そして、そんな君恵の背後で大量の冷や汗を流し、座っている一人の中年教師がいた。

本人としては腕組みをして平静を装っているつもりなのだろうが、傍から見ればどうにも落ち着きがなくそわそわしているように見えた。

「村松先生、どうかなさったんですか？」
やはりそれを不審に思ったのか、隣の若い女性教師が訊いた。主に音楽の授業を受け持っている井上先生だ。
「ご自分が受け持ってらっしゃるクラブの発表の場だというのに、ずいぶんと顔色が悪いですよ？」
「う、うん？　そうかね？」
「確かに、妙に汗も掻いているようですね。体調が優れないので？」
これは薫たちの担任である今田先生だ。怪訝そうに、額を拭う隣の教師を見ている。
「いえ、生徒たちが失敗しないか不安でしてね。見ていると安心できんのですよ」
そこへ、白雪姫の衣装を着た薫が舞台に踊り出た。照明の光が一斉に彼に向く。
村松はそこでさらに表情を強張らせた。ぐっと呼吸が詰まり、喉の奥からおかしな音が聞こえた気がする。
今田先生はそこで、おお、と拍手する。
「また登場だ。井上先生、私が受け持っている生徒の小野村ですよ。クラスではそれほど目立つ生徒ではないんですけどね、こうして舞台の上で演技していると才能があるように見えますね」
「そう何度も説明しなくともさっきから見てますよ。本当にきれいな顔立ちをした子ですね。声だってこんなに高いし、女の子だって言われたら、信じてしまいそうです」
すると、その発言に対し、今田先生は静かに、と指を口に当てる。

「それは禁句ですよ。小野村、そのことをかなり気にしてるみたいですから。教師としては落ち込ませるとまずいです」
「あ、そうですか。すいません」
「でも、最近はそれでも少しは成長したみたいですよ」
「え？」
「以前みたいに、クラスでからかってくる人間にうんざりだという溜息をついたり、煙たがっている様子も見なくなりましたから。それまでは、あまり過度のちょっかいだと、僕が注意してたんですけど、そういうこともなくなりました」
「へえ、それはよかったじゃないですか」

井上先生の視線が今田先生から離れ、舞台の上の薫に向けられた。偽りを含まない彼の笑顔は彼女の目にもしっかりと映し出されている。

「たぶん、彼なりに自信がついたんじゃないですかね。どういった理由かは知ることは出来ませんが、それが周りの人間にも行動を改めさせているのかもしれません」

自分で言いながら、納得するように今田先生は頷く。
すると、がたり、と音がして椅子から村松が立ったのが分かった。
本格的に体調が悪くなったのか、足を震わせた様子で、

「少し、腹が痛くて……トイレに行ってきます」
「はあ……」

彼はそういい残し、そそくさとその場を立ち去っていく。
それを眺めながら、

「どうしたんでしょうね？」
「さあ？」
後に残された二人の教師はお互いの顔を見合わせ、首を捻っていた。

ついに物語は終盤を迎えていた。
舞台の上には、花束に包まれたガラスの棺が置かれている。
白雪姫が魔女からのりんごを齧り、死んでしまった後のクライマックスシーンだった。

後に残された台詞はもう多くない。
横たわった薫の周りに小人たちが花束を置いていく。
物寂しい雰囲気に舞台も観客たちも静まり返っていた。
目を閉じたままの薫は、ゆっくりと鼻で息をしていた。咳の気配はない。

ここまでくればもう安心だろう。
鬼が見えなくなるところまで逃げ切った気分で薫は思った。

しばらくして、その沈黙を破り、王子役の男子生徒がその場に駆け込んでくるのが分かった。状況を知り、悲しみに打ちひしがれた演技をしている途中だろう。
棺の中にも台詞を言う声が聞こえてくる。

しばらくして、まぶたの裏側から、ライトがゆっくりと移動してくるのを感じる。王子が近寄ってきているのだ。
今まで息を潜めていたようなＢＧＭが次第にボルテージを高めるように大きく強く響き始めた。

薫は次の台詞を脳内で繰り返し思い出していた。
あの鈴の音のような君恵の声だ。
「王子様、あなたが助けてくださったのですね」
もう何度も練習でやってきた台詞だった。いい間違えるはずもない。
ましてや薫には、他人にはない特別な能力がある。失敗なんて断じてありえない。
王子役の生徒が棺まで上がってきた。嘆きの言葉をつぶやき、眠っている薫を抱き起こし、キスをする（もちろん、キスをする振り）。
後は、それで生き返った言葉を王子に言えばいい。
たったそれだけのシーン。
ゆっくりと3秒間、自分の中で数を数える。
3、
2、
1、
タイミングを計って、眠りから覚めるように薫はうっとりした様子で目を開ける。
上から降り注ぐライトの光で一瞬、目を細めるがすぐに我慢する。
そして、声を出した。
「……」

第一声を出した。

「……」

会場から小さくどよめきが起こるのがわかった。
それもそのはずである。薫は口を開いているのに、そこから出てくるはずの言葉が出てこないのだから。

あ、あれ？
どうして？

王子役の生徒もどうしたことかと困惑している。こっそり台詞を囁いてくるが、もちろん忘れているわけではない。

どうしたことだ？
脳内で君恵の声が再生されない！

その瞬間、薫は思い出した。
以前、今と同じような状況が起こったことがあったのだ。

あれはまだ、アンダーラインと声まねの力を上手く使いこなせていないころだった。
手当たり次第、練習のために他人の声にアンダーラインを引き、声で真似を毎日のように続けていた頃、ある日突然声が出なくなったことがあったのだ。

そのときは一日すれば元通り声は出るようになったが、その前触れと思える現象があった。

それが、原因不明の咳である。

今の状況はそのときのことと酷似していた。
間違いない。当時と同じ症状だ。

まずい、まずい、まずい。

薫は焦るが、どうすることも出来ない。どうがんばっても、擦れたような小さな声が精一杯だ。

一巻の終わりか、万事休す、か？

視線が泳いだ先に有川や、不安そうな顔をする山下、馬場、奥山も見える。なぜか、その背後で、タクトを持ったままの芦沢も見えた。

時間が凍りついている。

薫にしてみれば、もう神に頼むしかなかった。さもなくば、劇はこのまま緊急で中止だ。

どうか、神様。薫は消えそうな思いでそう祈った。
どうかお救いください、と。

「……王子様……」

耳を疑った。
薫はぼうっとしながら、その中に吸い込まれてしまいそうな白いライトを見ていた。

声が聞こえた。
神様？　いや、これは、

「天使の声」だ。

薫はそう確信する。

「王子様」

今度はもっと大きな声で。

「あなたが助けてくださったのですね」

確かにそれは、スピーカーから会場に響いていた。
薫は目を閉じ、その声に酔いしれる。

ああ、そうか、分かった。

妙に聞き覚えのあるあの包まれるような優しい声の正体が。

振り返れば、マイクを持った須藤君恵がステージの袖に立ってい

た。

第十七話　天使の声にアンダーライン（後書き）

やっとこさ、ここまで書き上げました。正直、へとへとです。人生でここまで連続して、一気呵成に小説を書いたのは初めてでした。次回で最終回となります。ここまでお付き合いいただいた方々、ありがとうございました。

最終話　その言葉にアンダーライン（前書き）

最終回です。

以前の話を修正しました。読みやすいように会話と地の文を分けました。今まで読みづらかった方、申し訳ないです。

６／２３　最後があっさりだったというご意見をいただいたので、修正してみました。なんとか十七話と同じ日に修正することが出来てよかったです。

変化した点は十七話と同じように他の人のエピソードを追加してみました。これでどんな感じに変わったか、自分では判断しづらいため、もっとこうした方がいいというご意見がございましたら、お聞かせください。

最終話　その言葉にアンダーライン

「ふう、これで全部かしら？」

ダンボール箱に入った荷物を部室の倉庫に置きながら、有川久美は重たい吐息を漏らした。

「ええ、衣装も山下先輩が持ってきてくれましたし、小道具もそれで揃っているはずです」

蛍光灯の明かりで照らされた部屋に立っている奥山紗江がそう言った。一仕事を終えた後とは思えない元気のある声である。

「どっこいしょ、はあ……」

その背後で一際重そうな箱を山下が床に下ろした。階段も上って来たので、完全に息があがり、両肩をぶらんと垂らしている。

「はい、ご苦労様」

「あ、ありくわ、お前、どこまで俺をこき使うんだよ。はあ、はあ、残業代は、もちろんでるんだろうな」

彼はダンボールに肘をついて有川を睨む。すると彼女は指で眼鏡をくいっと持ち上げ、

「ご愁傷様、そんなものはびた一文、払いませんから」

と高らかに宣言した。

「ぐぬぬ、の、呪ってやる。ま、末代まで」

歯軋りをする山下。

しかし、そんなことは気にせず、彼女は優しく諭した。

「あなた、分かってるわよね、これは罰だってこと。一週間は演劇部のために働きますって宣言したんだから、その場にいた演劇部員全員が証人よ」

その言葉に周囲にいた部員たちが深々と頷く。うう、と山下の絶望の呻きが聞こえる。

「それにそんな無駄口叩けるくらいなら、まだ働けるわね？」

「無理、もう虫の息だから」

すると彼は、ぐでんと四肢を投げ出し、死んだ振りをする。

「ああ、本当だ。死んでるみたい」

いたずらが好きな有川はにやついて、そんな山下の脇をくすぐってみる。

「……ふ、ふふふふ、や、やめれ」

堪えきれず苦しそうに笑い出す山下の顔はひくひくと痙攣している。

「そう言えば、他の人たちはまだですかね。馬場君も帰ってこないし、誰か知ってる人はいますか？」

奥山が倉庫の入り口を見ながら倉庫の中にいる他の部員に訊ねた。
「さあ？」
「知らないけど？」
帰ってくる返事に手がかりはない。
「ううむ」
山下をくすぐるのに飽きた有川は顎に手を当てる。彼女は特に彼らに特別な指示をしていない。そのため、もうとっくに帰ってきていいころなのだ。
すると、ドアの向こうから大勢の足音が向かってくるのが分かった。どたばたと笑い声も聞こえてくる。
奥山はすぐに気がついた。
あの遠慮を知らない馬鹿笑いは彼に違いない。不吉なものに思えて、耳を塞ぎたくもなる。
すぐにバタン、と大きくドアが開け放たれ、
「みなさん、お待たせしました」
馬場と数名の部員が入ってきた。
「……何よそれ？」
見ると、彼らは両手に大量の何かを抱えて入ってきていた。よく冷えている筒状の缶を全員に手渡している。
「ジュース？　っと」

奥山は放り投げられたそれを上手くキャッチする。
「そうっス、小野村先輩の担任の今田っていう先生がおごってくれました」
「今田先生が？」
ジュースをもらって残された力が戻ったのか、顔を上げた山下が訊く。
「ええ、今日の劇がとても良かったって。そう言ってくれました。それから村松先生が体調が悪そうだったけど、大丈夫かって？」
「村松先生、体調が悪かったんだ」
これは二年の男子生徒の言葉だ。
「なんだか、劇の途中で帰ったらしいですけど」
その事情をなんとなく察した数人は、他の人間が不思議そうに喋っている中、意味ありげにこっそり笑みを浮かべて、目配せしあった。
「さて、皆に行き渡ったところで、乾杯、といきたいところですけど。今回の主役はどうしたの？」
有川が掲げかけた缶ジュースを中途半端まで持ち上げて止めた。今日一番の主役がいないのであれば、先に乾杯をしてしまうのは常識的に配慮に欠ける。
「そうだよな、小野村がいない」

「須藤先輩もいませんし、あ、堂野先輩も」
「どこに行ったんでしょう？」
「はあ、じゃあ最後に見た人は？」

すると、全員が困った顔で顔を見合わせ始めた。どうやら誰も行方を知らないらしい。

「探して来ましょうか？」

一年の男子生徒が手を挙げる。
しかし、それに有川は首を振った。

「いいわよ別に。君恵と小野村君はなんとなく事情が分かる気がするし、それから、きっと堂野君はそのお節介に行ってるのよ」
「どういうことですか？」
「いいの、それより皆で乾杯しましょ」

有川はそうごまかして、再びジュースを掲げる。

「今年の劇の成功を祝しまして……皆で、せーの！」

それに合わせて、狭い室内に輪を描くようにジュースを持った部員たちがはしゃぎながら全員が合唱した。

「かーんぱーい！」

くしゅん。
ちょうどそのころ、一人、屋外でくしゃみをし、鼻を啜っている少年がいた。

長身の姿が遠くからでもよく目立つ、堂野亮介である。

「あれ、風邪でもひいたかな？」

と鼻を擦る。

校舎の倉庫で有川が自身の噂をしているとはまさか、知る由もない。

彼は体育館の入り口に立ち、ドアを背もたれにしてただ突っ立っていた。

なぜそんなことをしているかと言うと、

『おねがい、ここで誰も入れないように立っているだけでいいから』

と数十分前、両手を合わせた君恵から頼まれたからだった。

堂野は彼女から詳しい事情を聞き、そういうことなら、と承諾したのだ。

しかし頼まれたとはいえ、こんな役を引き受けるなんて、俺もお人よしだなあ、と思い、手持ち無沙汰に口笛を吹き始めた。

木枯らしが吹き始めた屋外はかなり寒くなる。出来るだけ身体を温めようと、堂野は首をすぼめた。手も擦ってみた。

堂野はいったい今、この体育館の中で彼女はどんなことを話しているのだろうか、と想像している。

そこへ、一人の生徒が渡り廊下を歩いて向かってきた。どうやら荷物を持ってきたらしい。

堂野は君恵に言われた通り、目の前で立ち止まった生徒に説明する。

「ごめん、今は作業中で中に入れないんだ。荷物は俺が中に運んでおくからそこに置いておいてよ」
「……そうですか、分かりました。じゃあお願いします」

特に不審がる様子もなく、その生徒は荷物を置き、引き返していった。
ほっと胸を撫で下ろす堂野。
何の作業をしているのか、と訊かれていたら答えに詰まるところだった。

「ふう……」

再び暇になった彼は、ポケットから文庫本を取り出し、しおりを挟んでいるページを開いて読み始めた。そこへ、舞い降りてきた一枚の枯葉が本の上に落ちてくる。
乾燥したかさり、という音を立てた。
彼はそれを手に取り、そっと空を見上げた。

冬が近づき、暮れが早くなった空はすでに雲に鮮やかなオレンジが反射し始めていた。

「上手くやれよ、薫」

中にいる親友の名前を呼んで、堂野は文字を目で追いながら口笛を再開する。

薫の目の前には明かりの消えた舞台。
静まり返った体育館の座席に座っている。

あれから、つまり白雪姫の劇からはずいぶん時間が経っている。
今は文化祭も無事に終了し、生徒たちが客の帰った校内の後片付けを行っている最中だった。
体育館の作業はあらかた終わってしまっているので、他の生徒の姿はない。
薫の隣に座っている、彼女を除いては。

「もう、声の方は大丈夫？」

隣の君恵が薫の調子を気遣って訊いた。少し顔を覗き込むように身体を倒した彼女からは、どこか優しい匂いがする。

「この通りだよ」

薫から出た声はとても小さく、至近距離でようやく聞き取れるほどだった。
今の薫に、大声を出すことは砂漠の砂から水分を抜き取るくらい難しいことなのだ。

「やっぱり今まで無理して声を出してたんでしょ？」

そう言って、彼女は悲しそうな顔をする。
おそらく君恵は自分の代役を薫が引き受けたことによって、薫が無理をしていたと思ったのだろう。

それを察知した薫は首を振る。

「いや、そういうわけじゃないんだ。そうじゃなくて、ただ、これは、単なる体の不調さ」

「不調？」
「そう、そういうこと」
すると、その場が少し沈黙する。
そういう時は大抵、居心地が悪いものだ。だから、薫は彼女への感謝の言葉を探した。
「それはそうと、さっきはありがとう」
「私が代わりに話したこと？　そんなに何度も感謝されることじゃないよ」
彼女は視線を逸らしながら、はにかむんだ。
「でも、あの時は本当に危なかったよ。もしあのままだったら、と思うとぞっとする」
薫が話しているのは、白雪姫の劇の途中で声が出なくなり、機転を利かせた堂野が君恵にマイクを持たせて台詞を言わせたことだ。
それにより、薫は彼女の声に合わせて口を動かすことで、なんとか危機を脱したのだった。
劇はそのまま無事に終了し、大成功のうちに幕を下ろすことが出来た。
その後、薫と危機を救った君恵の二人には演劇部からの惜しみない拍手が送られたわけなのだが、薫としてはなんとかなったことへの安堵感から、すぐにでも倒れてしまいそうな気分だった。
それが済み、ようやく椅子に座り込んだ薫に対し、今度は珍しく堂野からの叱責が待っていた。

「やっぱり俺が危険視した通りだった」

というわけである。

薫は白い目で自分を見つめる親友に何度も擦れた声で謝ったのだが、彼の機嫌は中々元通りとはいかなかった。

「声の調子が危ないと分かっていながら、なんら対策を取ろうとしなかった薫の責任は重い」

びしり、と指を差された。

彼の言うことはもっともで、薫は返す言葉もない。

それと同時に、堂野に以前、声まねのやりすぎで声が出なくなったことを話しておいてよかった、と薫は肝を冷やしていたのだ。

「ともかく、無事に終わってよかった」

と大きな溜息をつく。

「もうこんなことこりごり？」

そう皮肉っぽく微笑んだ君恵から訊かれて、薫はうんざりした様子もなく、すぐに首を振った。

なぜなら、彼にはそれを否定する確固とした結論があったのだ。

「なんていうか、違う世界を知った気分なんだ。演劇をやってみて、普段経験しないようなことが分かった。同時に自分のことも理解できた気がする」

「……へえ」

「須藤さんがあんな事故にあって、それで今日まで本当にいろんな

ことがあった。多分、俺の人生の中でもこれほど波乱に満ちた日々は見当たらないんじゃないかな。突然、演劇の代役に抜擢されるわ、先生からは狙われるわ、挙句、劇の本番中に声が出なくなった」
「ふふ、そうだね」
「その間に落ち込んだり、自暴自棄になったり、驚いたり、裏切られた気分になったり、もうめちゃくちゃだったよ」

薫はそこで頭を掻き毟ってみせる。

「でも、一つだけ、さっきも言ったけど自分のことで分かったこと」
「それは何？」
「こんなチビで、ガキっぽくて、女の服が似合うような、かっこ悪い俺でもさ、誰かのためにやれることがあったってことかな」

そう言ってのけた彼の表情にはそれ自体をコンプレックスと思い悩んでいた頃の暗い影はない。
心地良いほど晴れやかな顔をしていた。

「それで、俺に何か用があったの？」

しばらくして、薫が訊ねた。
そもそも二人がここに居る理由である。
実は、文化祭の片付けが終わりかけたころ、薫は突然、隣のクラスからやってきた君恵に体育館に来て欲しいと呼ばれたのだ。

そして、こうしてここへ来て二人で話をしているのだが、君恵からはその用事が何なのか、まだ聞いていない。

「ああ、そのこと？」

すると君恵は少し笑いかけたようだ。薫はそれを不思議に思う。

「うん、何？」

「それはねえ……」

彼女がそう言って、ほとんど瞬きの間だった。

薫には何が起こったのか分からなかったが、気がつけば、自分の顔を覗き込んだ彼女の顔が目の前にあったこと。

それだけは認知出来た。

「……」

口元に触れる一瞬のぬくもり。

時計の針が刻む、僅かな刹那。

一粒の雨が落ちた水面。

薫は君恵とキスをしていた。

そして、ゆっくりとその感触が離れていく。

「こ、これ、は……」

椅子に乗ったまま後ろにひっくり返ってしまうかと思ったほど驚いた薫は、呂律の回らない状態で、かろうじてそう訊いた。

今起こったことを確かめるように、今しがた、彼女が触れた唇に手を当てる。

君恵はというと、頬を紅潮させたまま、俯き、恥ずかしそうにしている。

「ええっと、その、なんていうか、どう言えばいいのかな……」

彼女も自身の行動に動揺しているように見える。

「……」

「今回のことのお礼っていったら、いいのかな？」

「お礼……？」

「そう、それもあるし、舞台に立ってた小野村君、かっこよかったよって言いたかったんだ」

かっこよかった？

自分が？

薫は耳を疑う発言だった。

「私、何してるんだろう。ごめん、驚かせたよね。こんなことって、こんなに突然するものじゃないし」

耳元まで、真っ赤にして顔を覆い隠す君恵。

「そ、そんなことないよ、全然」

あたふたと両手を振って、薫は否定する。

「その、かっこいいって言われて、うれしいし……だって、それも

須藤、さんに……」

最後の方は小さくなり、聞き取りづらくなる。

「あ、ううん、なんでもない」

自分が言いかけていることに首を振る。

この状況にして、自分が抱いている彼女への想いを告白できない薫。椅子に座ったままおどおどするばかりで、やはりこの少年、煮え切らない。

「それだけ？」

と君恵から続きの言葉を催促される始末だ。

「え？　それだけって？」

「……もういいよ。今日は」

どこかがっかりした様子の君恵に薫ははっとした。

もしかすると、彼女はもう自分の思っていることなど全てお見通しで、薫がそれを口にしてくれることを待ち望んでいるのではないか、と。

いや、これは妄想が過ぎるだろうか。

「ねえ、そろそろ皆のところに戻ろうっか。私達が戻らないと心配するだろうし」

そう言って君恵は松葉杖を持って立ち上がる。今の出来事がなかったかのように、元気な声だ。

「聞いた？　今日は有川さんの家で演劇部の打ち上げがあるんだって。堂野君や、山下君も呼んでおいでよ」

そして、どこか楽しそうに鼻歌を始める彼女。

「あ、うん。絶対行くから」

薫も立ち上がり、彼女の後を追いかけた。そして、彼女がこちらを向いていないときにこっそり、自分の頭を小突く。

まだまだだな、俺も。

男らしく、告白が出来るまでの道のりは遠そうだ。

それまで、もしかすると、彼女を待たせることになるかもしれない。

心の中でそんなことを思って笑った。

だから、今の自分に出来ることはこれくらい。

松葉杖をつく、彼女の歩調に合わせながら、

脳内で繰り返される綺麗に澄んだ声。

彼女の言葉にそっと、

薫はアンダーラインを引く。

最終話　その言葉にアンダーライン（後書き）

何かと分からないことだらけの初投稿でしたが、無事終わることが出来ました。
新米の未熟者ゆえ、読者に対して至らぬところがいろいろあったと思います。すいません。
なんだか最後まで謝罪していましたが、ここまでお読みいただき本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9366g/

君の言葉にアンダーライン

2010年10月11日02時41分発行